掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

・十郎ヶ谷遺跡
・入込遺跡
・向山横穴墓群
・浅間神社古墳群３号墳
・前山横穴墓群
・寺ヶ谷横穴墓群

２００３

掛川市教育委員会

図版 1

向山横穴墓群全景

浅間神社古墳群 3 号墳主体部全景

図版 2

浅間神社古墳群 3 号墳全景

浅間神社古墳群 3 号墳出土埴輪

図版 3

前山横穴墓群全景

前山横穴墓群 3 号墓墓道

図版 4

寺ヶ谷横穴墓群横穴墓全景

横穴墓検出状況

掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

・十郎ヶ谷遺跡
・入込遺跡
・向山横穴墓群
・浅間神社古墳群３号墳
・前山横穴墓群
・寺ヶ谷横穴墓群

２００３

掛川市教育委員会

例　言

1．本書は、掛川市長谷土地区画整理用地内において平成８年度から平成10年度にかけて発掘調査を実施した十郎ヶ谷遺跡、入込遺跡、向山横穴墓群、浅間神社古墳群３号墳、前山横穴墓群、寺ヶ谷横穴墓群の発掘調査報告書である。

2．調査は、土地区画整理事業に先立つ緊急発掘調査で、調査費用を掛川市長谷土地区画整理組合が負担し、掛川市教育委員会が実施した。

3．発掘調査に際して、掛川市長谷土地区画整理組合の方々に多大な御理解と御協力を頂いた。

4．現地調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

　向坂鋼二氏、鈴木敏則氏、鈴木一有氏、木村弘之氏、永井義博氏、松井一明氏、白澤崇氏、松下善和氏、溝口彰啓氏

5．発掘調査は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。

6．調査の記録は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　例

1．挿図における方位は、座標の北である。

2．本書で使用した遺構名称は次の意味である。

　ＳＢ：竪穴住居跡　　ＳＤ：溝状遺構

　ＳＦ：埋葬土坑

3．遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

4．横穴墓における左壁・右壁という表現は、玄室奥壁からみた左右である。

5．浅間神社古墳群３号墳出土の埴輪・須恵器の小破片の実測図は、断面形を中央に示し、断面の左に内面の拓影を、右に外面の拓影を示してある。

目　次

Ⅰ　十郎ヶ谷遺跡……1
　1．調査の概要……1
　2．遺構の概要……1
　3．遺物の概要……1
Ⅱ　入込遺跡……8
　1．調査の概要……8
　2．遺構の概要……8
　3．遺物の概要……8
Ⅲ　向山横穴墓群……12
　1．調査の概要……12
　2．遺構の概要……12
　3．遺物の概要……13
Ⅳ　浅間神社古墳群３号墳……34
　1．調査の概要……34
　2．遺構の概要……34
　3．遺物の概要……36
Ⅴ　前山横穴墓群……78
　1．調査の概要……78
　2．遺構の概要……78
　3．遺物の概要……80
Ⅵ　寺ヶ谷横穴墓群……111
　1．調査の概要……111
　2．遺構の概要……111

附載
Ⅰ　西池古墳出土の鉄製品……118
Ⅱ　山脇横穴墓群出土の鉄製品……125
Ⅲ　本村横穴墓群Ｅ群出土の金属製品……133

挿図目次

十郎ヶ谷遺跡
第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図……2
第２図　位置図……3
第３図　調査区全体図……4
第４図　遺構・遺物実測図……5
入込遺跡
第１図　調査区全体図……9
第２図　遺構・遺物実測図……10
向山横穴墓群
第１図　位置図……14
第２図　横穴墓群全体図……15
第３図　１号墓実測図……16
第４図　２号墓実測図……17
第５図　３号墓実測図……18
第６図　土器実測図(1)……19
第７図　土器実測図(2)……20
第８図　土器実測図(3)……21
第９図　鉄製品実測図……22
第10図　玉類実測図……23
浅間神社古墳群３号墳
第１図　位置図……38
第２図　墳丘図……39
第３図　主体部実測図(1)……41
第４図　主体部実測図(2)……42
第５図　墳頂部埴輪出土状態実測図……43
第６図　西側裾埴輪出土状態実測図……44
第７図　東側裾埴輪出土状態実測図……45
第８図　埴輪実測図(1)……46
第９図　埴輪実測図(2)……47
第10図　埴輪実測図(3)……48
第11図　埴輪実測図(4)……49
第12図　埴輪実測図(5)……50
第13図　埴輪実測図(6)……51
第14図　埴輪実測図(7)……52
第15図　土器実測図……53
第16図　鉄製品実測図(1)……54
第17図　鉄製品実測図(2)……55
第18図　鉄製品実測図(3)……56

前山横穴墓群
第１図　位置図……81
第２図　横穴墓群全体図……82
第３図　墳丘状遺構実測図……83
第４図　１号墓実測図……84
第５図　２号墓実測図……85
第６図　３号墓実測図(1)……86
第７図　３号墓実測図(2)……87
第８図　４号墓実測図(1)……88
第９図　４号墓実測図(2)……89
第10図　土器実測図(1)……90
第11図　土器実測図(2)……91
第12図　鉄製品実測図(1)……92
第13図　鉄製品実測図(2)……93
第14図　玉類実測図……94
寺ヶ谷横穴墓群
第１図　位置図……112
第２図　地形図……113
第３図　遺構・遺物実測図……114
西池古墳出土の鉄製品
第１図　ＳＦ01（左）・ＳＦ02（右）平面実測図……119
第２図　ＳＦ03（左）・ＳＦ04（右）平面実測図……120
第３図　鉄製品実測図(1)……121
第４図　鉄製品実測図(2)……122
山脇横穴墓群出土の鉄製品
第１図　１号墓平面実測図……126
第２図　２号墓平面実測図……127
第３図　３号墓平面実測図……128
第４図　鉄製品実測図(1)……129
第５図　鉄製品実測図(2)……130
本村横穴墓群Ｅ群出土の金属製品
第１図　１号墓(左)・２号墓(右)平面実測図……134
第２図　３号墓平面実測図……135
第３図　鉄製品実測図……136
第４図　金銅製品実測図……137

挿表目次

浅間神社古墳群３号墳
第１表　鉄製品法量表(1)……57
第２表　鉄製品法量表(2)……58

図版目次

十郎ヶ谷遺跡

図版１　上　調査区全景（西から）
　　下　土坑群全景（西から）
図版２　上　ＳＤ01遺物出土状況(南東から)
　　中　ＳＤ01完掘（南東から）
　　下　ＳＦ02遺物出土状況（西から）

入込遺跡

図版１　上　ＳＢ01全景（南から）
　　中　ＳＢ01南西部分（南から）
　　下　ＳＢ01南東部分（南西から）

向山横穴墓群

図版１　上　横穴墓群全景（南東から）
　　下　１号墓全景（東から）
図版２　上　１号墓閉塞状況（墓道から）
　　中　１号墓玄室内遺物（左壁から）
　　下　１号墓墓道遺物(墓道先端から)
図版３　上　１号墓玄室内工具痕(左壁から)
　　中　１号墓閉塞施設（墓道から）
　　下　１号墓排水溝（墓道から）
図版４　上　１号墓墓道（玄室から）
　　中　２号墓閉塞状況(右壁方向から)
　　下　２号墓玄室内遺物（左壁から）
図版５　上　２号墓玄室（右壁方向から）
　　中　２号墓羨門（墓道から）
　　下　２号墓閉塞施設(右壁方向から)
図版６　上　２号墓全景（奥壁方向から）
　　中　３号墓閉塞状況(右壁方向から)
　　下　３号墓玄室（墓道から）
図版７　上　３号墓羨門（墓道から）
　　中　３号墓閉塞施設(右壁方向から)
　　下　墳丘状遺構の遺物（北から）
図版８　　出土遺物(1)
図版９　　出土遺物(2)
図版10　　出土遺物(3)

浅間神社古墳群３号墳

図版１　上　古墳全景（北西から）
　　下　主体部遺物出土状況（東から）
図版２　上　調査前全景（北から）
　　中　尾根切断溝の土層断面(東から)
　　下　尾根切断溝の完掘（西から）
図版３　上　墳頂部完掘（北西から）
　　中　主体部完掘（東から）
　　下　主体部東端（北から）
図版４　上　主体部西端（北から）
　　中　西側裾（北から）
　　下　造出し（北西から）
図版５　上　主体部棺上鉄鏃（北から）
　　中　主体部農・工・漁具(上層、東から)
　　下　主体部農・工・漁具(中層、東から)
図版６　上　主体部中央鉄剣・刀子（南から）
　　中　主体部西寄り鉄鏃（西から）
　　下　西側裾埴輪出土状況(墳丘から)
図版７　上　北側溝内埴輪出土状況(北から)
　　中　墳頂部埴輪№８・15（南から）
　　下　西側裾埴輪№28（南から）
図版８　上　西側裾埴輪№29（南から）
　　中　東側裾埴輪№55（南から）
　　下　東側裾埴輪№57（南から）
図版９　上　東側裾埴輪№58（南から）
　　中　東側裾埴輪№59（東から）
　　下　南側テラス土器№１（北から）
図版10　　出土遺物(1)
図版11　　出土遺物(2)
図版12　　出土遺物(3)
図版13　　出土遺物(4)
図版14　　出土遺物(5)
図版15　　出土遺物(6)
図版16　　出土遺物(7)
図版17　　出土遺物(8)
図版18　　出土遺物(9)
図版19　　出土遺物(10)

前山横穴墓群

図版１　上　横穴墓群全景（東から）
　　下　３号墓排水溝の蓋石
　　(左壁方向から)

図版２　上　墳丘状遺構全景（北西から）
　　中　北側周溝内遺物（北西から）
　　下　南側周溝土層断面（西から）
図版３　上　北側周溝土層断面（西から）
　　中　１号墓閉塞状況（墓道から）
　　下　１号墓閉塞状況(左壁方向から)
図版４　上　１号墓閉塞下部（墓道から）
　　中　１号墓墓道遺物
　　(墓道先端方向から)
　　下　１号墓玄室内工具痕(左壁から)
図版５　上　２号墓羨門（墓道から）
　　中　２号墓全景（墓道から）
　　下　３号墓閉塞状況（墓道から）
図版６　上　３号墓玄室上層遺物(墓道から)
　　中　３号墓玄室下層遺物(墓道から)
　　下　３号墓墓道遺物(墓道先端から)
図版７　上　３号墓墓道敷石(左壁方向から)
　　中　３号墓墓道排水溝蓋石
　　(墓道先端から)
　　下　３号墓閉塞施設（墓道から）
図版８　上　３号墓排水溝（左壁方向から）
　　中　４号墓羨門外遺物（墓道から）
　　下　４号墓玄室内遺物（右壁から）
図版９　上　４号墓羨門（墓道から）
　　中　４号墓閉塞施設(右壁方向から)
　　下　４号墓閉塞施設に残る工具痕
　　(墓道から)
図版10　　出土遺物(1)
図版11　　出土遺物(2)
図版12　　出土遺物(3)
図版13　　出土遺物(4)
図版14　　出土遺物(5)
図版15　　出土遺物(6)
図版16　　出土遺物(7)

寺ヶ谷横穴墓群

図版１　上　横穴墓全景（南東から）
　　下　遺物出土状況（南東から）
図版２　上　遺物出土状況（左壁方向から）
　　中　礫検出状況（左壁方向から）
　　下　玄室内工具痕（羨道から）
図版３　上　閉塞施設（左壁方向から）
　　中　横穴墓全景（左壁方向から）
　　下　出土遺物

西池古墳出土の鉄製品

図版１　　出土遺物(1)
図版２　　出土遺物(2)

山脇横穴墓群出土の鉄製品

図版１　　出土遺物(1)
図版２　　出土遺物(2)

本村横穴墓群Ｅ群出土の金属製品

図版１　　出土遺物(1)
図版２　　出土遺物(2)

Ⅰ　十郎ヶ谷遺跡

1．調査の概要

調査は、バックホウで茶の木を抜根、耕作土を除去し、その後、人力により精査・遺構掘削を行った。

調査に当たっては、調査区の形に合わせて５ｍ方眼のグリッドを設定した。東西方向の基準線は、座標の北から東に約44度30分振れている。

現地での図面は、20分の１の縮尺により遺構図を、10分の１の縮尺で詳細図を作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成８年７月30日から９月20日まで、現地調査を行った。

2．遺構の概要

調査地は、西から東に伸びる丘陵の先端に位置する。検出された遺構は、近世の溝状遺構と土坑がある。溝状遺構、土坑の順に概要を述べる。

溝状遺構

ＳＤ０１（第４図）

調査区の東端近くで検出された。南東方向から北西方向に緩やかに湾曲しながら傾斜している。

掘り方から浮いた状態で、５㎝～20㎝の大きさの礫が多量に検出された。この礫に混じり、獣骨、馬の歯、古銭、かわらけの破片が出土した。

溝状遺構としたが、墓に通じる道の可能性がある。礫などは、道として機能していた時に混入した可能性がある。

土坑

ＳＦ０１（第４図）

東西0.7ｍ、南北0.6ｍの長方形を呈し、深さは最大で18㎝を測る。遺骨などの検出はなかったが、掘削中に古銭が１枚出土したので土坑と推定した。古銭の錆化が著しく、銭名の判読はできない。

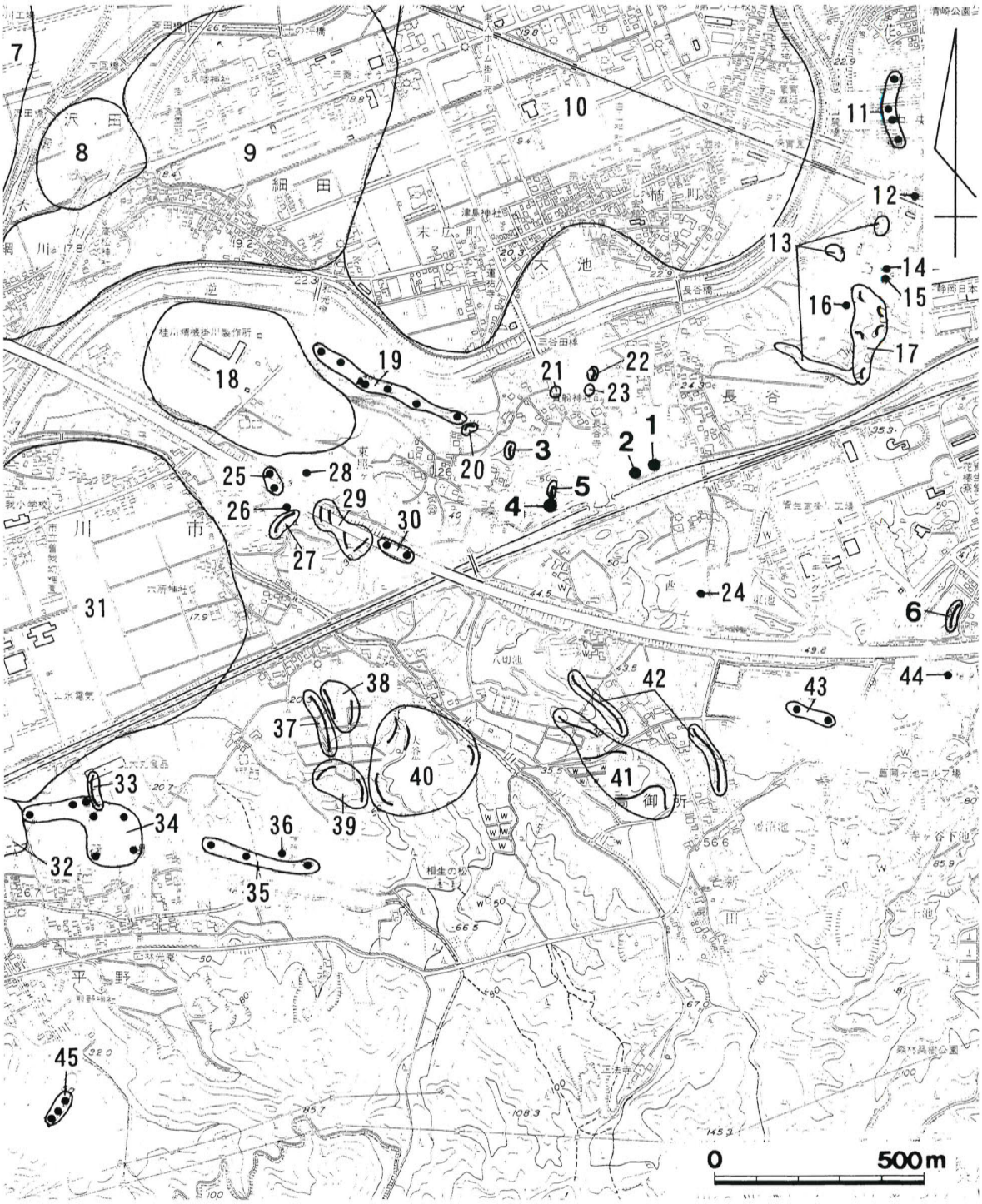
ＳＦ０２（第４図）

東西0.6ｍ、南北1.15ｍの長方形を呈する。掘り方下場の北端から20㎝のところから一段深くなる。この段のところからかわらけ２枚が、内面を一段深くなった南側に向けるように上下に重なった状態で出土した。この土坑からは、かわらけ以外の出土遺物はない。段は、切り合いによる結果生じた可能性がある。

3. 遺物の概要

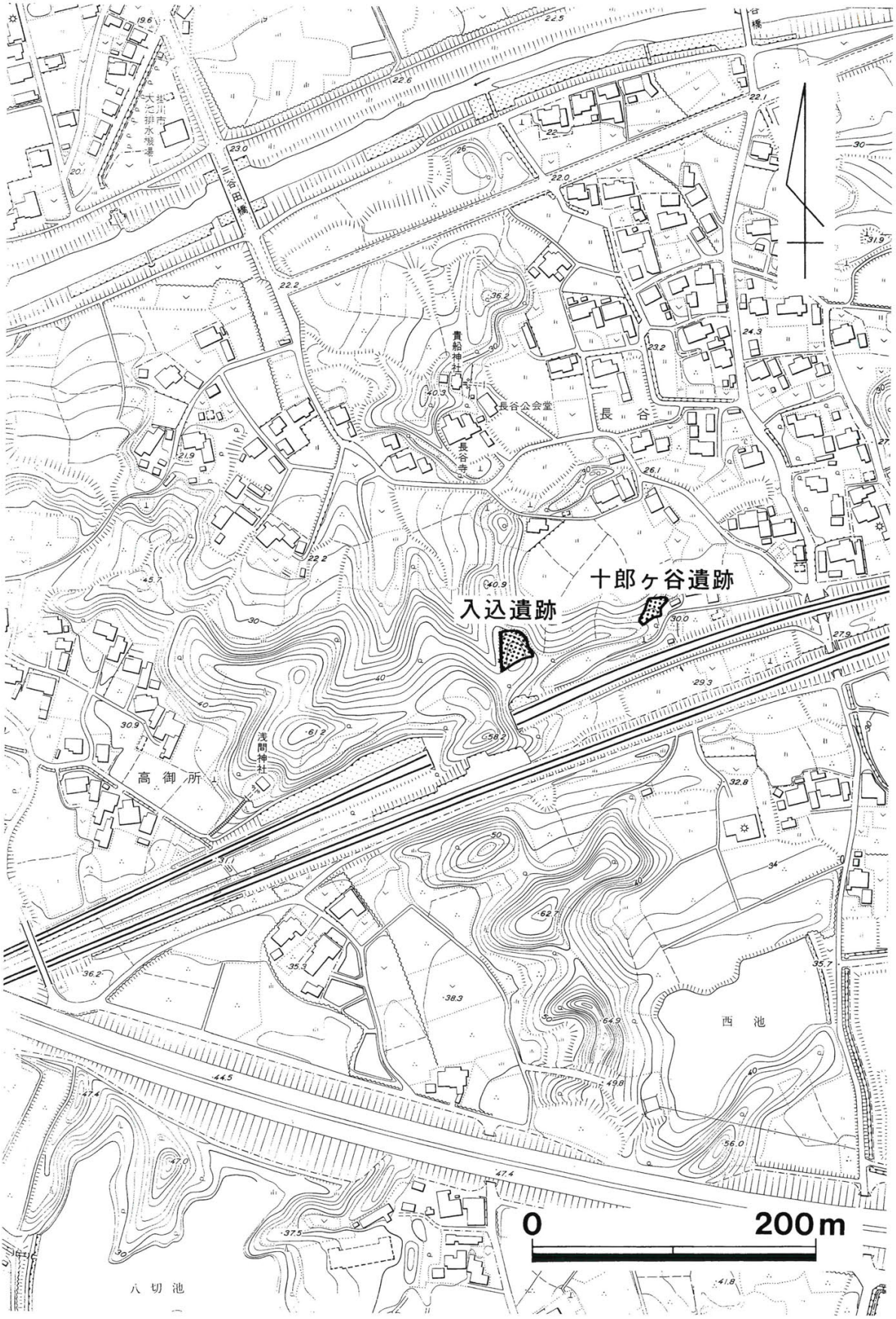
出土遺物には、古銭、かわらけがある。ＳＤ01・ＳＦ01出土の古銭は、ともに銭名不明である。

１は、ＳＤ01から出土したかわらけの口縁部破片で口径10.2㎝を測り、非ロクロ成形と考えられる。２と３は、ＳＦ02から出土した。２はロクロ成形のかわらけで、口径10.2㎝、器高2.6㎝を測る。３は非ロクロ成形のかわらけで、口径11.0㎝、器高2.1㎝を測る。２と３は、17世紀代に位置づけらると考える。

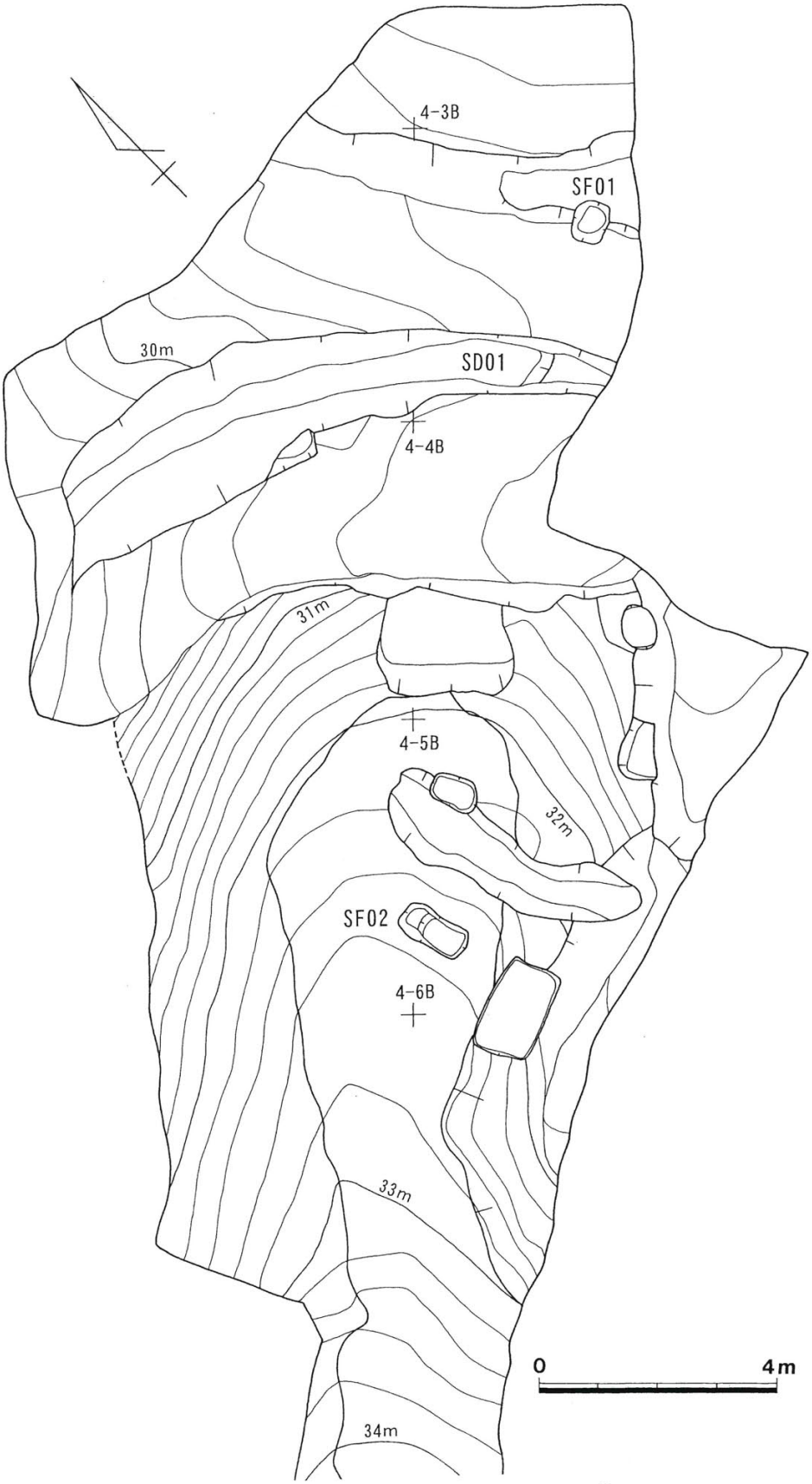


第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

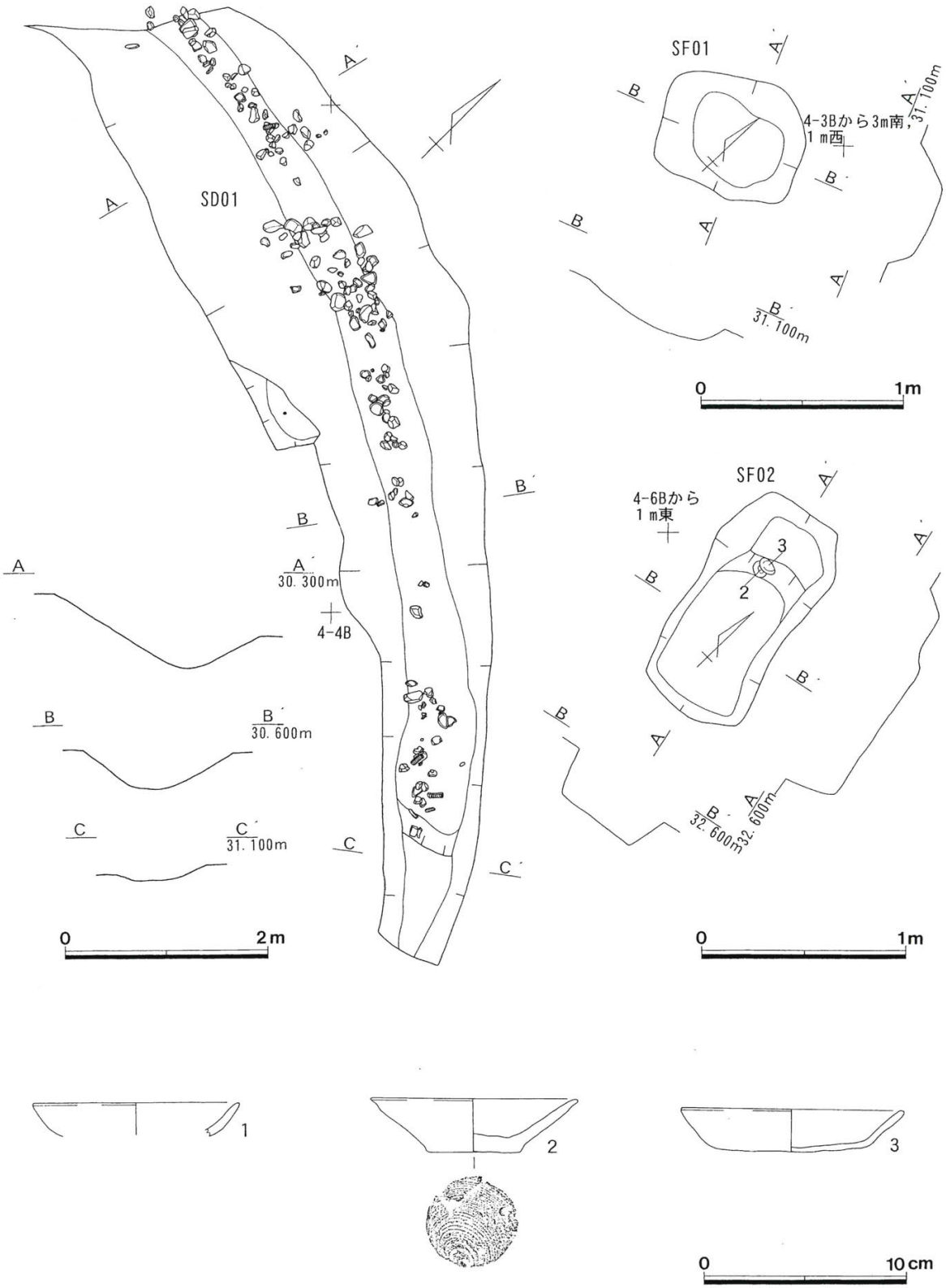
１.十郎ヶ谷遺跡　２.入込遺跡　３.向山横穴群　４.浅間神社古墳群３号墳　５.前山横穴群　６.寺ヶ谷横穴群
７.黒田遺跡　８.沢田遺跡　９.細田遺跡　10.大池遺跡　11.山麓古墳群　12.山麓山横穴　13.堀ノ内遺跡
14.宇洞ヶ谷横穴　15.堀ノ内古墳群13号墳　16.堀ノ内古墳群14号墳　17.堀ノ内横穴群　18.前坪遺跡
19.前坪古墳群　20.本村遺跡・本村横穴群Ｅ群　21.向山遺跡　22.山脇横穴群　23.東ノ谷遺跡　24.西池古墳
25.本村古墳群　26.屋敷越古墳　27.屋敷越横穴群　28.天上塚古墳　29.本村横穴群　30.東照ヶ谷古墳群
31.領家遺跡　32.曽我山砦跡　33.丈山横穴群　34.丈山古墳群　35.篠場古墳群　36.八幡神社脇古墳
37.十二ヶ谷横穴群　38.斉兵衛ヶ谷横穴群　39.金兵衛谷田横穴群　40.大谷代横穴群　41.南坪横穴群
42.新田横穴群　43.池ノ奥古墳群　44.寺ヶ谷古墳　45.居村古墳群・居村遺跡



第2図　位置図



第３図　調査区全体図


SD01
SF01
SF02
4-3Bから3m南，1m西
4-6Bから1m東
4-4B
A
A'
30.300m
B
B'
30.600m
C
C'
31.100m
31.100m
32.600m
32.600m
0
2m
1m
1m
1
2
3
10cm

第４図　遺構・遺物実測図

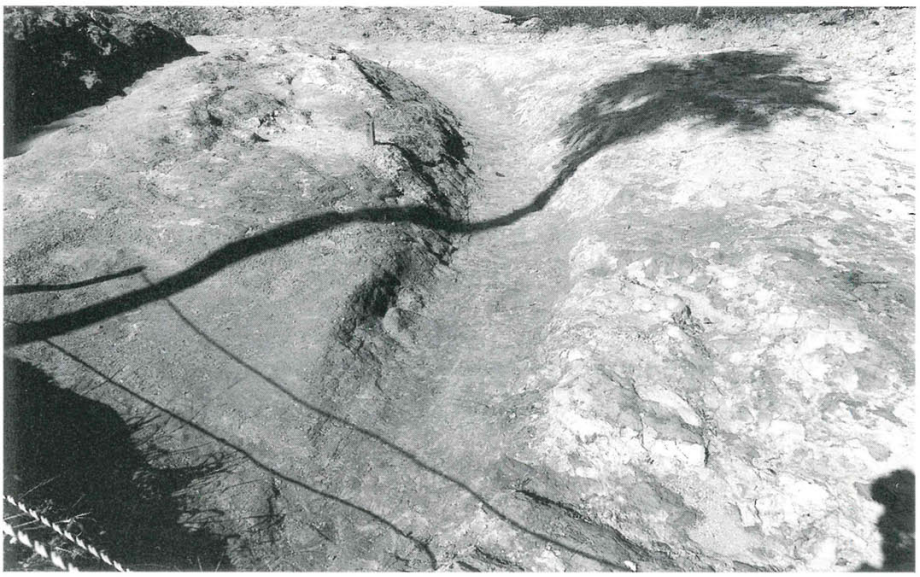
図 版 1

調査区全景（西から）

土坑群全景（西から）

図版 2

ＳＤ０１遺物出土状況
（南東から）



ＳＤ０１完掘
（南東から）

ＳＦ０２遺物出土状況
（西から）

Ⅱ　入込遺跡

1．調査の概要

入込遺跡からは、竪穴住居跡が１棟発見された。南から北に伸びる東西5.2m、南北14mの狭い尾根の上につくられた竪穴住居跡でる。

調査前は茶畑になっていて、バックホウで耕作土を除去し、その後、人力により精査・遺構確認を行った。

調査に当たっては、調査区の形に合わせて南北方向の基準線を設定し、５m方眼のグリッドを設定した。南北方向の基準線は、座標の北から西に約12度振れている。

現地での図面は、20分の１の縮尺により作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成８年７月30日から11月20日まで、現地調査を行った。

2．遺構の概要

調査により検出した竪穴住居跡の概要を述べる。

竪穴住居跡

ＳＢ０１（第２図）

竪穴住居跡は、茶畑の耕作により大きく削平されていただけでなく、深耕により掘り方まで破壊されていて、遺存状況は良好ではなかった。

検出されたのは、住居の南壁から西壁にかけての部分と柱穴3，貯蔵穴である。

柱穴は、３つ検出された。柱穴間の距離は、東西間が2.7m、南北間が3.2mを測り、南北間が東西間を上回る。柱穴の主軸は、座標の北から約18度30分西に振れている。炉は、耕作により削り取られていて位置不明である。３つの柱穴とも、掘り方が不整形であることから、竪穴住居は建て替えられた可能性がある。東南の柱穴に隣接し、壁際に貯蔵穴がある。前年度に同じ長谷土地区画整理用地内で調査した東ノ谷遺跡の竪穴住居は、貯蔵穴が２つの柱穴の間につくられていた。住居の南壁に沿ってつくられている点は同じであるが、配置は異なっている。また、南端で壁溝の一部を確認できた。Ｂ・Ｂ′断面の３層と４層の境が床面の可能性がある。

3．遺物の概要

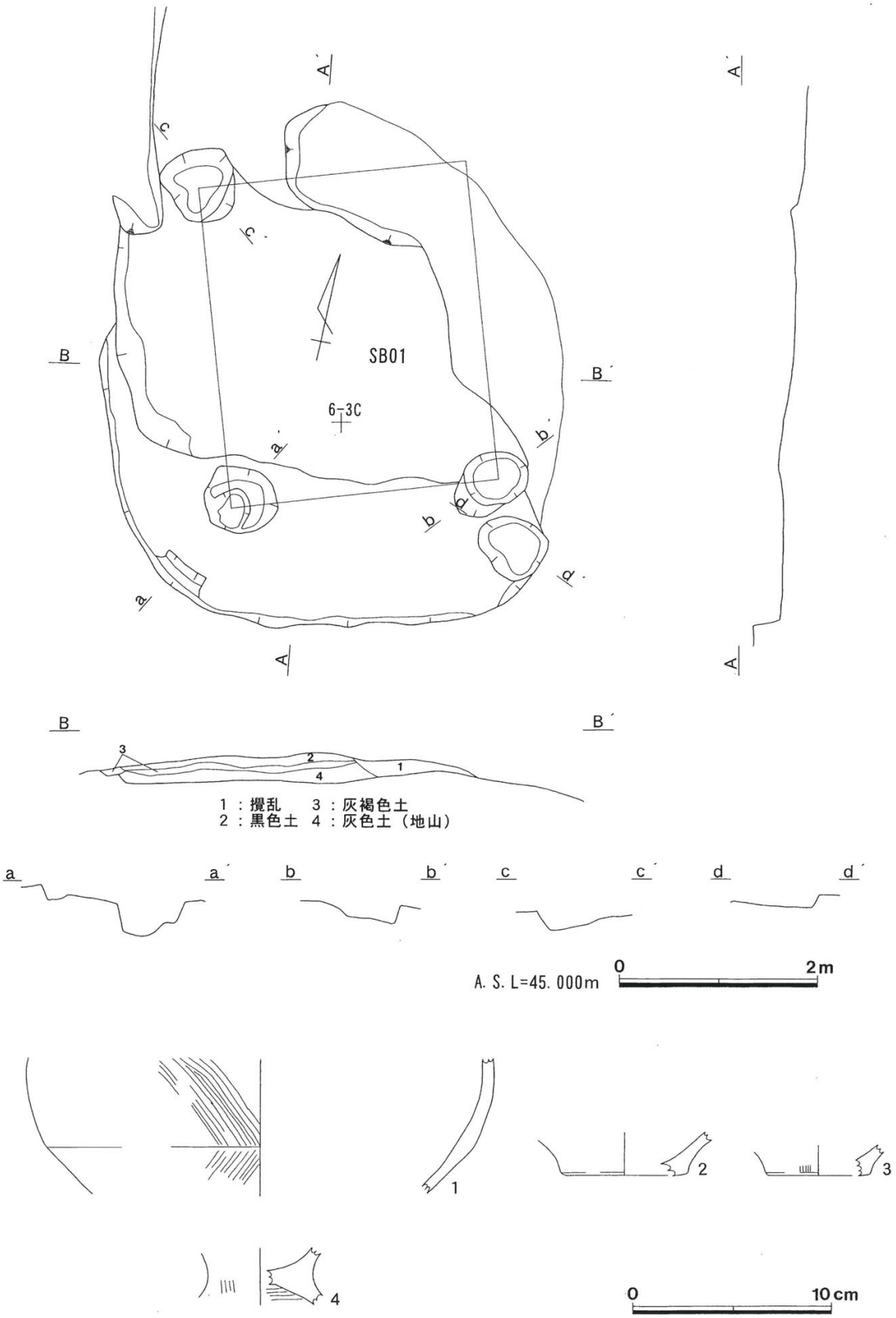
土器（第２図）

１～４は、ＳＢ01の東西の斜面から出土した土器片である。東西の斜面からは、壺と台付き甕の破片が出土している。ＳＢ01からは、土器の小破片が出土しているのみである。１は、壺の底部から体部の破片で、縦方向のハケ目が施される。２・３は、壺の底部、４は台付き甕の接合部である。

これらの土器は、古墳時代前期に位置づけられると考える。

A
A
A'
A'
B
B
B'
B'
6-3E
6-3D
6-3C
6-3B
SB01
41.0m
42.0m
43.0m
44.0m
44.0m
43.0m
42.0m
45.0m
A.S.L=45.400m
0
4m

第１図　調査区全体図


SB01
6-3C
A
A´
B
B´
a
a´
b
b´
c
c´
d
d´
1：攪乱　3：灰褐色土
2：黒色土　4：灰色土（地山）
A. S. L=45. 000m
0
2m
0
10cm

第２図　遺構・遺物実測図

図版 1

ＳＢ０１全景（南から）

ＳＢ０１南西部分
（南から）

ＳＢ０１南東部分
（南西から）

Ⅲ　向山横穴墓群

1．調査の概要

戦後開墾して茶畑をつくった時に横穴を３基発見したということであった。横穴墓は、斜面の上の方にあったというので、尾根に近い部分から茶の木を伐採し、人力で表土を除去し、横穴墓の確認を行った。尾根の上は、横穴墓に伴う祭祀場の可能性が考えられたので、調査の対象にした。調査区の軸は、尾根上は地形に合わせ、横穴墓はそれぞれの主軸を設定した。

現地での図面は、遺構を20分の１の縮尺で、詳細図を10分の１の縮尺と原寸で作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成８年９月18日から平成８年12月27日まで、現地調査を行った。

2．遺構の概要

横穴墓群は、尾根から４ｍほど下がった東斜面にそれぞれ単独でつくられた３基から成る。１号墓と２号墓はほぼ同じ主軸方位となる。２号墓と３号墓の間に小さなでっぱりがあり、３号墓は他の２基とは主軸方位を異にする。

１号墓（第３図）

１号墓は、全長4.56ｍを測り、玄室、羨道、閉塞施設、墓道から成る。

玄室　長さ1.44ｍ、最大幅2.52ｍを測る隅丸長方形を呈する。現存する天井の高さ80㎝を測る。玄室の断面形は、ドーム形と考えられる。左壁沿い、右壁の前半、玄室の中央部分から排水溝が延びている。

副葬品　副葬品は、土器、鉄製品がある。土器のうち第６図－１・３・４は、掘り方底面に密着した状態で、２は浮いた状態であった。鉄製品は、すべて刀子で、浮いた状態であった。

骨と歯は、掘り方底面から浮いた状態で検出された。

羨道　羨道は、幅76㎝、長さは左壁で26㎝、右壁で34㎝を測る短羨道である。

閉塞施設　閉塞施設と考えられるのは、上端の幅20㎝、下端の幅10㎝、長さ1.26ｍの溝で、羨道掘り方底面からの深さ８㎝を測る。この溝から墓道の中ほどまで排水溝が延びている。溝の墓道側から岩（堆積砂）のブロックが検出された。この岩のブロックは、溝に木板を立てて外から押さえるために使用されたものと考えられる。

墓道　墓道は、２段に掘り込まれている。上端の幅2.44ｍ、深さ66㎝を測る掘り方の中央に幅86㎝、深さ53㎝の墓道が掘られている。墓道のほぼ中央を断面「Ｖ」字状の排水溝が通る。墓道出土の土器のうち第７図－10は、玄室の掘り方底面より20㎝ほど高い位置であることから、尾根上から転落した土器の可能性がある。13・15も、尾根上から転落した可能性がある。

２号墓（第４図）

２号墓は、全長5.38ｍを測り、玄室、羨道、閉塞施設、墓道から成る。

玄室　長さ1.28ｍ、最大幅2.40ｍを測る整った隅丸長方形を呈する。現存する天井の高さ94㎝を測る。推定される天井の高さは、１ｍ～1.2ｍである。玄室の断面形は、ドーム形と考えられる。

副葬品　玄室の左奥半、右前半からガラス小玉が７点出土している。玄室右袖から第８図－22の土器破片が出土した。この玄室内の破片は、天井陥没後に尾根の上から転落したものが流入したと考えら

れる。２号墓の遺物は、開墾時に大半が持ち出されたとされるが、内容は明らかではない。

羨道　幅83㎝、左壁で長さ45㎝を測る。短羨道である。羨門部分の左壁には、２段のえぐりが明瞭に見られるが、右壁は残存状況が悪く確認できなかった。羨道からガラス小玉が、１点出土している。

閉塞施設　閉塞施設と考えられるのは、上端の幅23㎝、下端の幅10㎝、長さ1.06ｍの溝である。羨道掘り方底面からの深さ８㎝を測る。この溝の中央から墓道方向に長さ20㎝ほどの短い排水溝が延びている。溝の墓道側から岩のブロックが検出された。この岩のブロックは、１号墓同様、溝に木板を立てて外から押さえるために使用されたものと考えられる。

墓道　閉塞用の溝から1.07ｍまでは比較的平坦で、そこから先は傾斜が急になる。閉塞用の溝からこの角度を変える部分の両側には、比較的平坦な部分がつくられている。

第７図－17～21の土器のうち17・18・20・21は耕作土下から、19は覆土上層から出土した。

３号墓（第５図）

開墾により玄室の天井・壁・掘り方、羨道の天井が破壊され、遺物も大部分が持ち出された。

玄室　長さ1.16ｍ、最大幅2.06ｍを測る。現存する天井の高さ70㎝を測る。玄室の天井の高さは、１ｍ前後と推定される。玄室の断面形は、ドーム形と考えられる。

副葬品　ガラス小玉が玄室の左前半から29点、左奥半から１点、墓道から２点出土している。

羨道　幅80㎝、長さは左壁で38㎝、右壁で27㎝を測る。羨門部分には、ごく短い排水溝がある。

閉塞施設　閉塞施設と考えられるのは、上端の幅23㎝、下端の幅15㎝、長さ98㎝の溝である。羨道掘り方底面からの深さ９㎝を測る。この溝の中央から墓道方向に排水溝が延びている。この溝の墓道側から検出された岩のブロックは、１号墓・２号墓と同じ用途に使用されたものと考えられる。

墓道　閉塞用の溝から50㎝ほどの両側には、比較的平坦な部分がつくられている。

墳丘状遺構（第２図）

横穴墓の上の尾根を墳丘状遺構としたが、削り出しや盛り土により整形されているわけではない。第８図－22の土器が、表皮層（腐植土）中から出土した。23・24は、表皮層・表皮層下から出土した。

３．遺物の概要

遺物には、土器、鉄製品、ガラス玉がある。

土器（第６図～第８図）

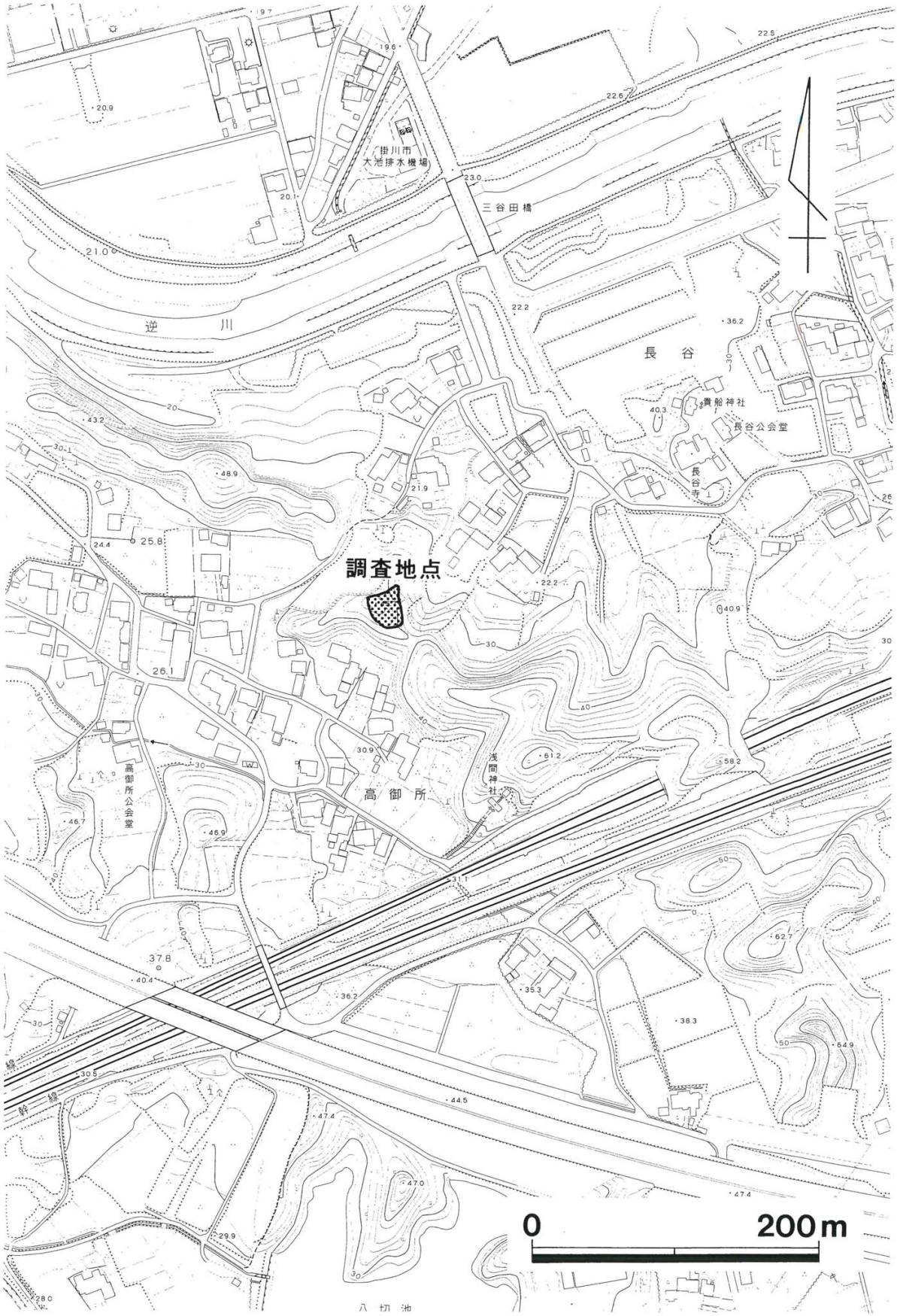
１の注口部には、打ち欠いた痕跡がある。２の底部外面には、「×」のヘラ記号がある。５と９は、セットになる可能性が高い。９の底部外面には、「｜｜」のヘラ記号がある。11の底部内面には、当て具の痕跡状のものが残る。15は、土師器の取っ手である。16は、特殊な器種の破片の可能性がある。17・18の天井部内面には、当て具と思われる痕跡が残り、18の天井部外面にはヘラ記号がある。22は、器表がほとんど剥落している。23・24は、土師器高坏の脚部である。

鉄製品（第９図）

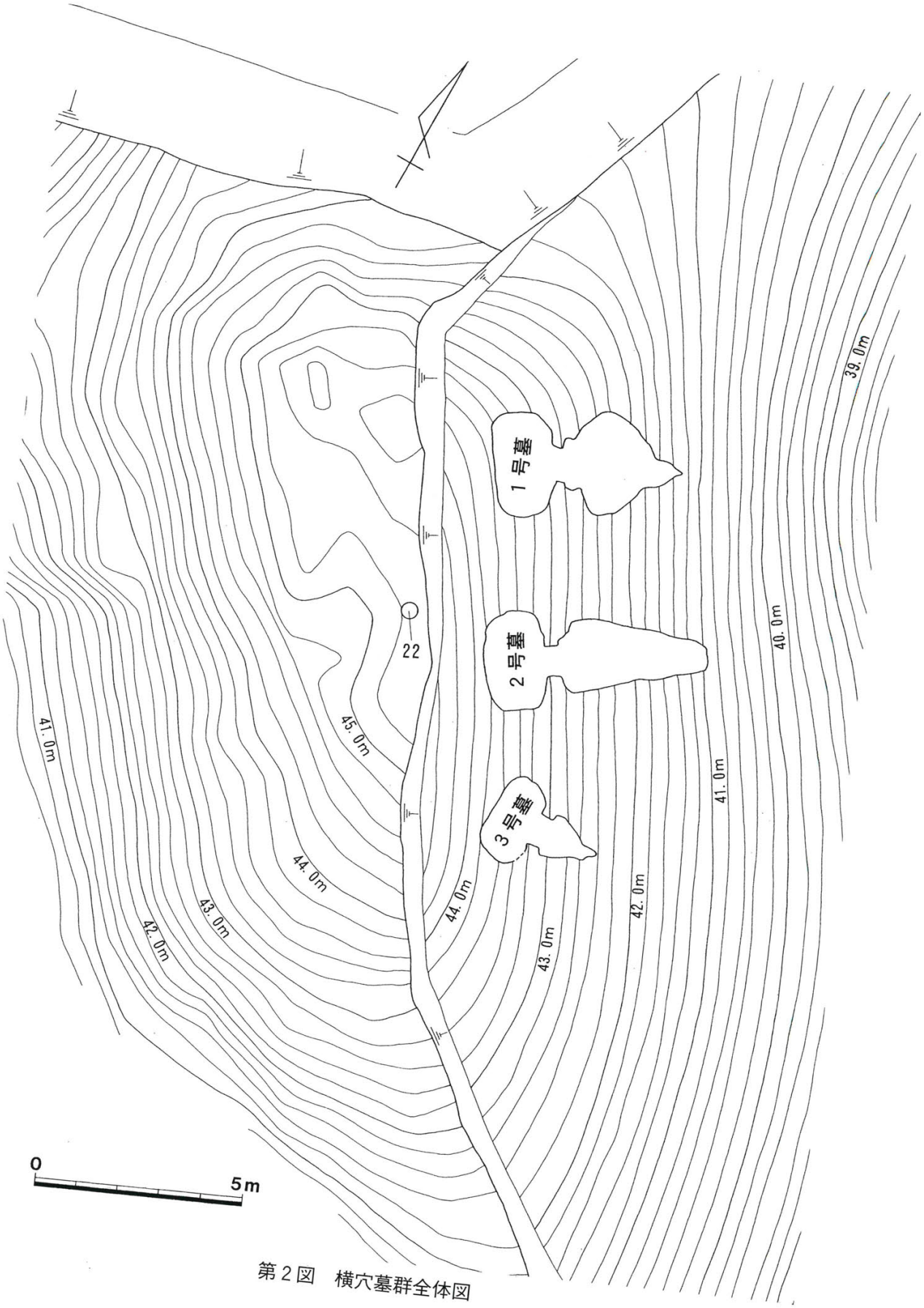
１は、完存する刀子で、切先が錆で瘤状に膨らんでいる。２の刀子は、使用により刃がすり減っている。関部に鎺がはめられれている。３・４・６は、刀子の破片である。５は鉄鏃の鏃身である。

玉類（第10図）

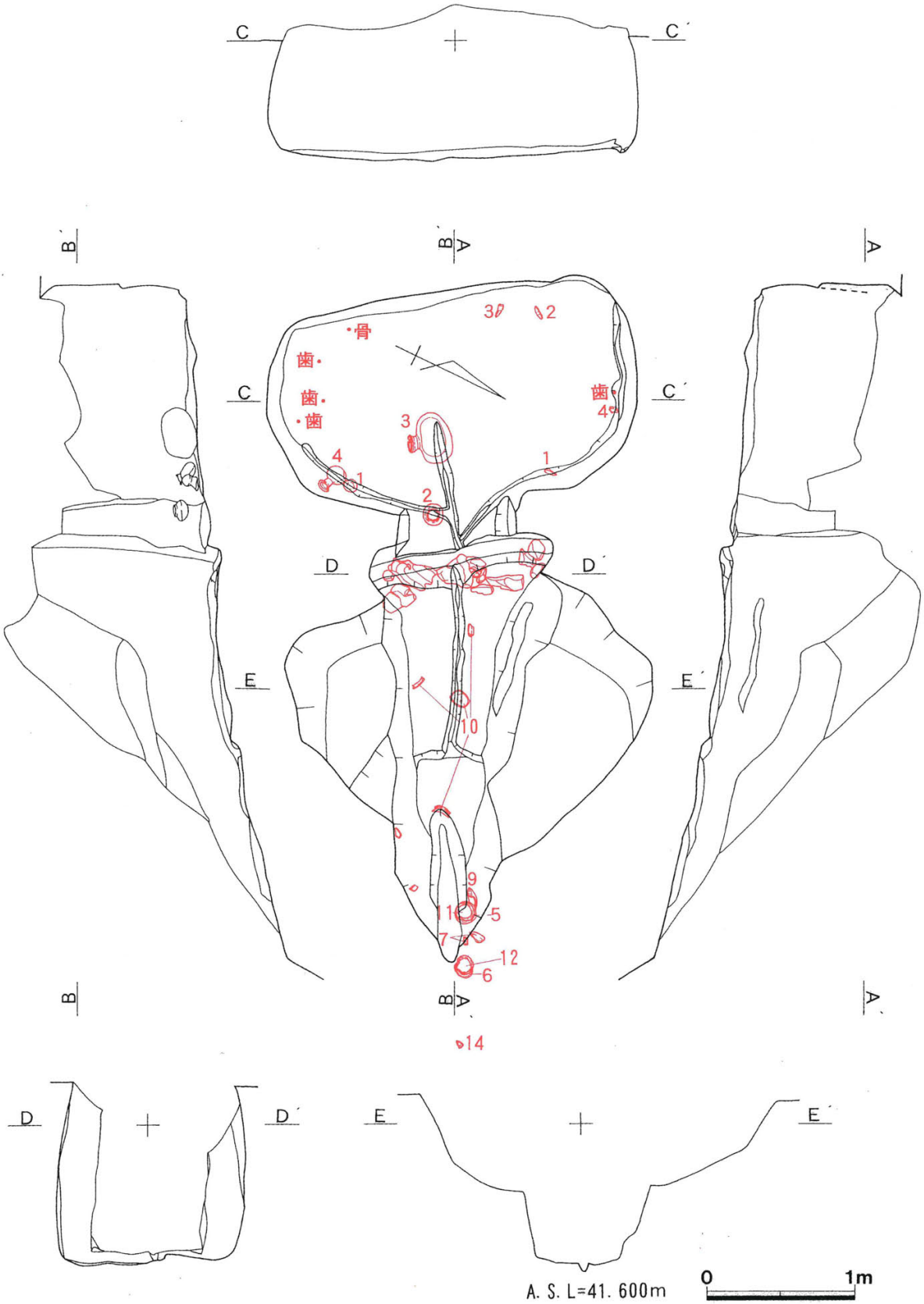
１～４は、２号墓出土、５～36は、３号墓出土である。２号墓出土のガラス小玉は、直径３㎜～４㎜、厚さ２㎜～３㎜。色調は、青色、水色を呈する。３号墓出土は、直径３㎜～４㎜、厚さ２㎜～３㎜。色調は、黄色を呈するもの１点で、他はすべて水色を呈する。


調査地点
掛川市
大池排水機場
三谷田橋
逆川
長谷
貴船神社
長谷公会堂
長谷寺
高御所
浅間神社
高御所公会堂
八切池
0
200m

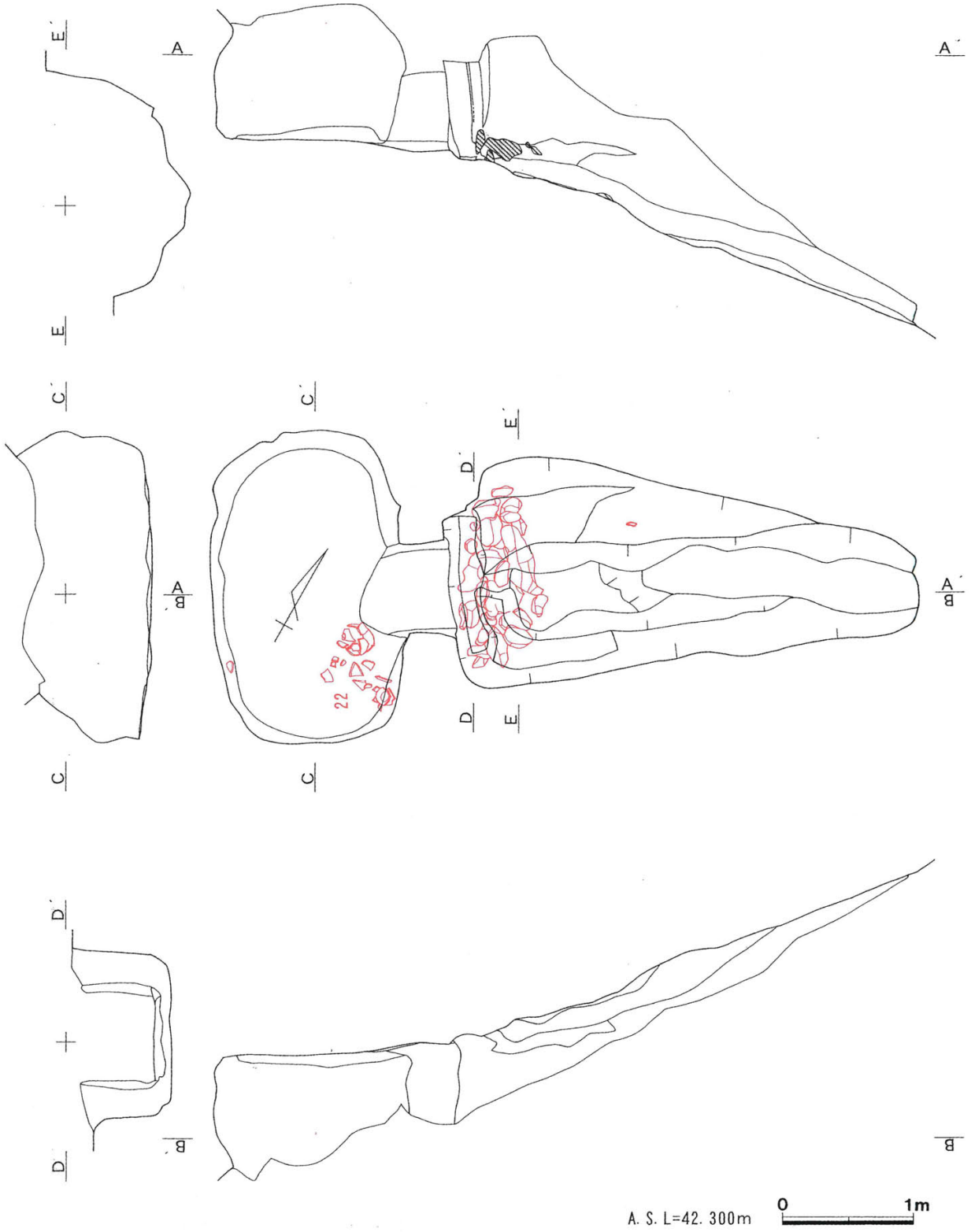
第1図　位置図


1号墓
2号墓
3号墓
22
39.0m
40.0m
41.0m
42.0m
43.0m
44.0m
45.0m
41.0m
42.0m
43.0m
44.0m
0
5m

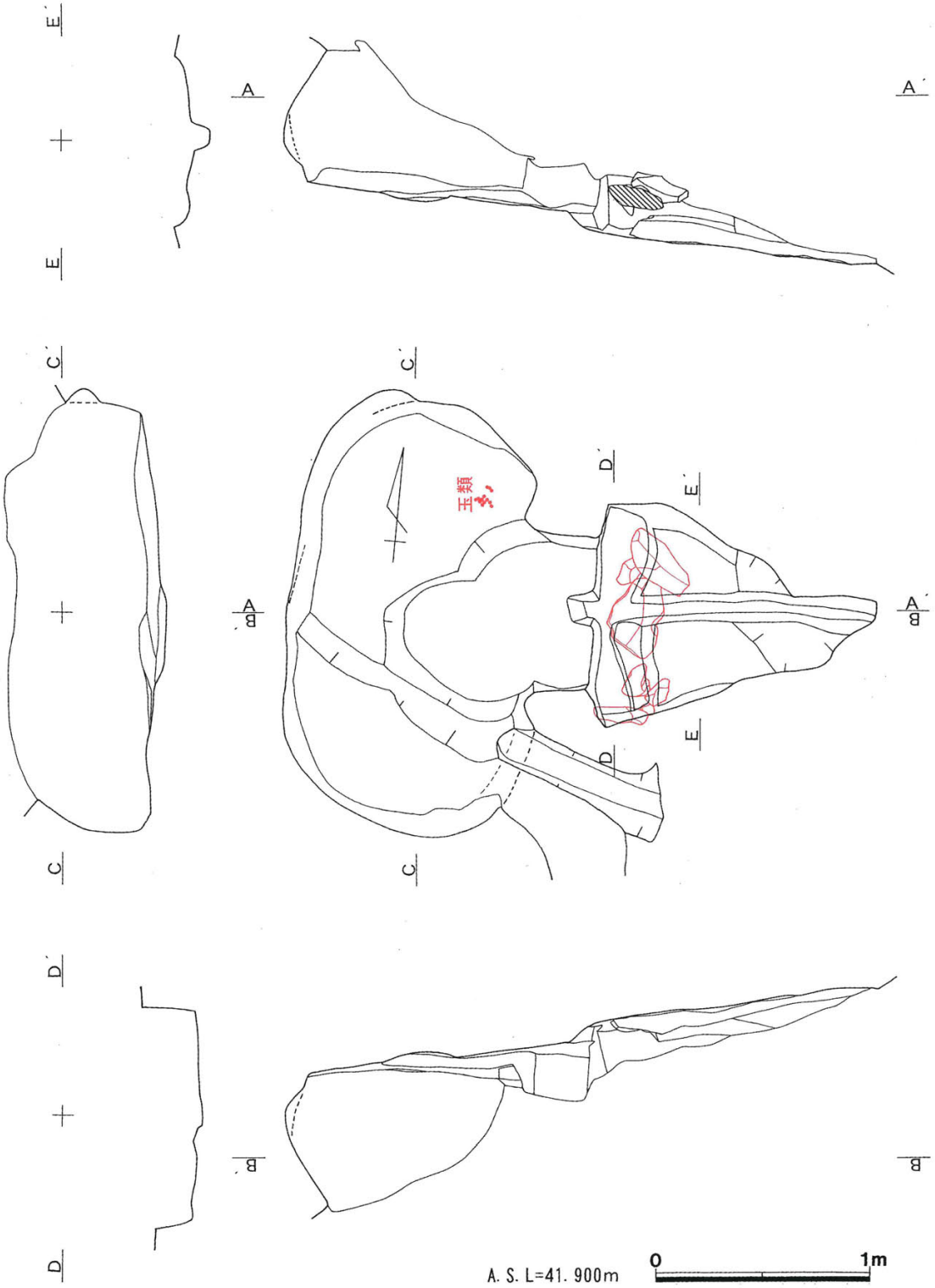
第2図　横穴墓群全体図



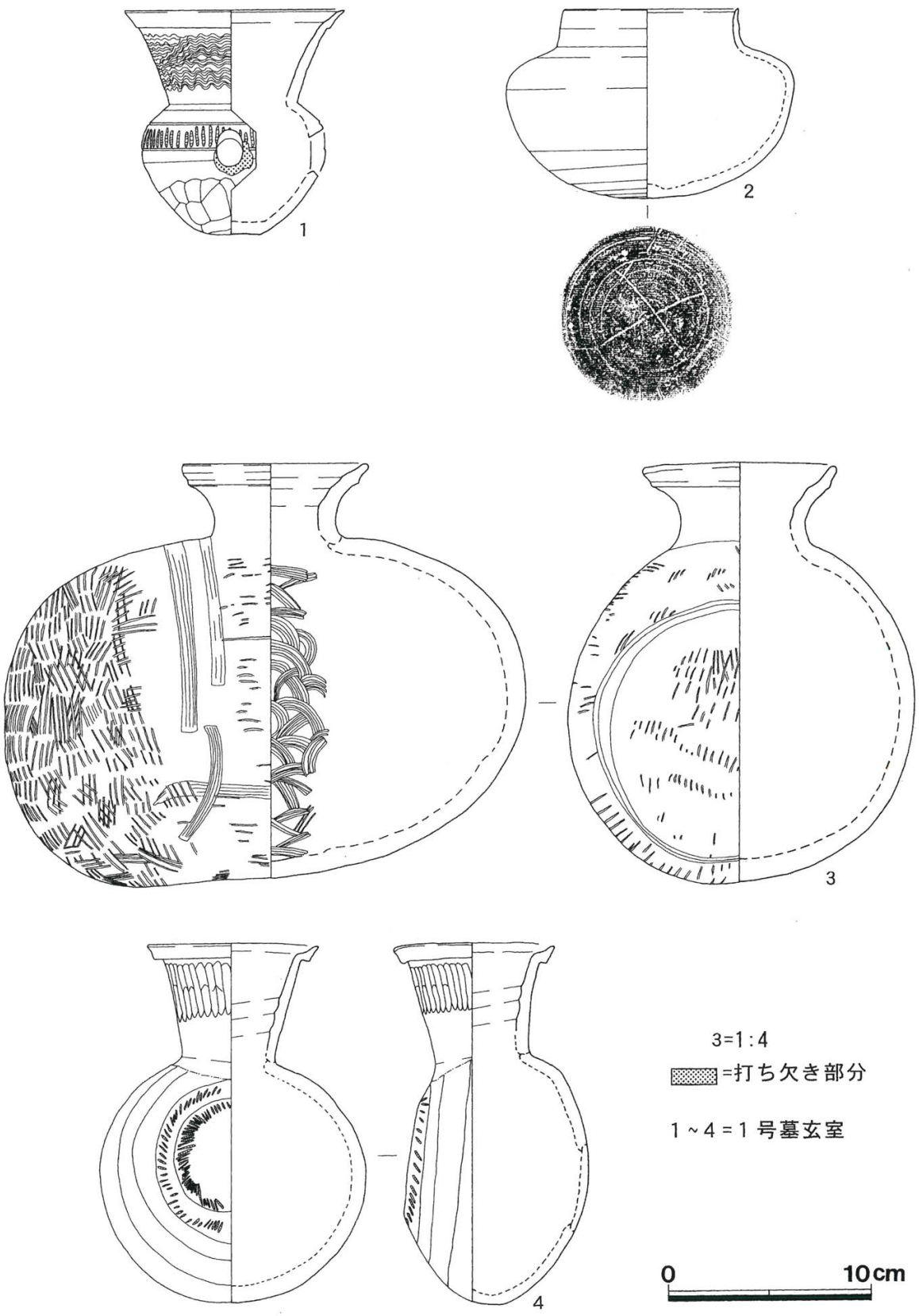
第３図　１号墓実測図



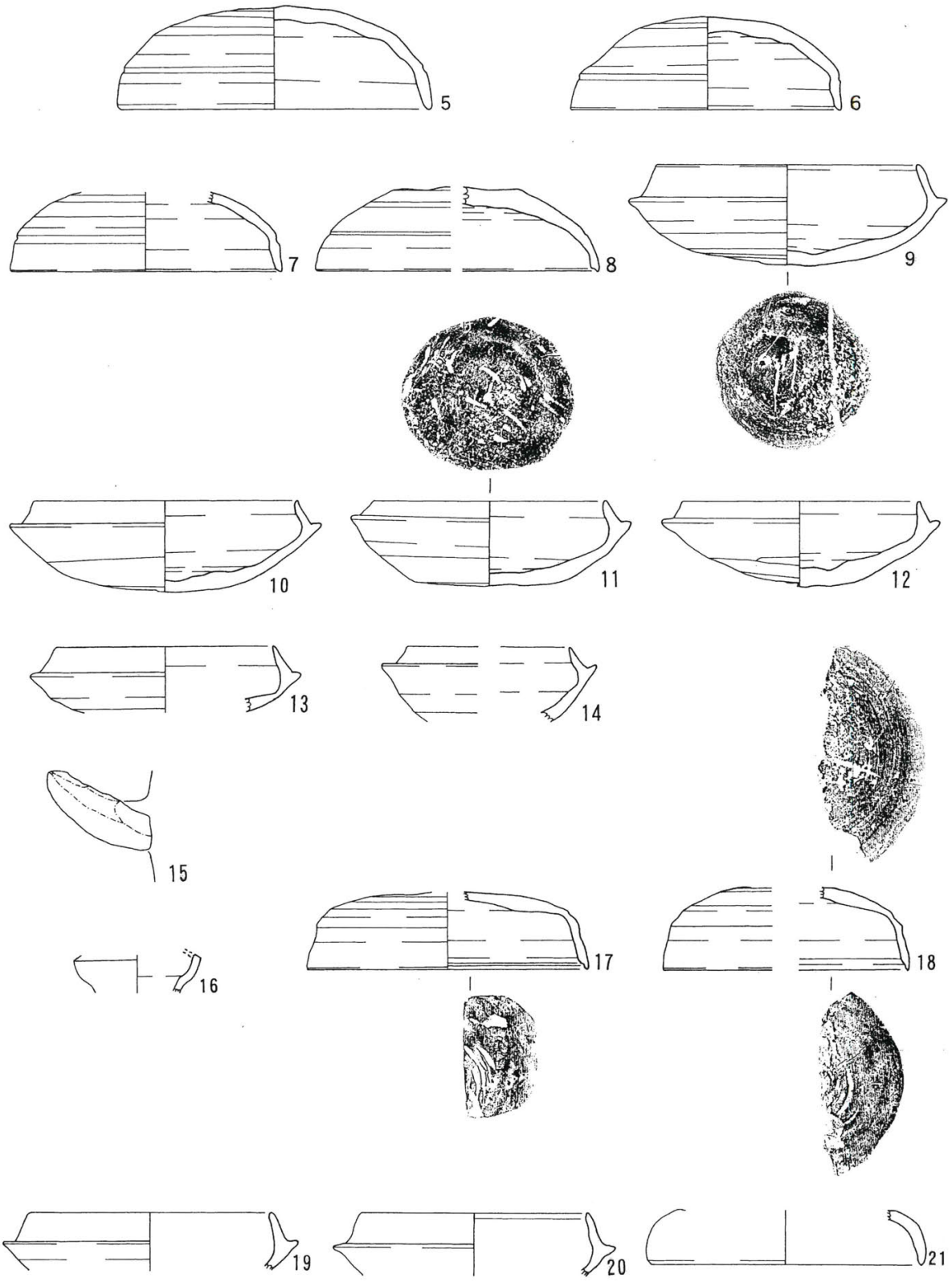
第４図　２号墓実測図



第５図　３号墓実測図

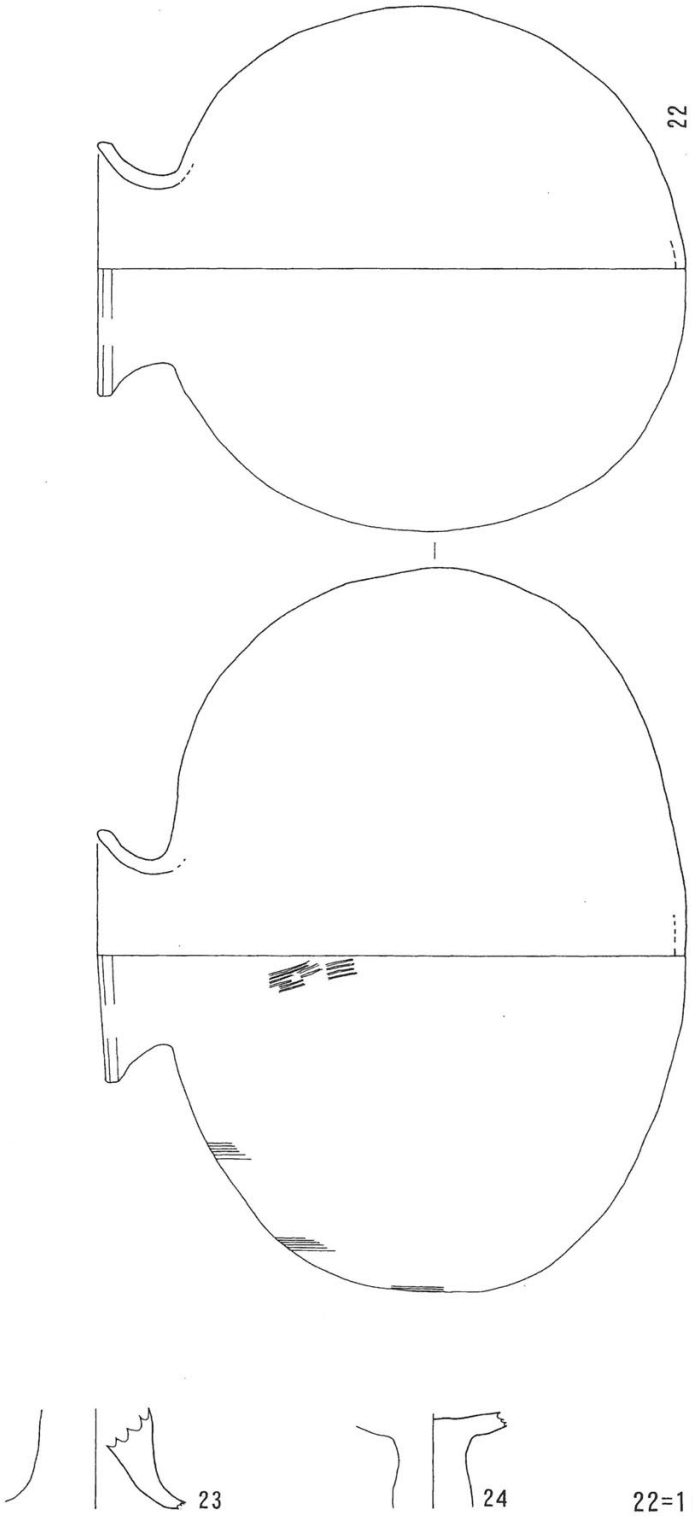


第６図　土器実測図(1)



5~15=1号墓墓道　16=2号墓玄室　17~21=2号墓墓道　0　10cm

第7図　土器実測図(2)

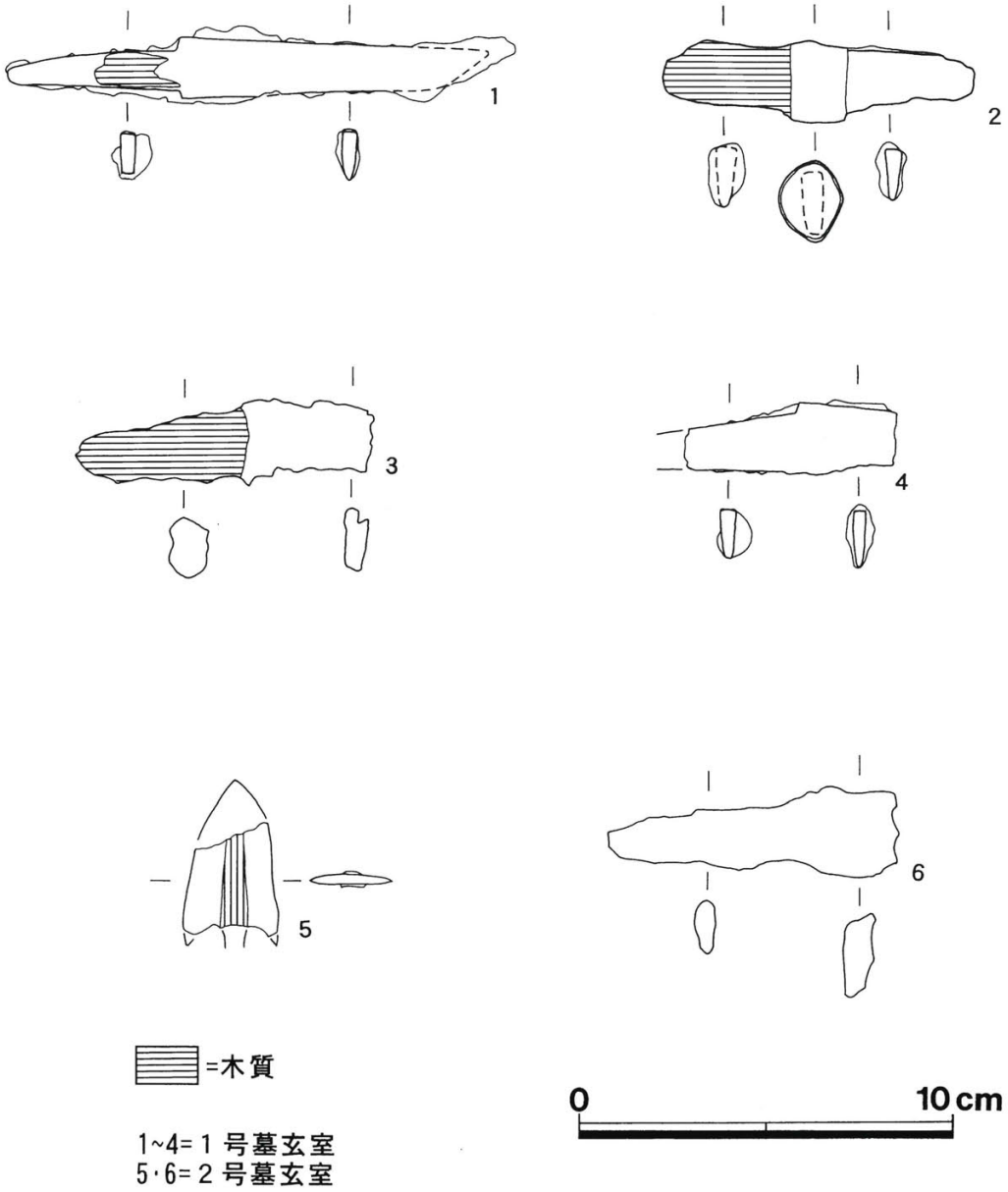


22=1:4

22=墳丘状の上と２号墓玄室
23･24=墳丘状の上

0　10cm

第８図　土器実測図(3)



第9図　鉄製品実測図

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
5cm

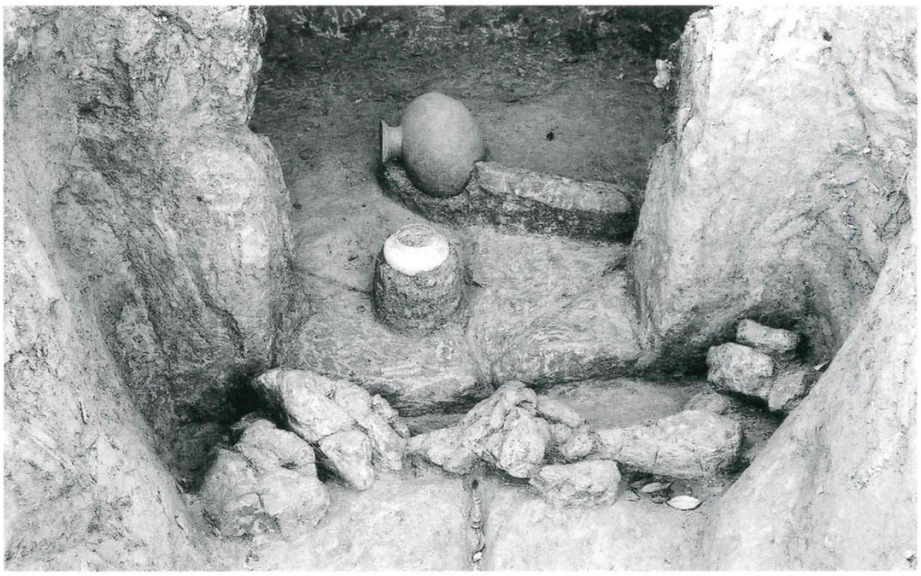
第10図　玉類実測図

図版 1

横穴墓群全景（南東から）

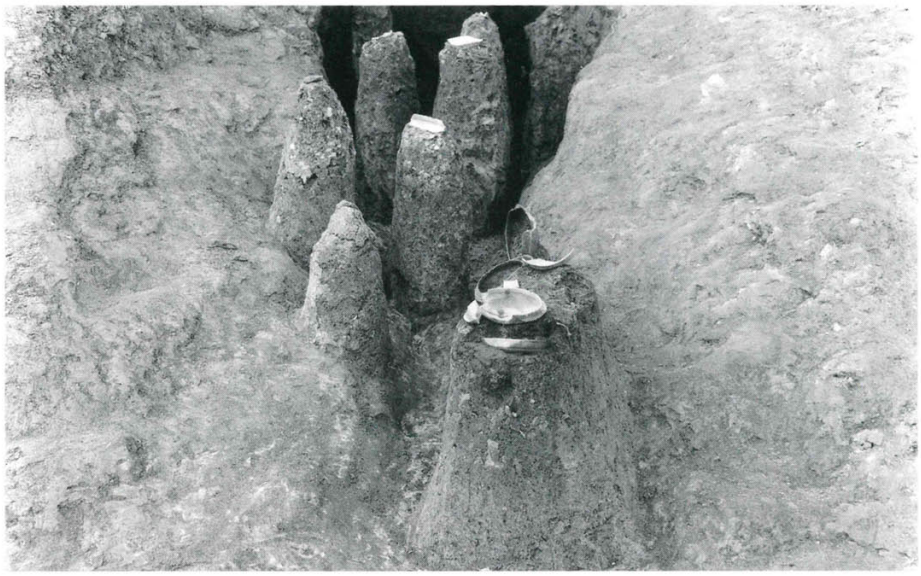
1号墓全景（東から）

図版 2



1号墓閉塞状況
（墓道から）

1号墓玄室内遺物
（左壁から）



1号墓墓道遺物
（墓道先端から）

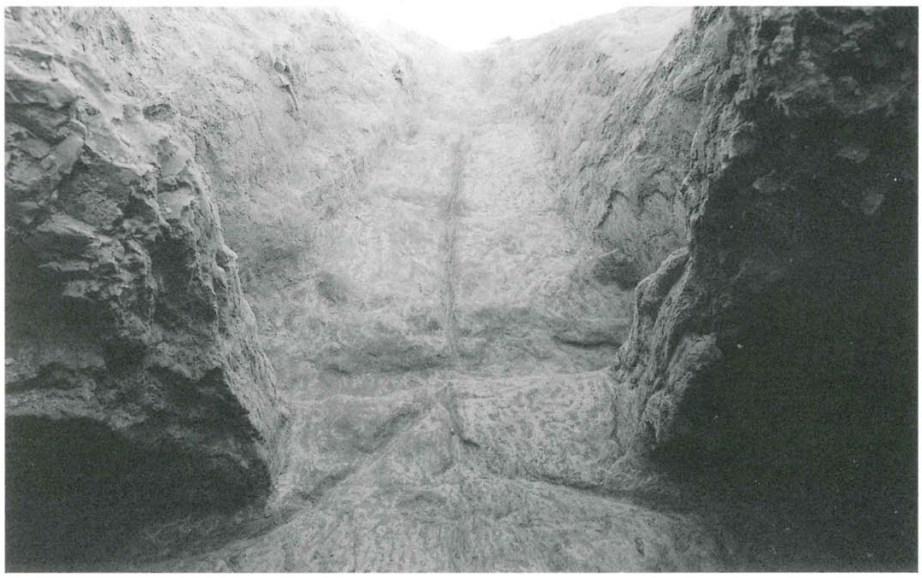
図版 3

1号墓玄室内工具痕
（左壁から）

1号墓閉塞施設
（墓道から）

1号墓排水溝
（墓道から）

図版 4



1号墓墓道
（玄室から）

2号墓閉塞状況
（右壁方向から）

2号墓玄室内遺物
（左壁から）

図版 5

2号墓玄室
（右壁方向から）

2号墓羨門
（墓道から）

2号墓閉塞施設
（右壁方向から）

図版 6

2号墓全景
（奥壁方向から）

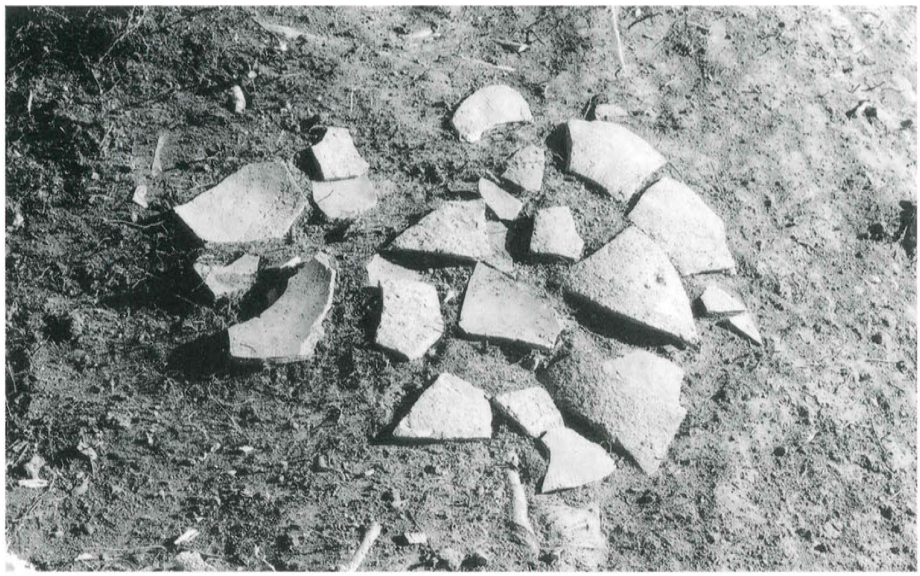
3号墓閉塞状況
（右壁方向から）

3号墓玄室
（墓道から）

図版 7

3号墓羨門
（墓道から）

3号墓閉塞施設
（右壁方向から）



墳丘状遺構の遺物
（北から）

図版 8

1

2

3

4

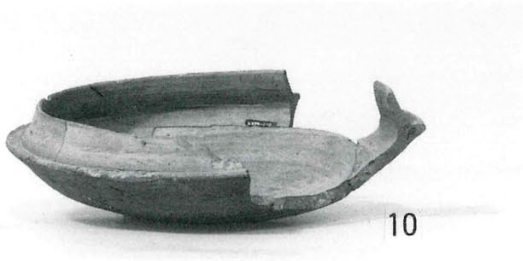
5

6

7

9

図版 9


10

11

12

22

1

2

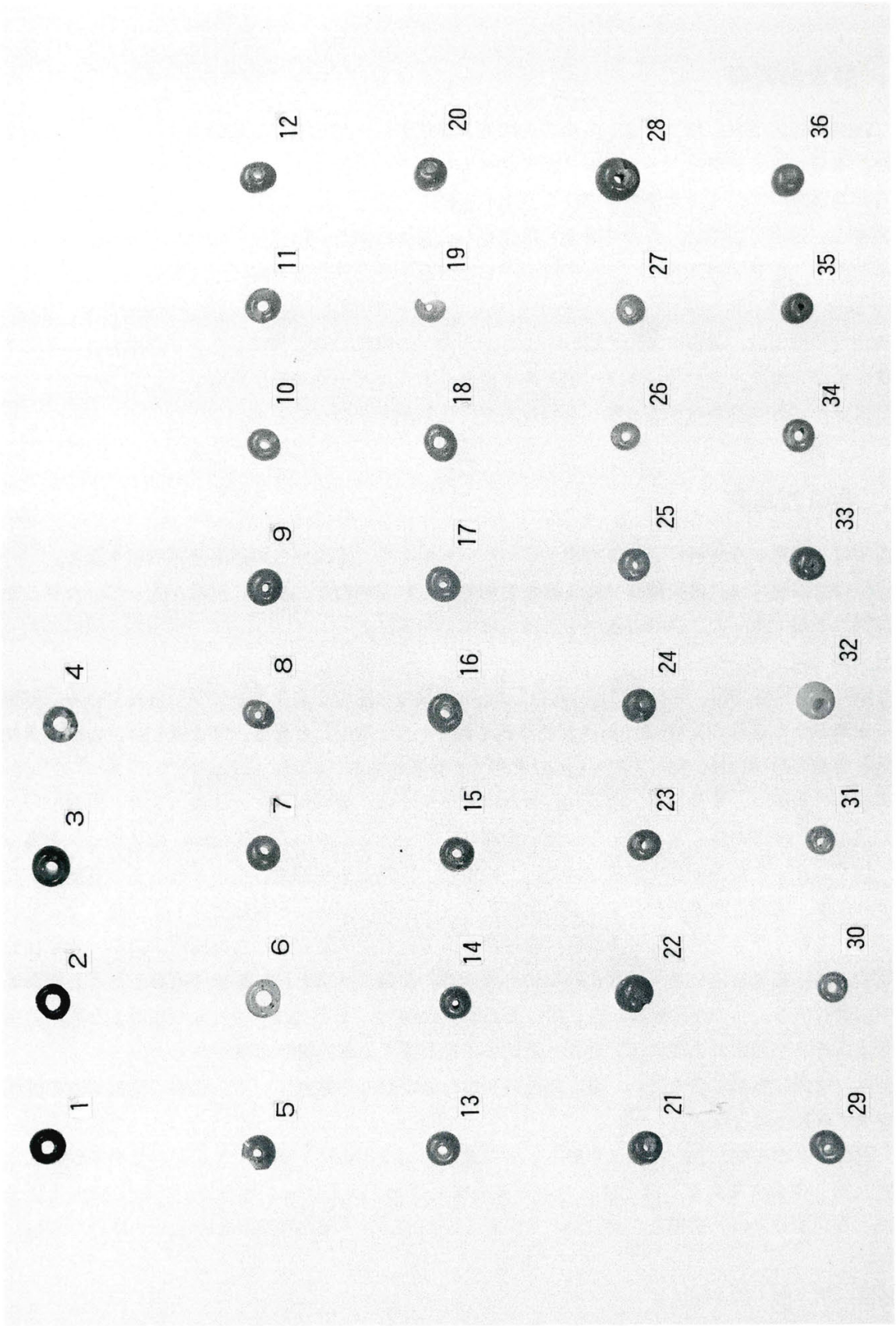
3

4

5

6

図 版 10


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

Ⅳ　浅間神社古墳群３号墳

１．調査の概要

「浅間神社古墳群」は、３基から成る古墳群と遺跡地図・地名表に記載があり、３基を調査対象とした。１号墳・２号墳は、トレンチによる試掘を行ったが、古墳ではなかった。

遺跡地名表に従い「浅間神社古墳群３号墳」という名称で記述するが、単独１基の古墳である。

調査は、樹木の抜開後、人力で表土を除去した。調査に際し、墳頂部と古墳北側の尾根切断の溝を結んだラインを基準線にして、５ｍ方眼のグリッドを設定した。基準線は、座標の北から西に約10度30分振れている。

現地での図面は、遺構・遺物を10分の１と20分の１の縮尺で適宜作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成８年12月18日から平成９年８月14日まで、現地調査を行った。

２．遺構の概要

古墳は、南東から北西に延びる尾根上につくられていて、水田面との比高差約39ｍを測る。

古墳は、開墾により南東隅４分の１ほどを削り取られていたり、墳丘に撹乱が入っていたりしたが、主体部は未掘であった。古墳は造出しが付く円墳である。

墳丘（第２図）

古墳は、東西37.5ｍ、南北41.5ｍ、高さ7.3ｍの円墳で、地山を削り出してつくられている。平野部から死角となる東側の裾は、2.3ｍほど削り残されていて、造出しとなる。ほぼ同じ高さの墳丘南側の斜面と北側の斜面には、幅0.7ｍ～１ｍのテラスが存在する。

墳頂部の規模は、東西11ｍ、南北10ｍの楕円形を呈する。墳頂部は、主体部の北側と南側では、北側の地山が10㎝ほど高くなっている。低い南側に、２㎝～３㎝大の岩（堆積砂）のブロックを多く含み、固くしまった暗黄灰色土が見られた。この土は、高低差を解消するための盛り土の可能性が高い。

テラスは、南側と北側に存在するが、北側のテラスの方が10㎝ほど南側テラスより高くなっている。西側は、このテラスと同じ高さあたりに緩斜面があり、テラスが存在した可能性がある。北東部分は、丘陵の斜面にあたり、テラスは存在しない。東側は、北側テラスと同じ高さで造出しと考えられる平坦面に移行する。この平坦面は、約５度の傾斜で9.8ｍ続き、その先は、約11度の傾斜となる。造出しと考えられる平坦面の北端には、近世～近代の山道と考えられる溝状遺構がある。

裾は、西側に明瞭に認められ、幅2.25ｍの平坦な面が削り出されている。北側の尾根切断の溝底は、西側裾より10㎝ほど低い。

溝　溝は、底面の幅2.3ｍ～2.4ｍを測る。尾根を1.35ｍほど掘り下げて溝としている様子は、あたかも切り割りのようである。覆土は、上から表皮層及び表土層が10㎝の厚さで、その下に灰褐色土が20㎝、黒色土が30㎝、灰褐色土が17㎝、黄灰色土が14㎝、最下層は明灰色土が８㎝の厚さで堆積していた。

主体部（第３図・第４図）

主体部は、墳頂部の中央から検出された。墳頂部の厚さ14㎝の表土層を除去すると地山が現れ、掘り方を確認できた。墳頂部に盛り土がある部分では、主体部の覆土の上に盛り土が施されているよう

に土層断面では観察された。確認面の規模は、長さ9.06m、幅は東端に近いＥＥ′部分で2.47m、中央ＤＤ′部分で2.54m、西端ＢＢ′で2.97mを測る。長軸方向の方位は、Ｎ－86°－Ｅである。

掘り方は、２段に掘られていて、上段と下段の間には、幅13cm～28cmの平坦面がある。平坦面は、東端と西端で幅広くなり、東端で70cm、西端の南側で87cm、北側で43cmを測る。

下段は、長さ7.48m、幅はＥＥ′部分で87cm、ＤＤ′部分で86cm、ＢＢ′部分で88cmを測る。下場の幅は、ＥＥ′部分で50cm、ＤＤ′部分で37cm、ＢＢ′部分で43cmを測り、西端は東端に比べて幅が狭くなる。下段の掘り方底面は、ＣＣ′とＥＥ′部分で円みを帯びるが、ＢＢ′の底面は平坦である。底面は多少の凹凸はあるが、水平である。排水溝は、存在しない。

覆土は、底面の直上に２cm～３cm大の岩のブロックが多く混入する暗黄灰色土（８層）がある。ＣＣ′断面にかかる鉄鏃は、この８層中に存在したと思われる。８層の上に暗黄褐色土（５′層）がある。その上に灰褐色土、黄褐色土、最上層に黒色土が堆積する。覆土は、掘削した土を埋め戻しに使用しているため、岩のブロックを多量に含んでいる。粘土は、全く使用されていない。

ＣＣ′断面の２層中の埴輪片は、円筒埴輪の口縁部破片である。主体部のほぼ全域の覆土上層から、円筒埴輪の破片が出土している。主体部東端の覆土中からは、円筒埴輪の破片に加え壺形土器の破片が出土している。

主体部遺物出土状況（第３図）

第３図下の赤で表示した鉄製品は、主体部掘削中に出土した遺物である。木棺の規模・位置は明らかにできなかったが、掘り方との位置関係、高さから棺の上・棺の外に供えられた遺物と判断している。７の鉄鏃は、東側平坦面の掘り方から10cm程度浮いた状態で出土した。縦断面の土層の観察では、平坦面を先に埋め戻し、後に棺を埋めているように観察された。44の鎌は、農・工・漁具集中地点に接した部分から出土したが、他の農・工・漁具より10cm以上高いレベルから出土している。鉄鏃10本は、下段の掘り方の肩から出土した。鏃は、一定の方向を向くということはない。12の鏃の有機質としたのは、箆と考えられる。16の鉄鏃は、掘り方の底面から20cm以上浮いた状態であった。

第７図の黒で表示した鉄製品が、掘り方底面近くから出土したもので、棺と同じレベルと考えられる遺物である。

32の鉄剣は、掘り方の中央方向に傾いていて、壁に沿ってずり落ちたような印象を受ける。茎は、途中から２つに折れていた。35の刀子切先は、32の上に乗っていた。２・４・６・18の鉄鏃は、掘り方の底面から10cm以上浮いていた。鏃の向きは、一定ではない。農・工・漁具は、上層から刀子、鉄斧、鍬先、やす、釣り針が出土し、中層から、鉄斧、鎌、鍬先、鋸、釣り針が出土した。釣り針60は、59の鋸の下に入っていた。下層からは、工具である鉋、鑿、錐が出土した。これらの農・工・漁具は、密に重なり合って出土している。

埴輪出土状況（第５図～第７図）

埴輪は、墳頂部と裾から検出されたが、テラスから据えられた状態で検出されたものはない。埴輪は、墳頂部と裾に据えられていた可能性が高く、埴輪を据えるための掘り方と断定できるものはない。

墳頂部（第５図）

墳頂部は、すでに削平を受けていて、埴輪は、北側の端に沿って、基部の細片化したものが検出されたにすぎない。検出された埴輪間の距離は、埴輪の中心から中心で、11・14間が1.75m、14・８間が1.45m、８・15間が1.1mを測り、15と４は隣接する。埴輪には、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪がある。

西側裾（第６図）

西側の裾は、削平を受けることもなく残存状況は良好であったが、据えられた状態で検出された埴

輪はない。29の円筒埴輪は、裾近くの墳丘に堆積した土の中から口縁部を下に向けた状態で検出された。36の埴輪は、散乱した状態で検出されたが、復元すると口縁部の２分の１を欠損する程度で、残存状況は良好であった。墳頂部から転落してきた埴輪が、広範囲に散乱することなく、このように良好な状況で検出されるものか疑問が残るところである。

北側裾

北側裾や溝内から円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の破片が多く出土したが、据えられた状態で検出されたものはない。60の形象埴輪の破片と考えられるものは、溝の東端から出土した。

東側裾（第７図）

東側裾から1.2m～1.45mの距離をおいた場所から埴輪の基部が、４個体検出された。埴輪間の距離は、埴輪の中心から中心で、59・55間が2.3m、55・58間が1.05m、58・57間が1.1mを測る。59・55間には、もう１個体存在した可能性が高い。

57の北西１mのところから楕円形の浅い窪みが検出された。埴輪を据えた痕跡の可能性がある。57の埴輪からは、掘り方状のものが検出された。

３．遺物の概要

出土遺物には、埴輪、土器、鉄製品がある。

埴輪（第８図～第14図）

第８図－１～第９図－19までは、墳頂部出土である。第９図－20～第10図－27は、墳頂部から転落したと考えられるものである。第10図－28・29、第11図－36～第12図－46は、西側の裾近くの墳丘や裾から出土したものである。第11図－30～35は、墳頂部から転落したと考えられるものである。第13図－47～54は、北側裾、溝から出土したものである。第14図－55～59は、東側裾から出土したものである。60は溝東端から、61は西側裾から出土した。

円筒埴輪

円筒埴輪で全形を復元し得るものは、第10図－28・29、第11図－36、第14図－55がある。28は、口縁部径26.0cm、底部径17.0cm、器高41.5cmを測る。29は、口縁部径26.2cm、底部径17.0cm、器高41.8cmを測る。36は、口縁部径27.9cm、底部径18.6cm、器高42.35cmを測る。55は、口縁部径24.0cm、底部径18.0cm、器高42.55cmを測る。４個体とも、黒斑がある。28は、基部下半に縦ハケ目を残し、２段目・３段目に横ハケ目を施す。ハケ目は、１cmの中に3.5～４本の条線がある。口縁部の内面に横ハケ目を施す。29のハケ目は、１cmの中に３～3.5本の条線がある。36の横ハケ目は、半周程度連続して施されている。基部は、下端に縦ハケ目を残し、残りに横ハケ目を施す。横ハケ目は、２回にわたって行われている。ハケ目は、１cmに３～４本の条線がある。55のハケ目は、１cmに3.5～４本の条線がある。底部内面に指頭圧痕が残り、内面上端は突帯あたりまで横ハケ目を施す。37は、底部を欠損するが、調整は良好に残る。基部は、縦ハケ目だけで横ハケ目は施されない。ハケ目の条線は、１cmに3.5～４本がある。２段目の横ハケ目は、上、中、下の３回にわたり施されているように観察される。ハケ目は、６分の１周ほどで静止した痕跡がある。外面に赤彩がかすかに残る。

円筒埴輪の口縁部の径は、61の21.4cmが最小、38の36.2cmが最大で、25cm～27cmに収まるものが多い。口縁部の形態は、度合いに差があるが、すべて外反する。21は、垂直に立ち上がり、口縁部端部だけ外反させるもので、異彩を放つ。61の埴輪は、器表の剥落があるが、当初から器壁が薄くつくられていたと考えられる。

突帯の高さは、１㎝を超えるものはなく、透かし孔は、円形または楕円形を呈する。

朝顔形円筒埴輪

朝顔形円筒埴輪で図示できるものはきわめて少ない。

１・２・19・24・27・42・54は、口縁部である。１は、外面の突帯から下を欠損するが、欠損する部分で屈曲させている可能性がある。24は、口縁部が直線的にのび、端部だけを外反させている。外面に赤彩が残る。42は、口縁部が外反し、突帯のところでわずかに屈曲する。突帯の断面は、四角形を呈する。内面に赤彩が残る。口縁部の径は、１が42.5㎝、24が41.9㎝、42が37.0㎝を測る。朝顔形円筒埴輪の口縁部の調整は、外面に縦ハケ目、内面は横ハケ目が施される。

25は、胴部から頸部まで残り、長方形の透かし孔が２方向に開けられる。頸部の突帯から下にナデ調整が施され、肩部には横ハケ目が施される。胴部外面には、横ハケ目が施される。ハケ目の条線は、１㎝に４本である。26の頸部の突帯から下はナデ調整が施され、肩部には横ハケ目が施される。外面に赤彩の痕跡が残る。43の頸部突帯の直下には縦ハケ目の痕跡が残り、その下に横ハケ目が施される。26・43には、長方形と考えられる透かし孔の一辺が残る。

形象埴輪

60は、形象埴輪の破片と考えられる。外面のハケ目は、ナデによりほとんど消えかけている。内面は、ナデ調整が施される。形象埴輪と考えられる破片は、この１点だけである。

埴輪

円筒か朝顔形円筒か区別のつかない埴輪の基部の底部径は、次のとおりである。

墳頂部出土の埴輪は、最小が17の15.6㎝、最大が３の21.8㎝、18.2㎝～20.8㎝に収まるものが多く、東側裾出土の埴輪では、57が20.5㎝、58・59は18.6㎝である。

透かし孔は、円形または楕円形の透かし孔と考えられるものが、49～51に見られる。

その他特徴的なものをあげると、57の底部近くの外面に幅３㎜の紐状の圧痕が付着する。58の内面には縦方向の指ナデが施される。

土器（第15図）

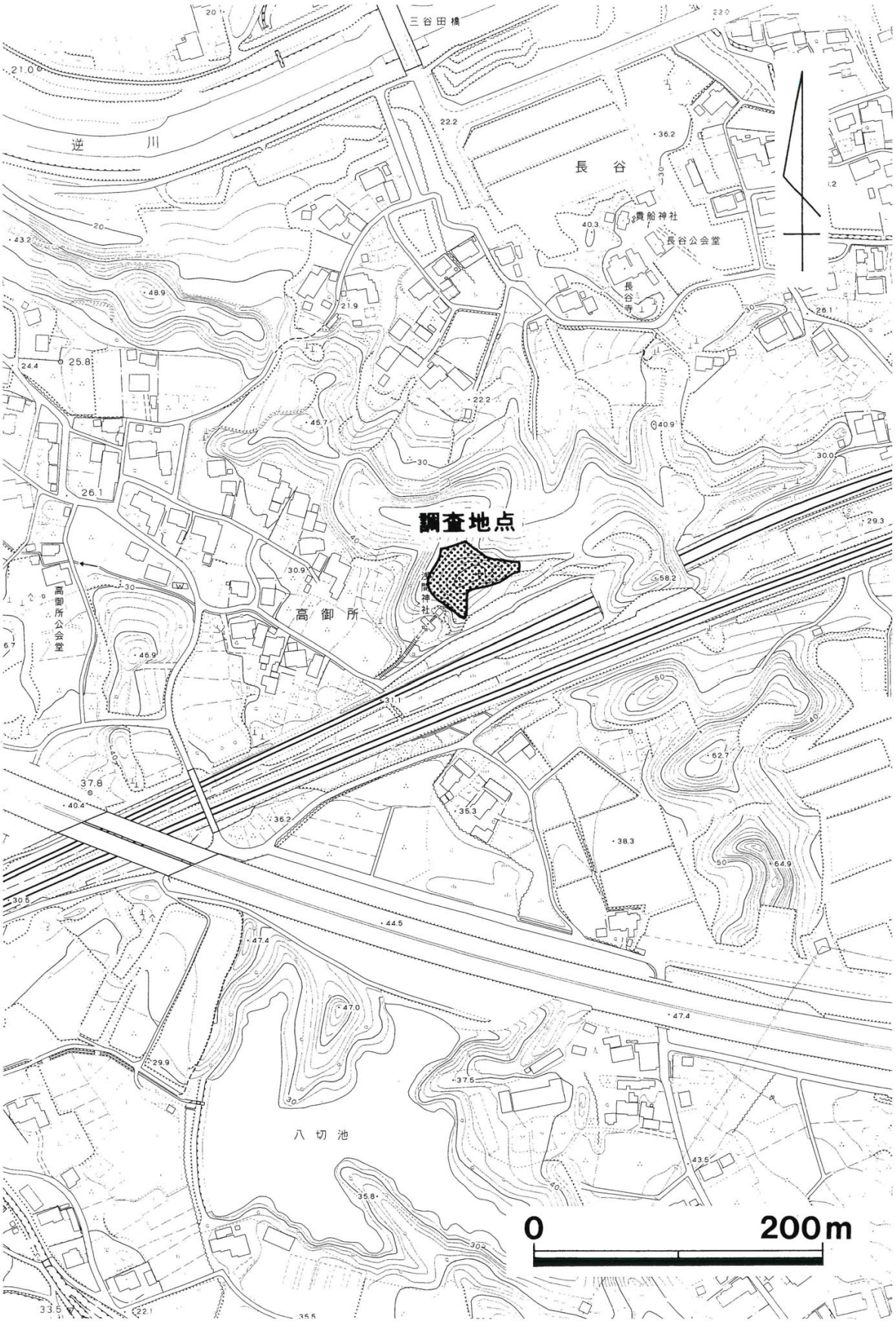
１は、南側テラスから出土した土師器壺で、口径12.5㎝、最大径12.8㎝、器高13.85㎝を測る。底部は、小さく不安定な形状である。器表はほとんど剥落しているが、内面頸部に斜めのハケ目が残る。２の土師器壺は、12－７Ｇ区、近世以降の溝の北側斜面から出土した。口径18.6㎝、最大径24.4㎝を測る。底部が小さく不安定な形状である。内外面にハケ目を施す。３は、東側裾の墳丘近くから出土した土師器高坏の脚部である。４は、墳丘の北東斜面から出土した須恵器の小破片で、甕類と考えられる。５は、北側溝の覆土から出土した須恵器の小破片で、甕類と考えられる。６と７は、北西裾付近から出土した土器の破片である。６の口縁部外面には、ヘラ状工具により三角押文が施される。体部外面には、半裁竹管状工具による平行沈線文が施される。内面には、板ナデ状のナデ痕が残る。６の外面には、半裁竹管状工具による平行沈線文が施される。内面には、板ナデ状のナデ痕が残る。５・６は、同一個体と考えられ、縄文時代後期前半に位置づけられる。

鉄製品（第16図～第18図）

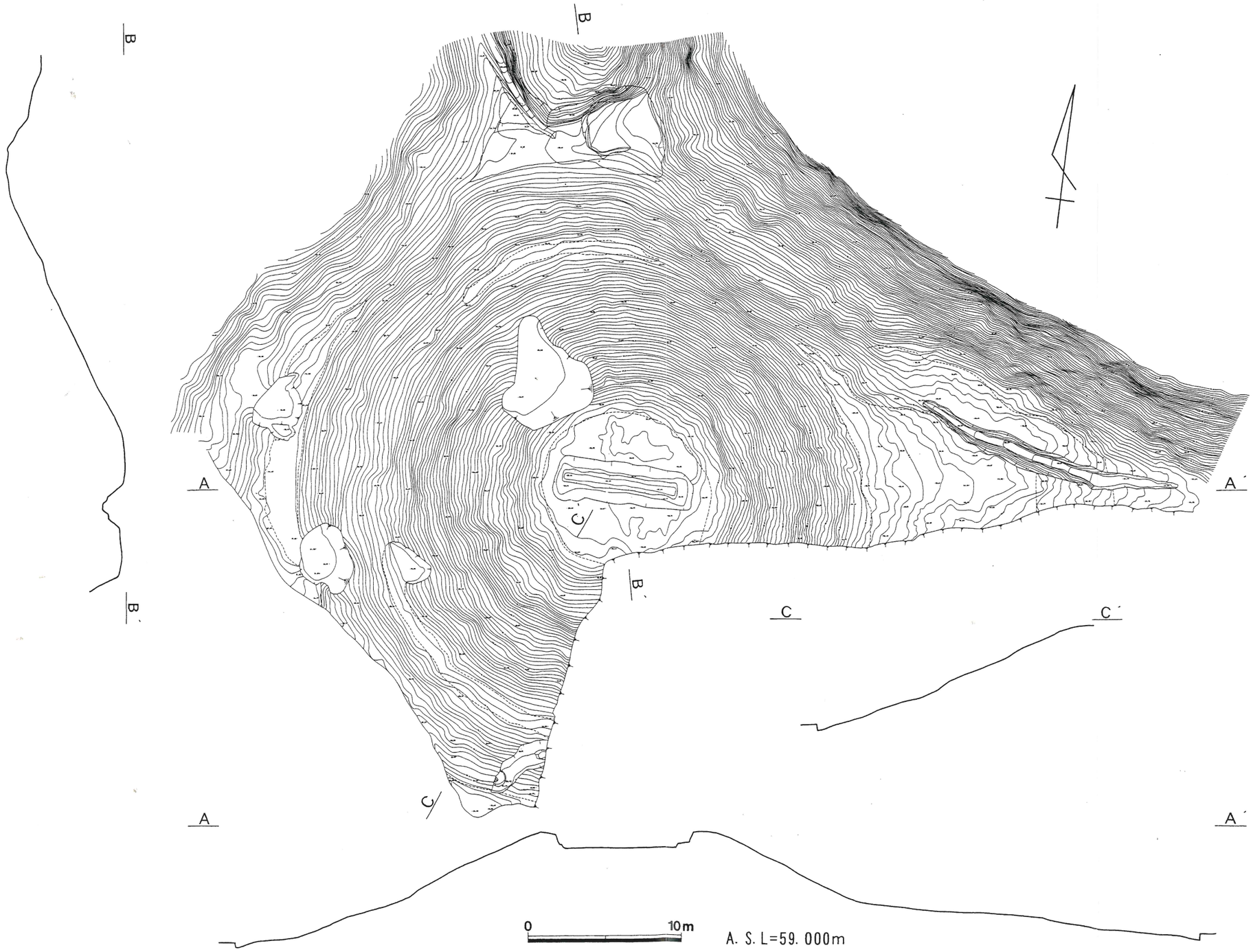
鉄製品は、すべて主体部から出土したものである。

剣１、鏃28以上、刀子３、斧６、鎌３、鍬先２、鉇２、鑿３、錐２、鑿または錐４、鋸１、釣り針３、やす１、不明１がある。

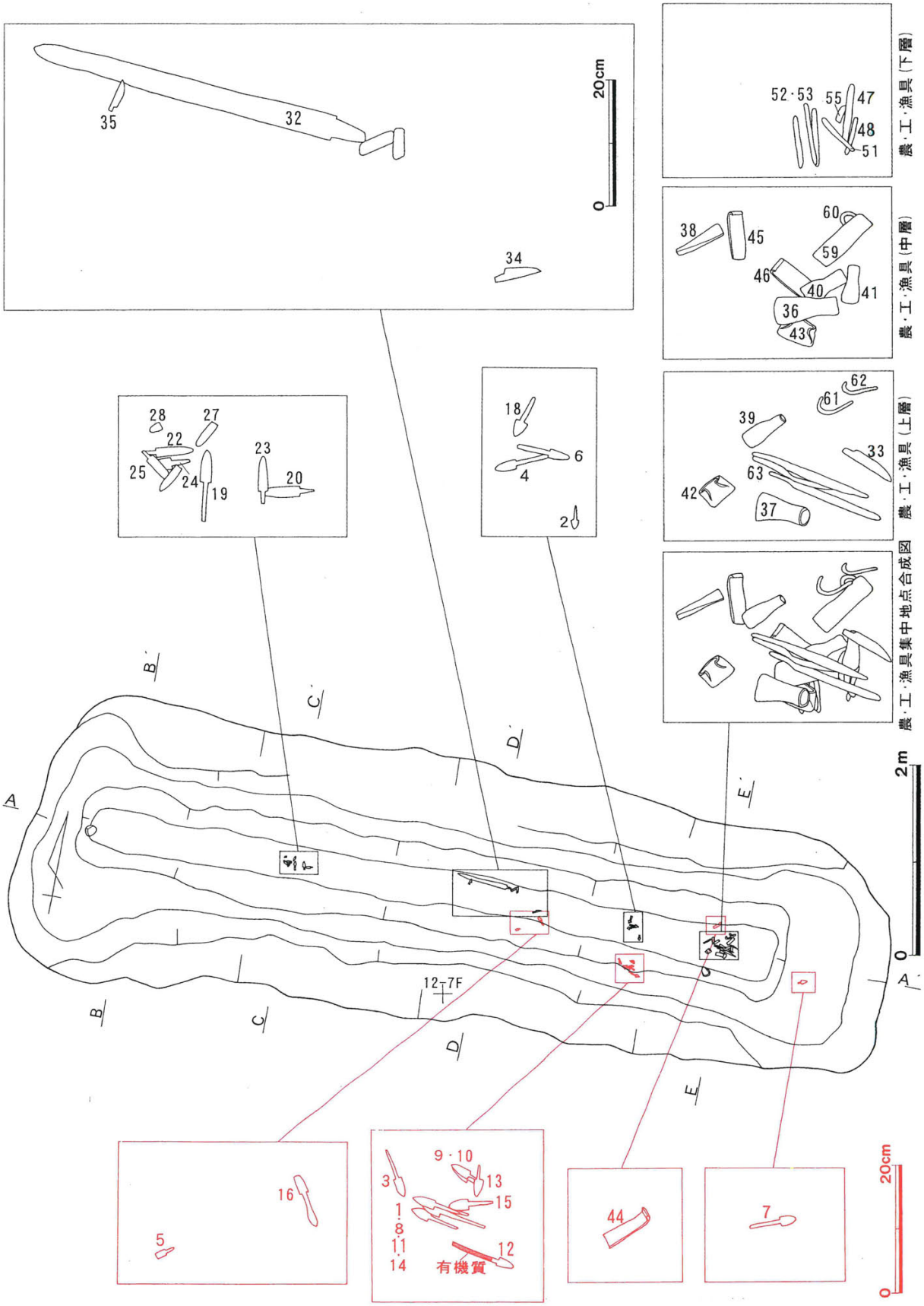
この古墳は、出土遺物から、古墳時代中期前半に位置づけられる。



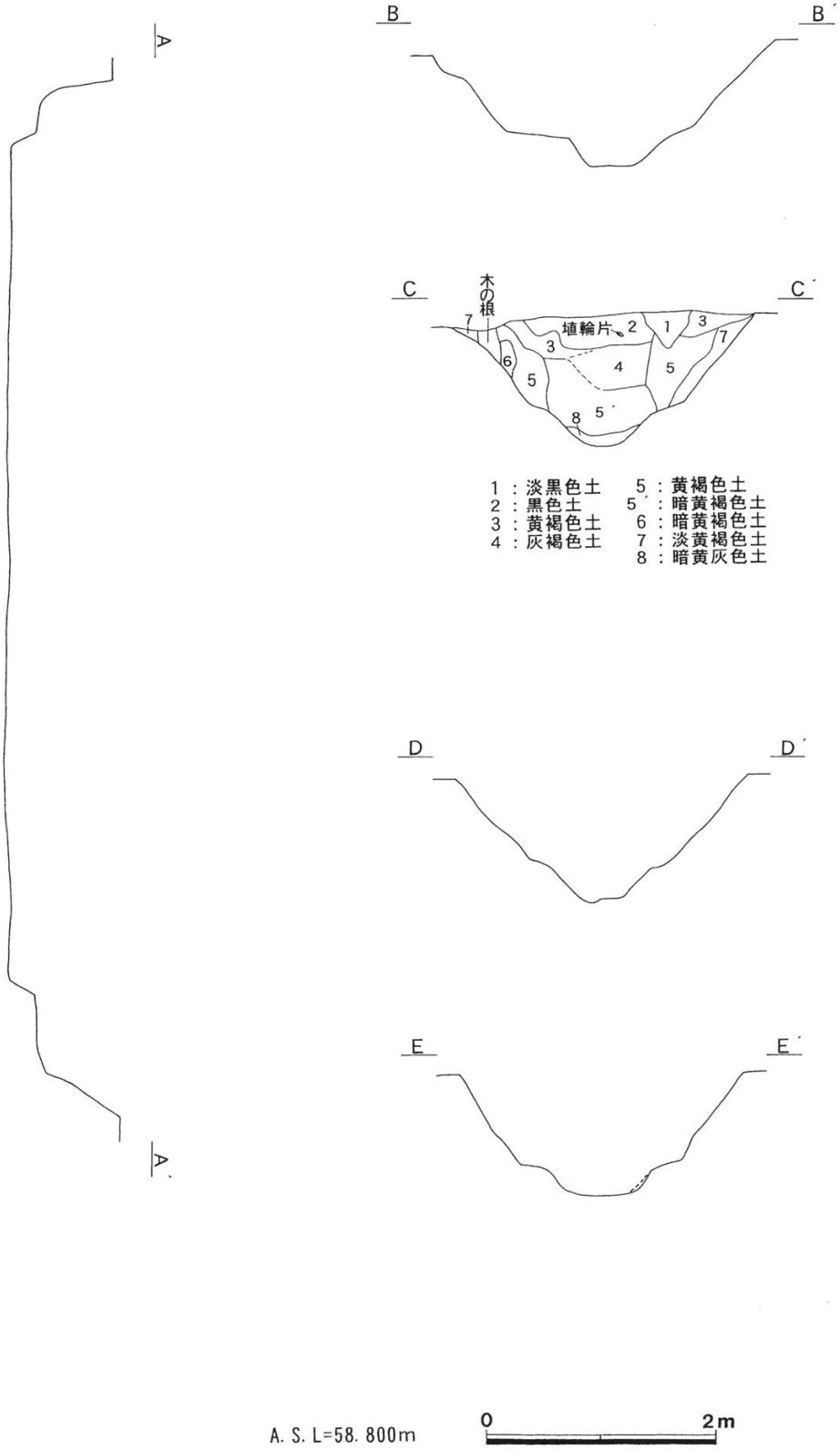
第1図　位置図



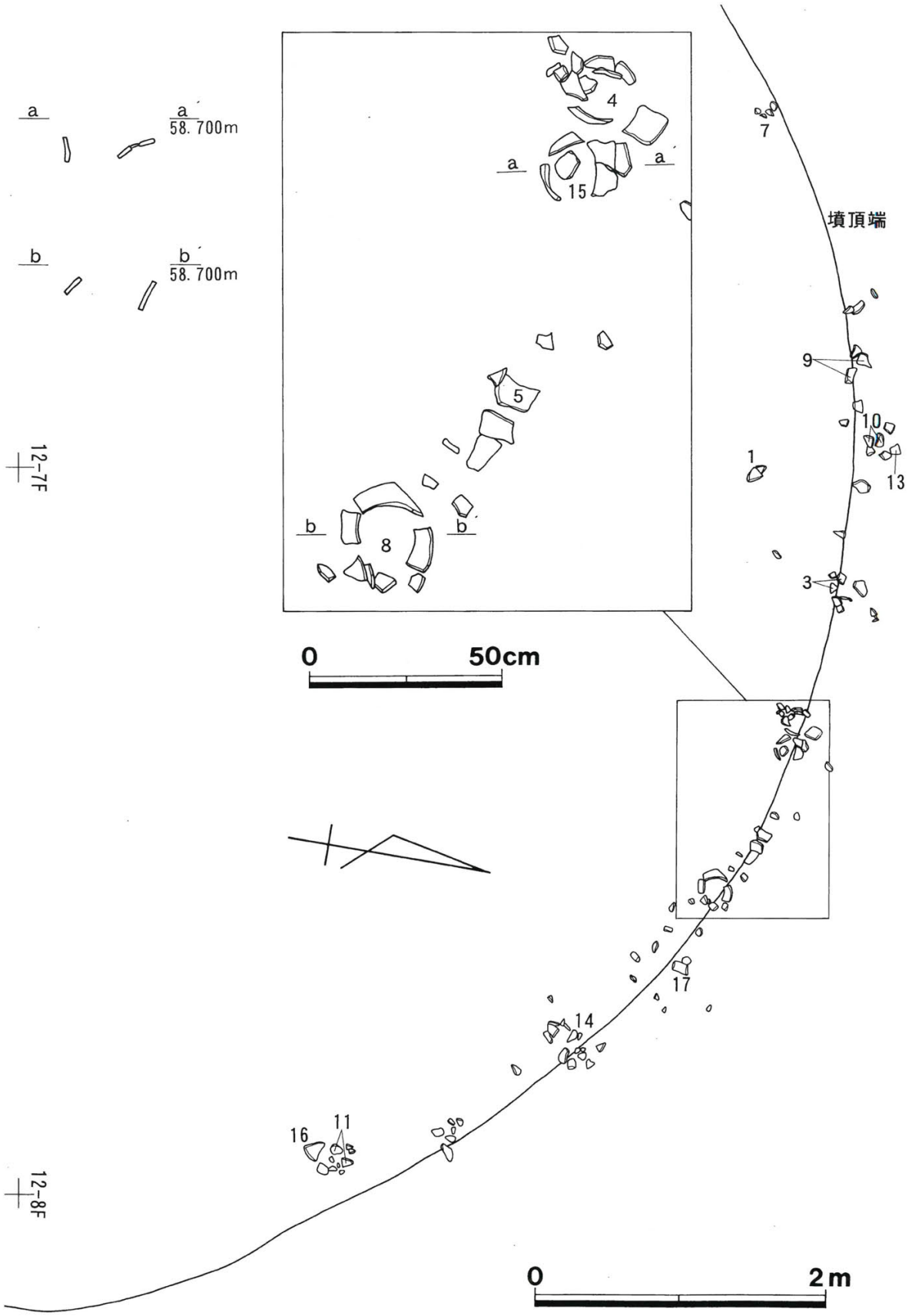
第２図　墳丘図



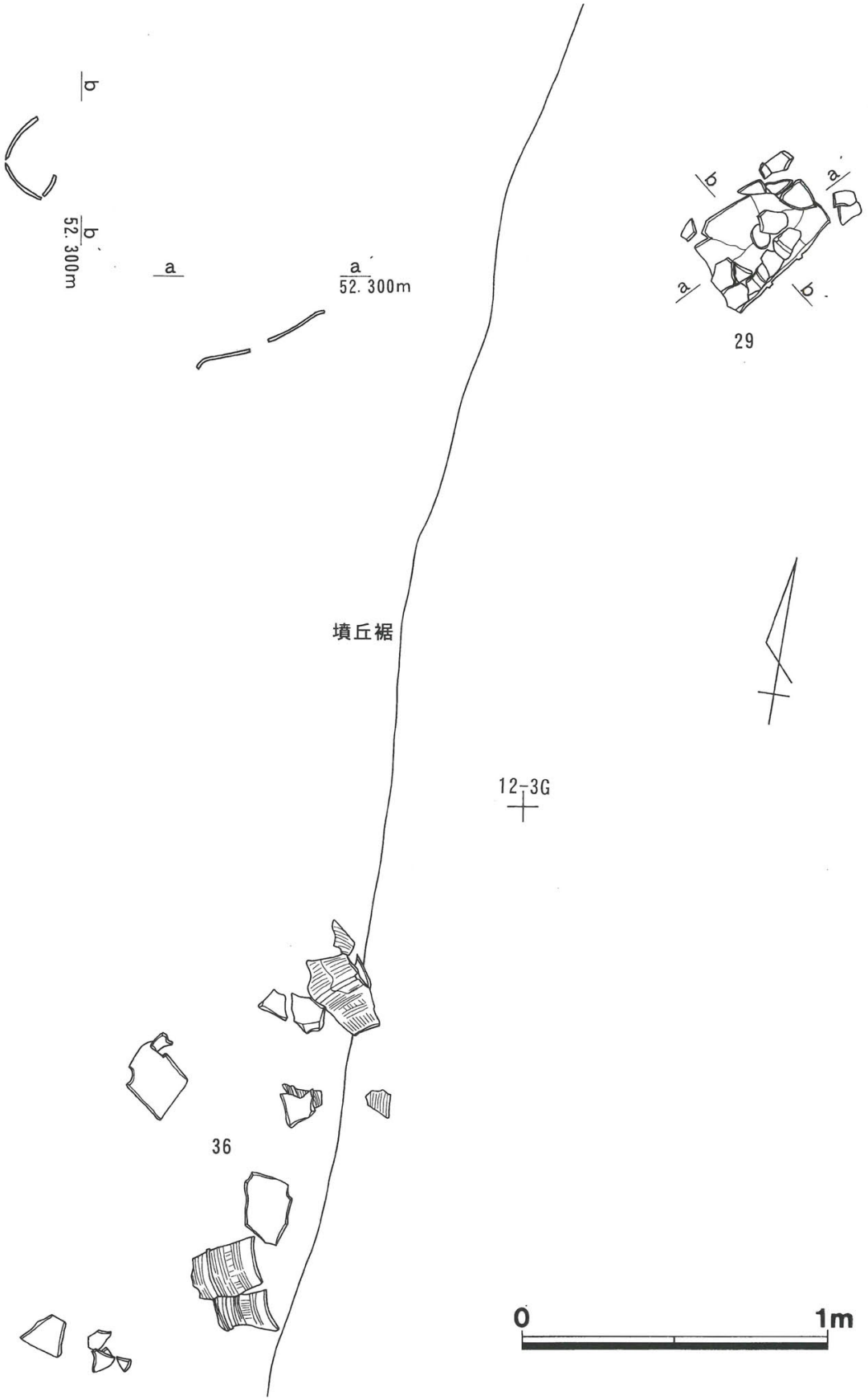
第３図　主体部実測図(1)


A
A´
B
B´
C
C´
木の根
埴輪片
1
2
3
4
5
5´
6
7
8
D
D´
E
E´
1：淡黒色土
2：黒色土
3：黄褐色土
4：灰褐色土
5：黄褐色土
5´：暗黄褐色土
6：暗黄褐色土
7：淡黄褐色土
8：暗黄灰色土
A. S. L=58. 800m
0
2m

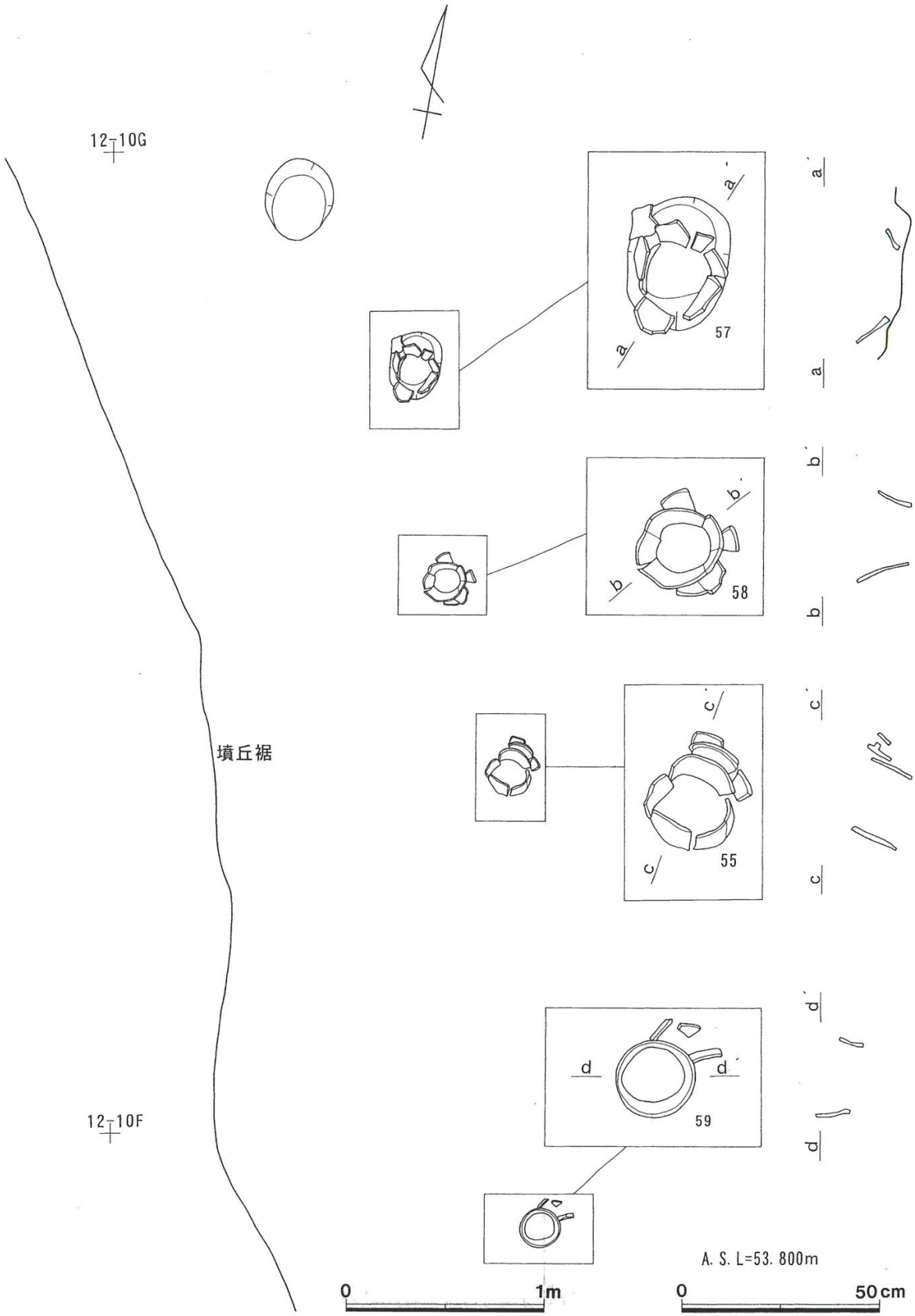
第４図　主体部実測図(2)



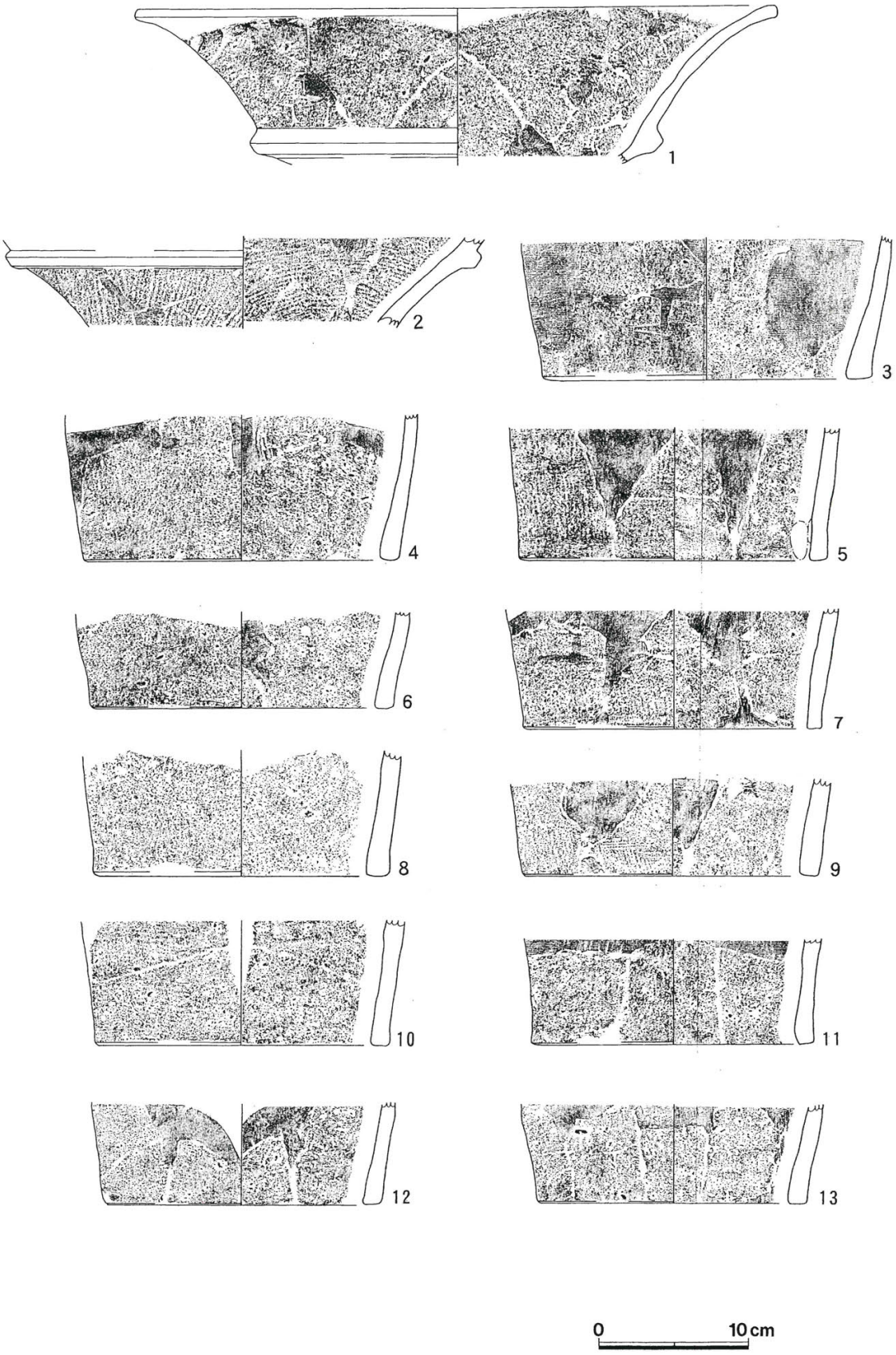
第５図　墳頂部埴輪出土状態実測図



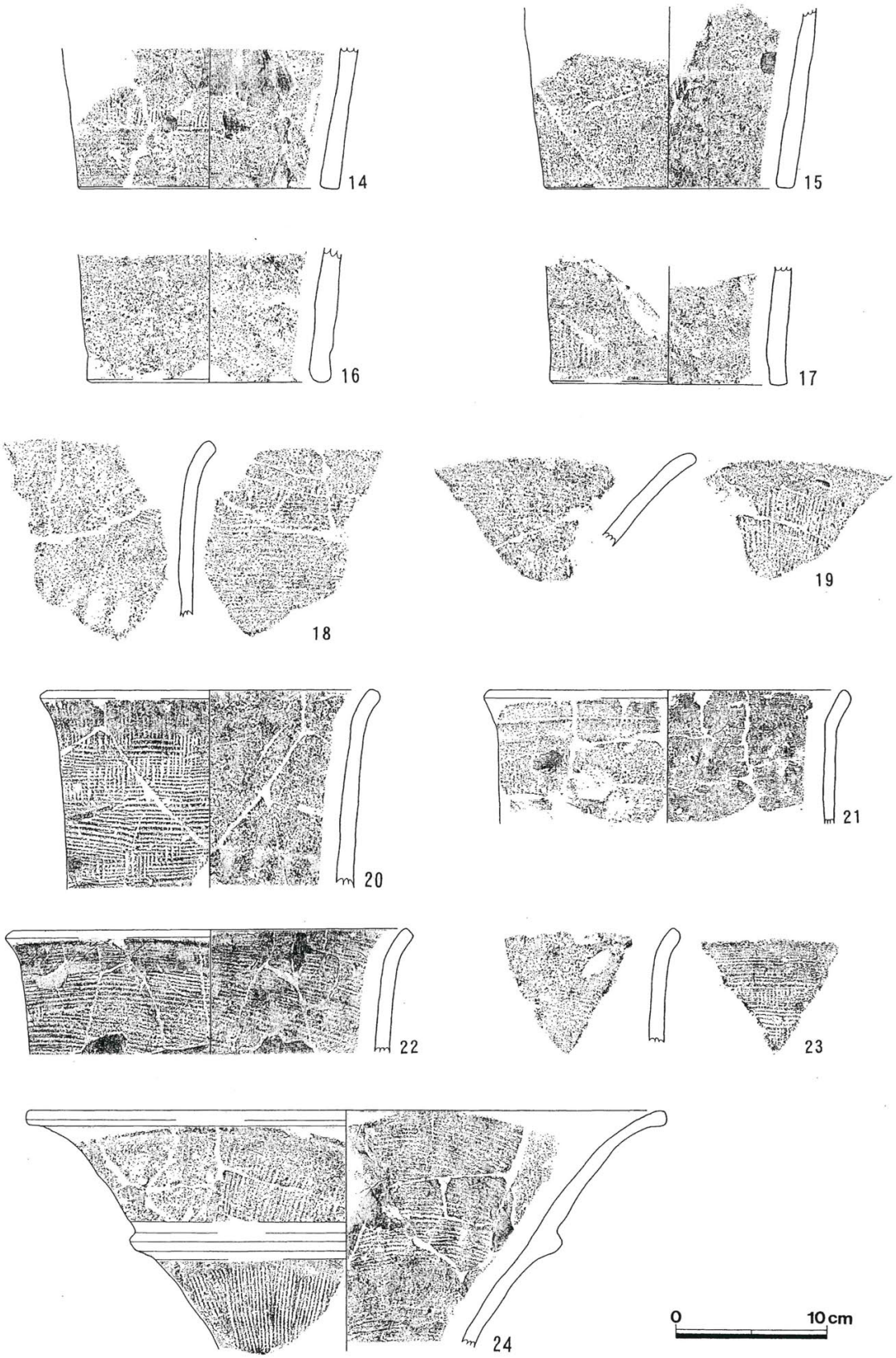
第６図　西側裾埴輪出土状態実測図



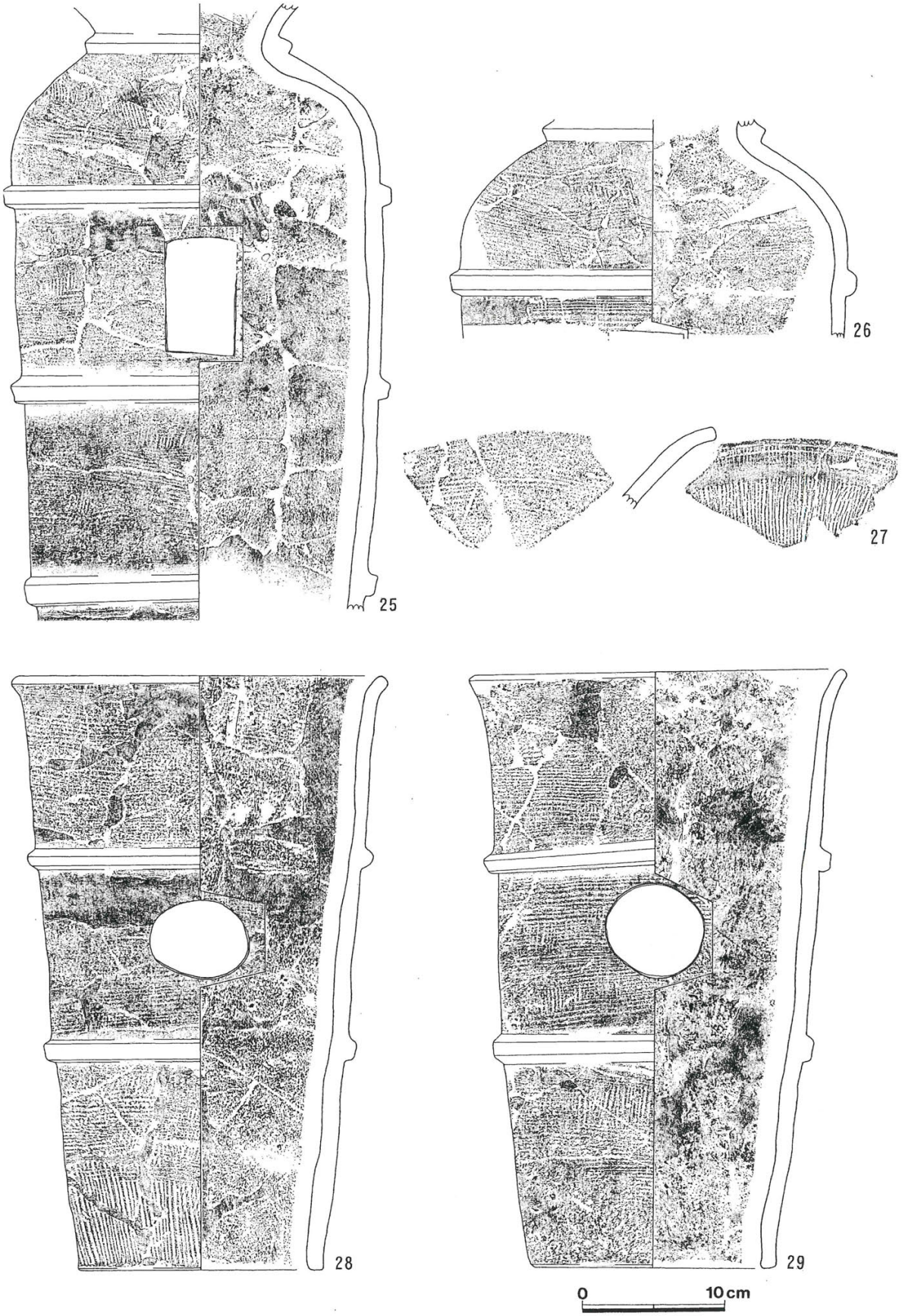
第７図　東側裾埴輪出土状態実測図



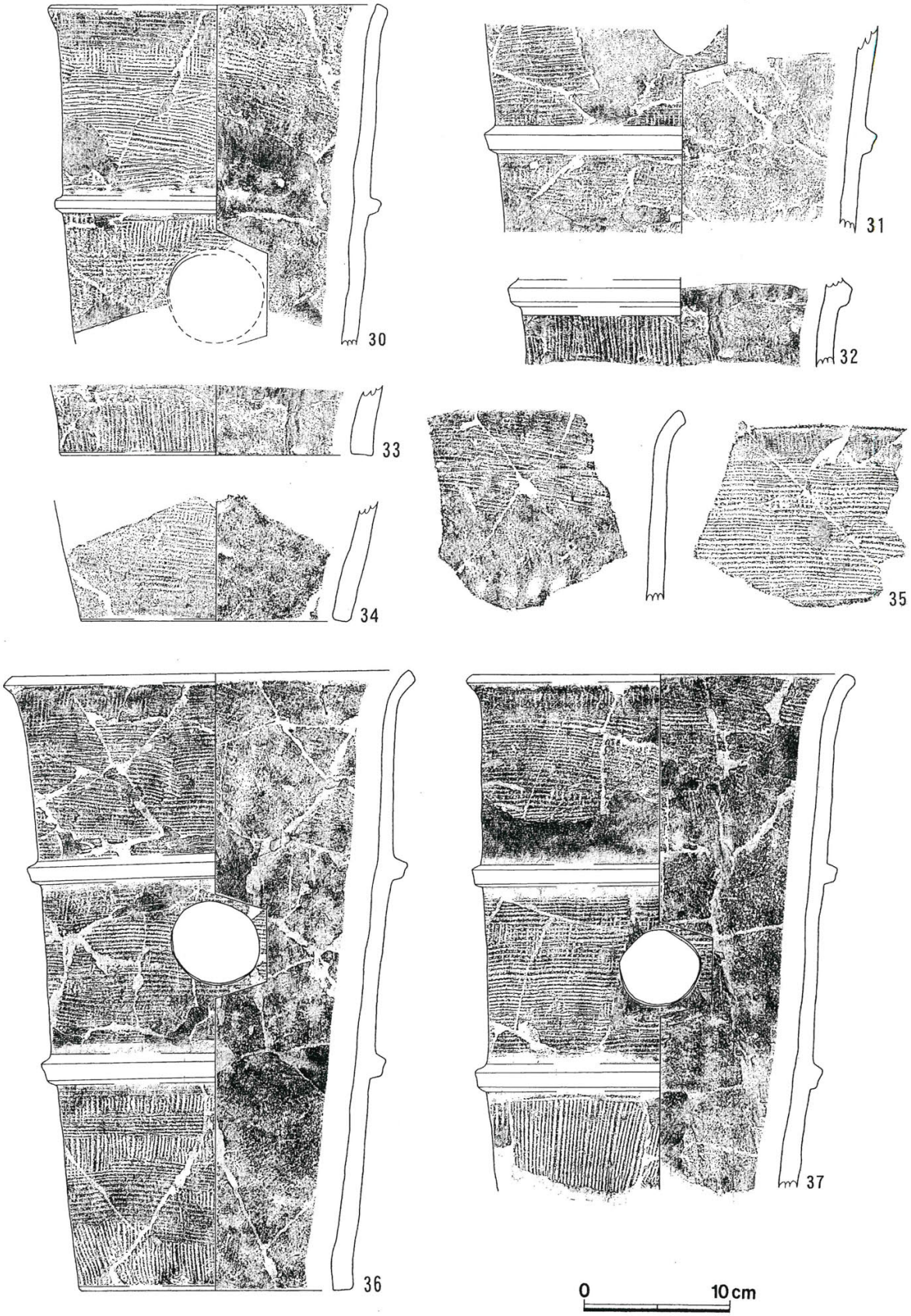
第８図　埴輪実測図(1)



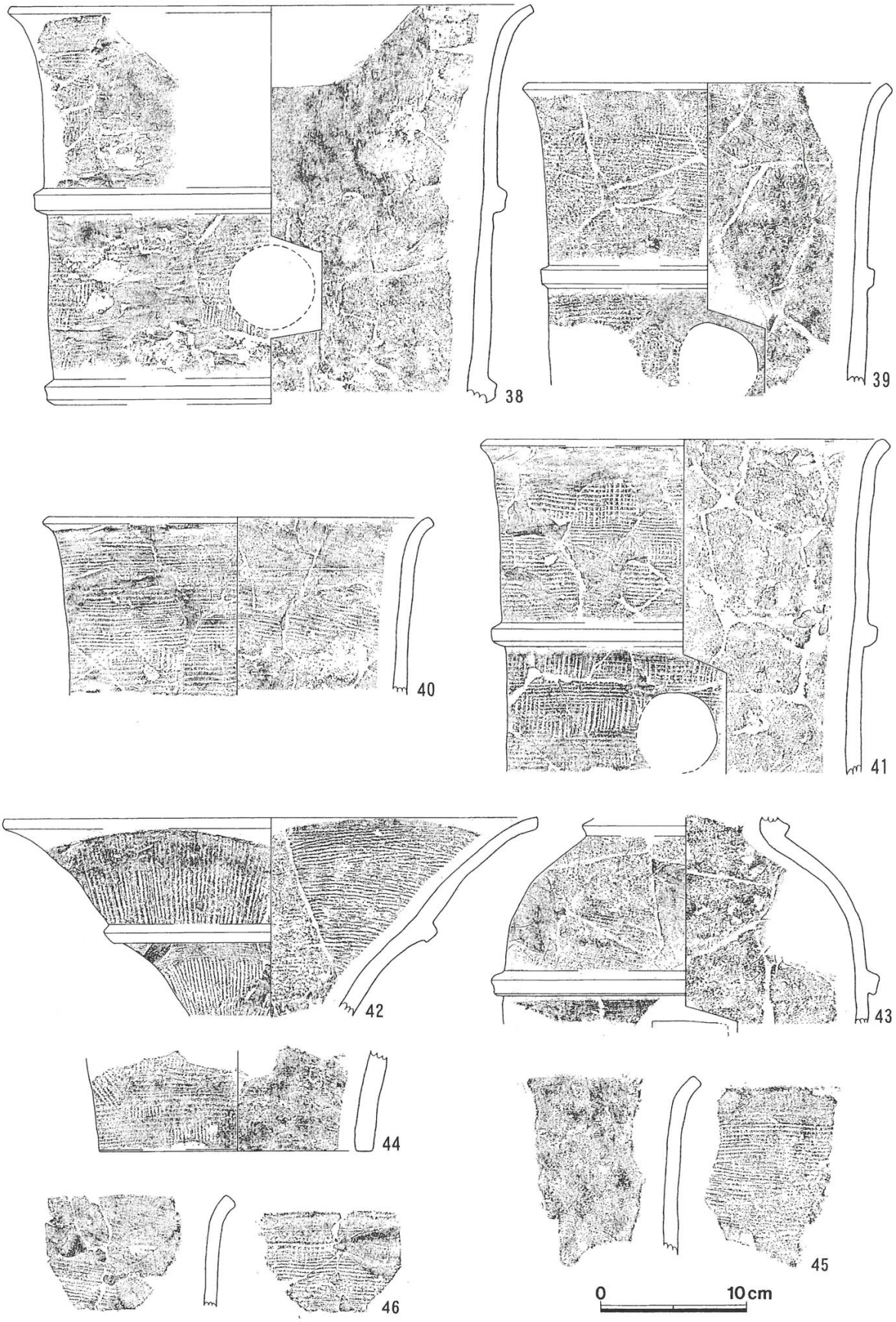
第９図　埴輪実測図(2)



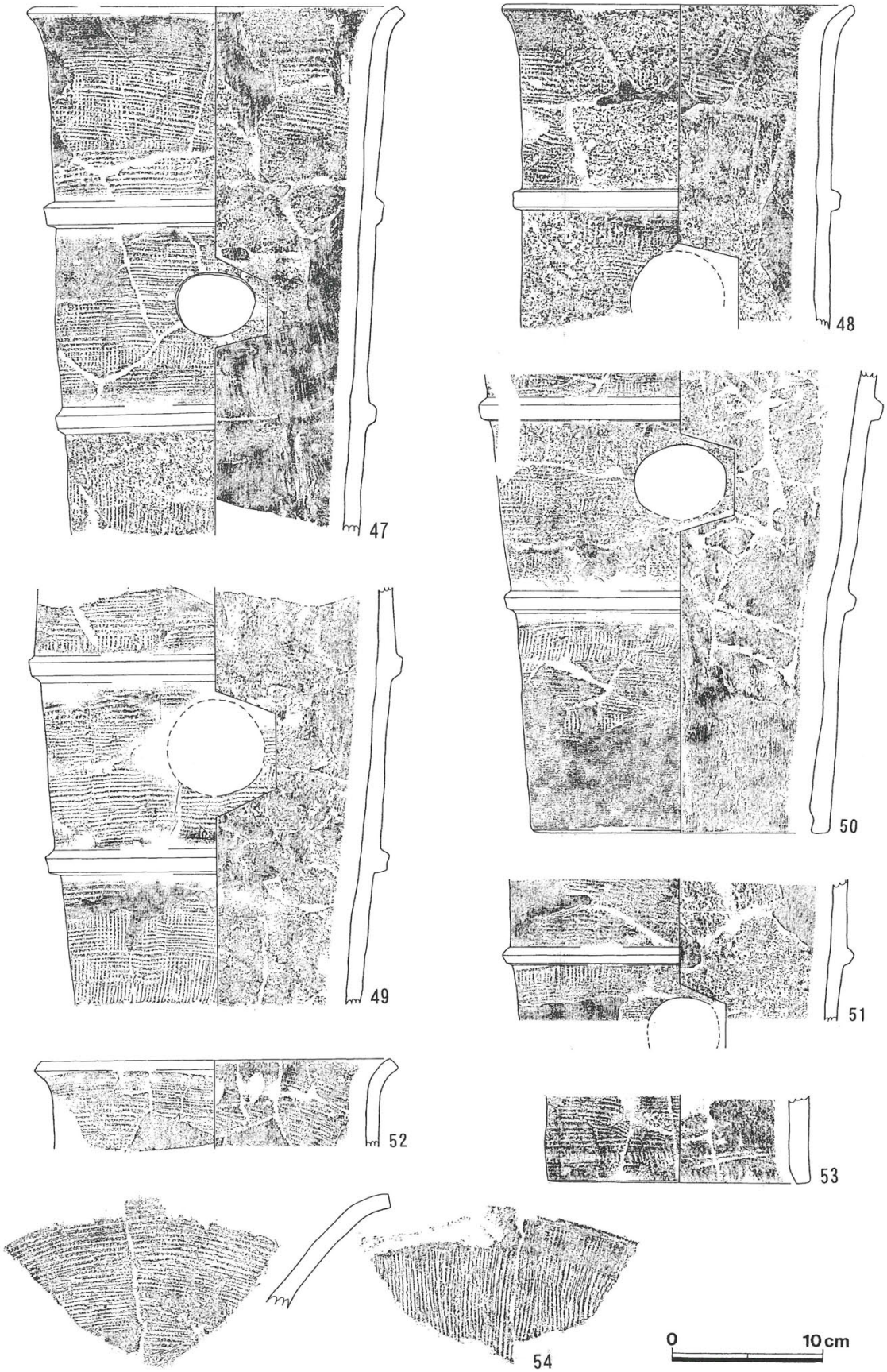
第10図　埴輪実測図(3)



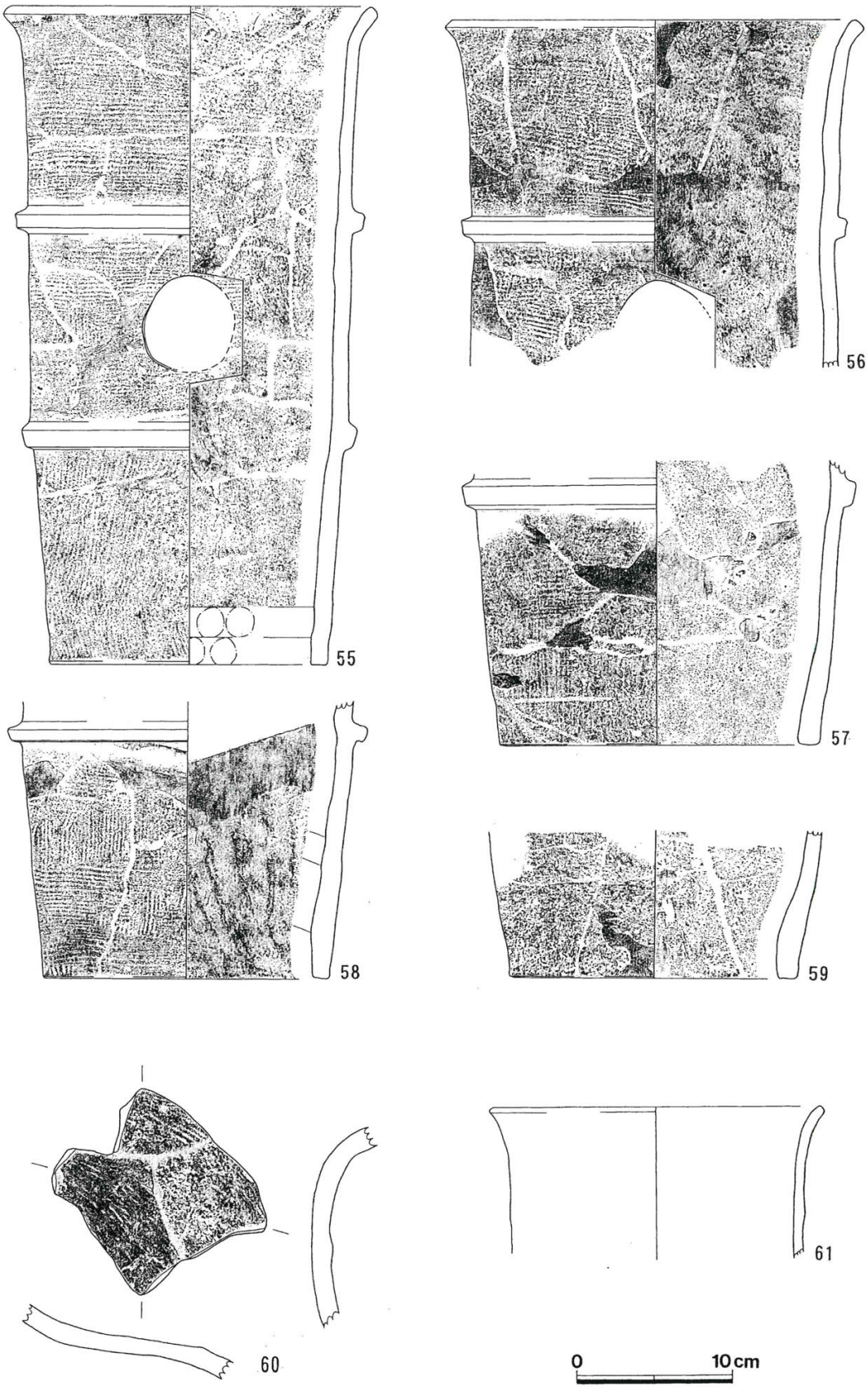
第11図　埴輪実測図(4)



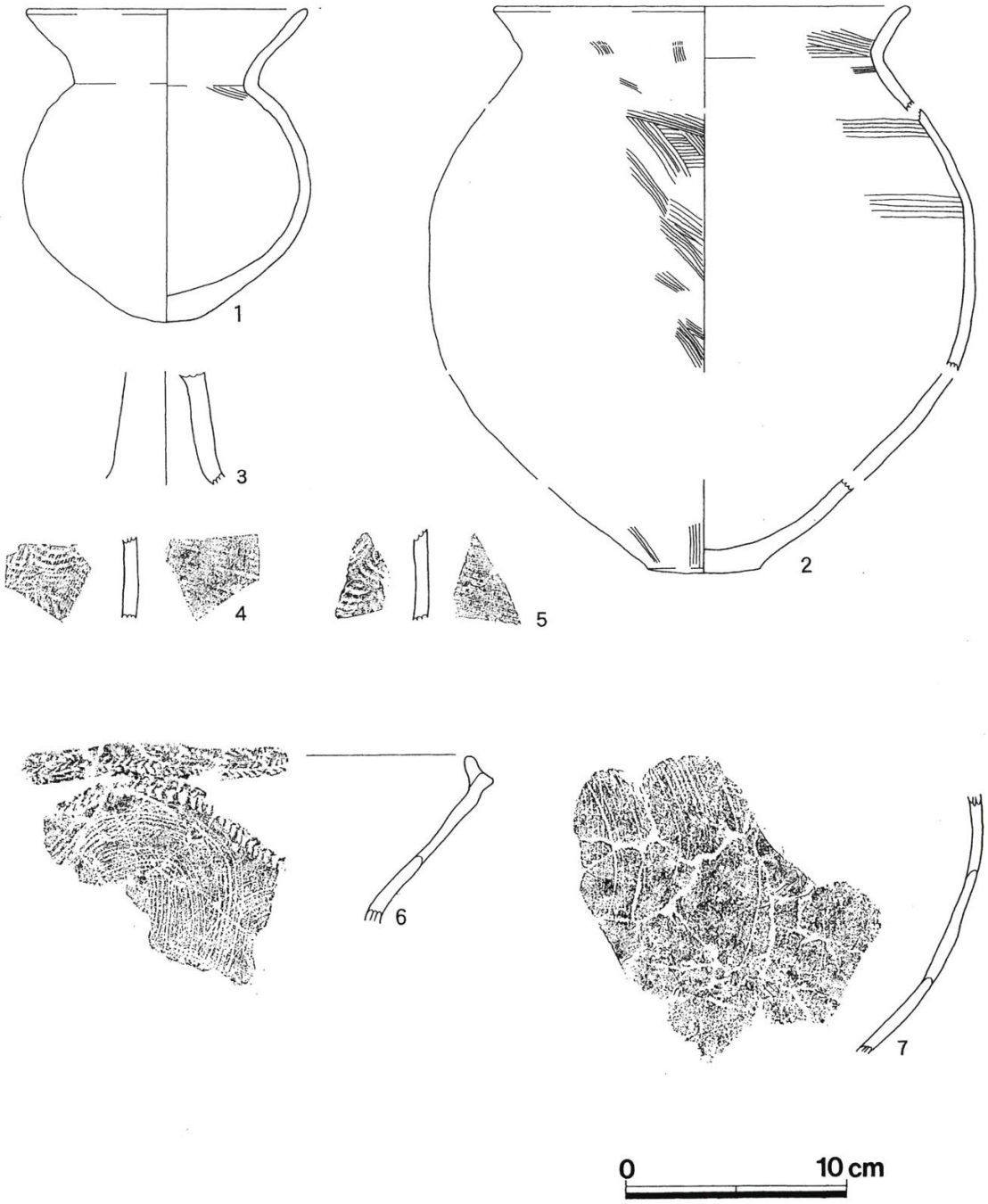
第12図　埴輪実測図(5)



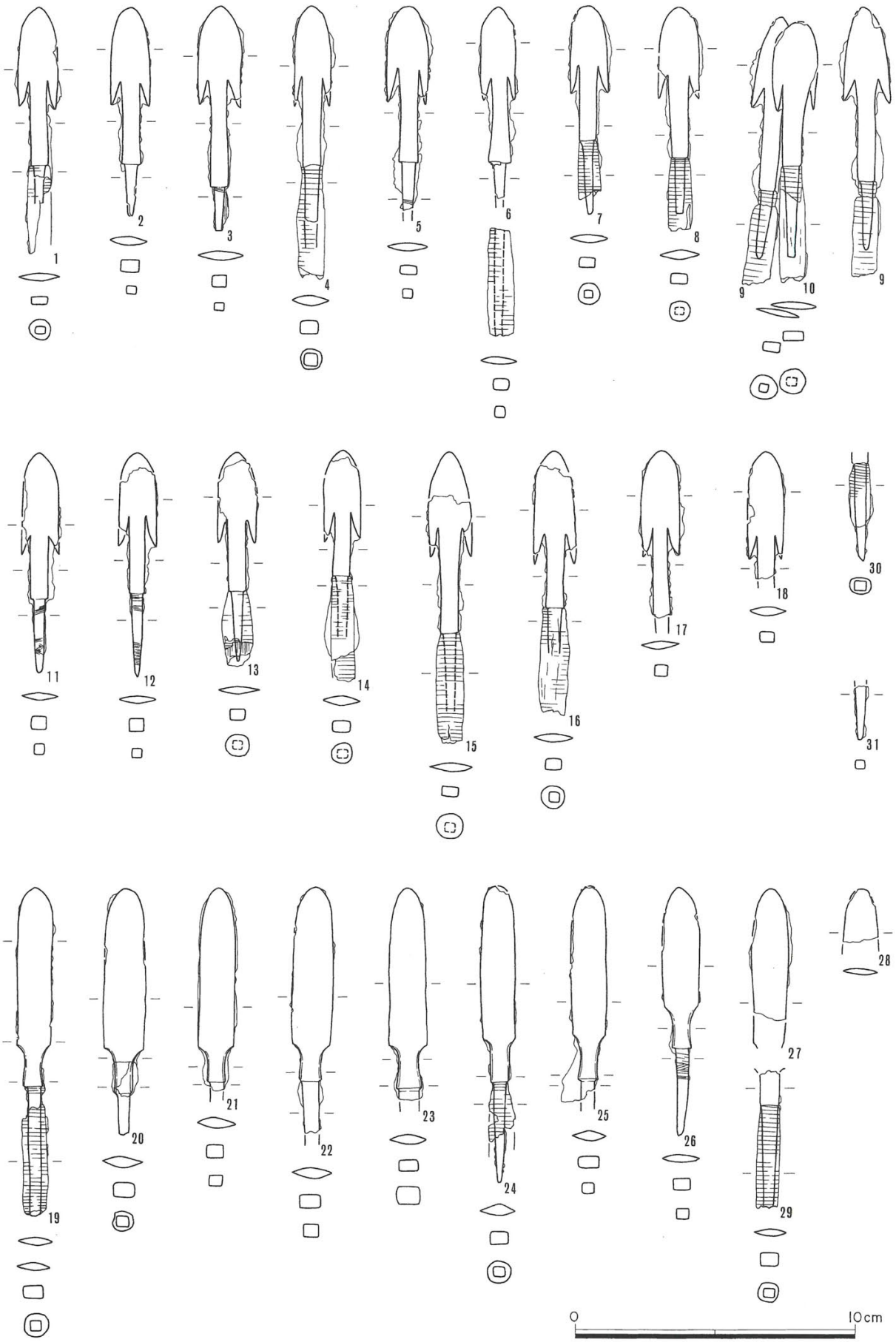
第13図　埴輪実測図(6)



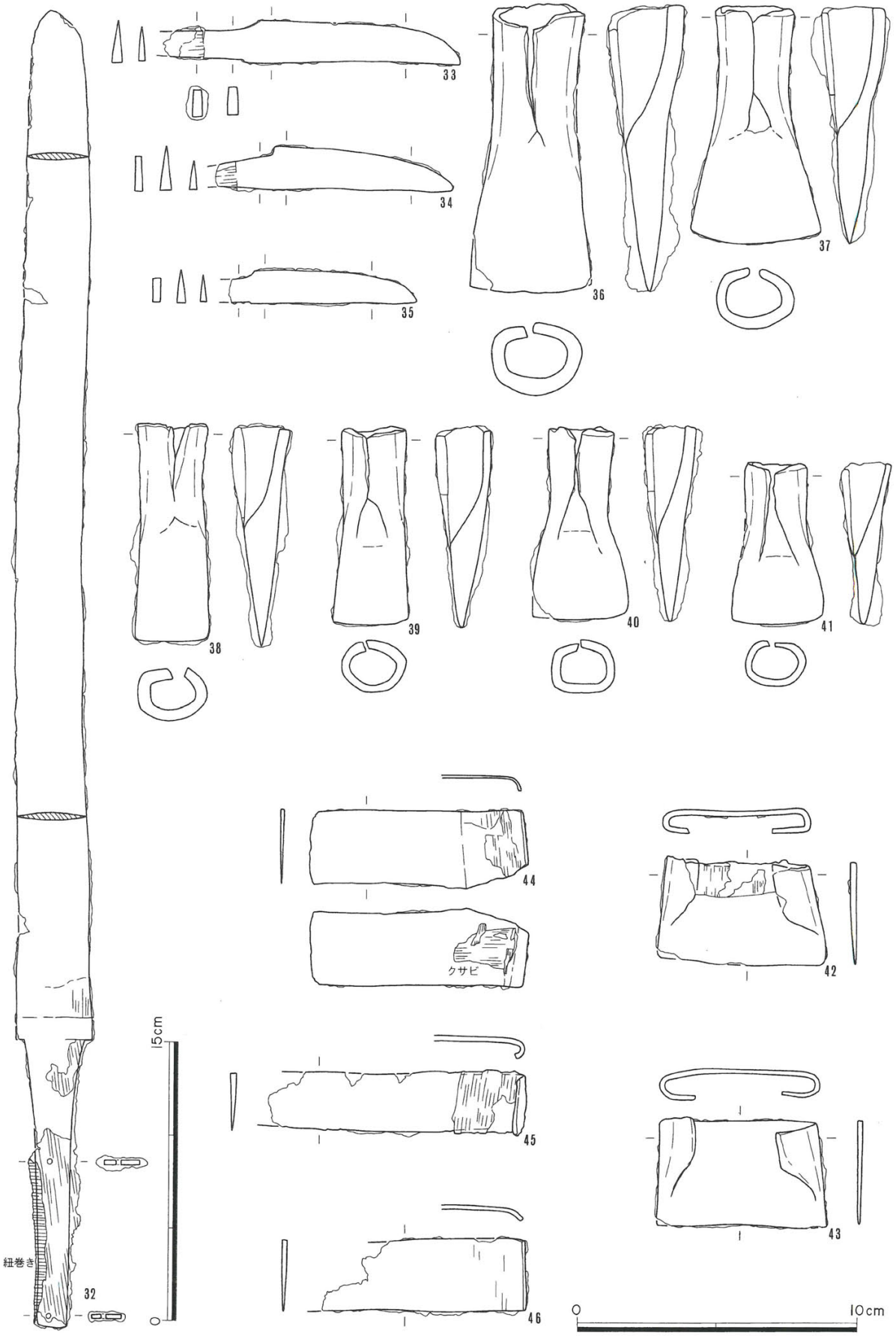
第14図　埴輪実測図(7)



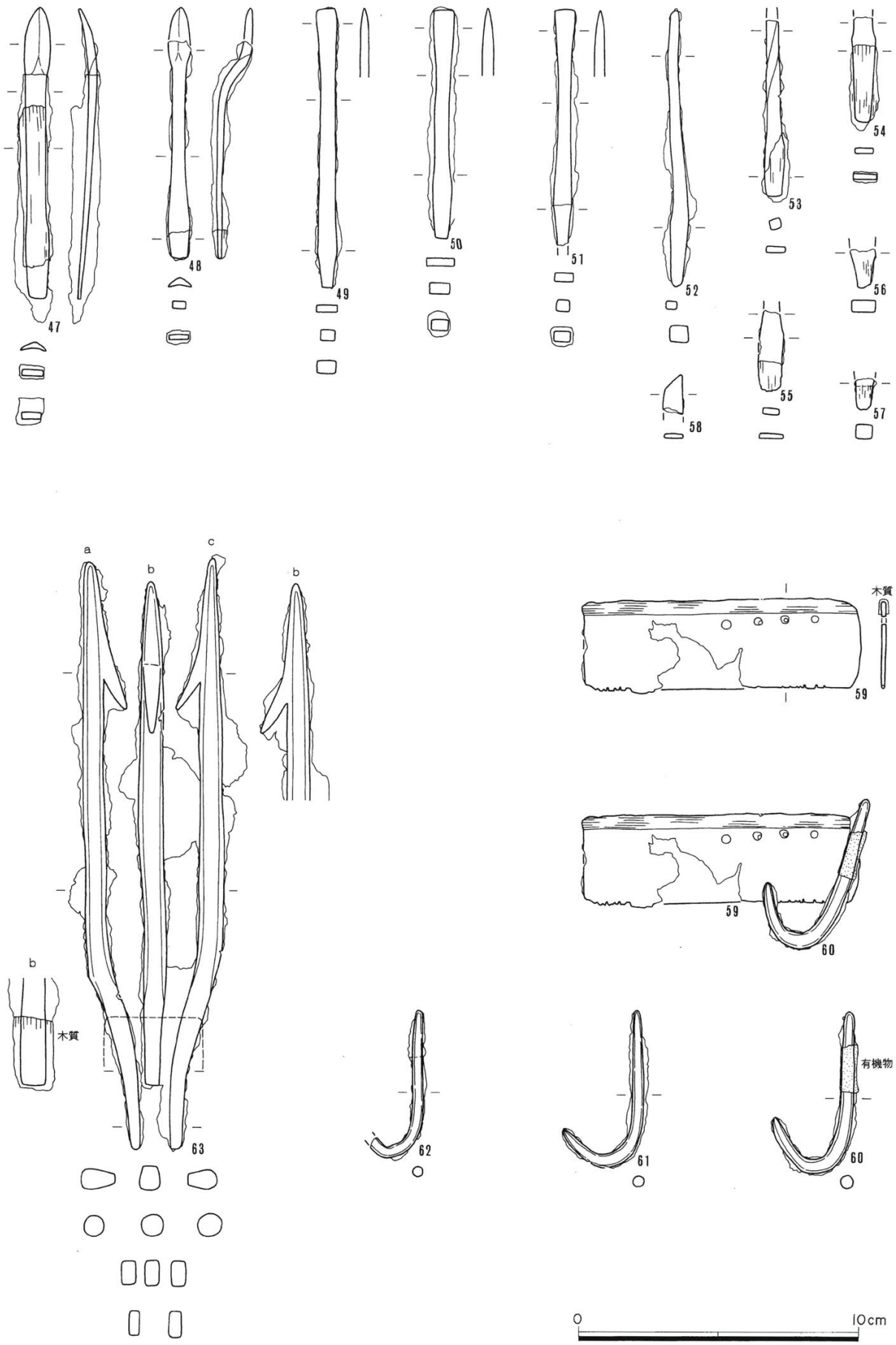
第15図　土器実測図



第16図　鉄製品実測図(1)



第17図　鉄製品実測図(2)



第18図　鉄製品実測図(3)

（　　）は現存

No.	器種名	全長（cm）	身長（cm）	身幅（cm）	箆被（cm）	茎長（cm）	重量（g）	備考
1	鉄鏃	(6.2)	3.7	1.4	3.1	(0.4)	7.1	
2	鉄鏃	7.5	3.6	1.4	3.0	1.8	6.5	
3	鉄鏃	8.1	3.6	1.6	6.5	1.6	9.6	
4	鉄鏃	7.8	(3.4)	1.3	3.3	(2.0)	12.2	
5	鉄鏃	(7.4)	3.5	1.5	3.4	(1.7)	9.4	
6	鉄鏃	(6.9)	3.4	1.3	3.1	(1.3)	6.9	
7	鉄鏃	7.5	3.2	1.4	2.7	2.7	8.8	
8	鉄鏃	7.4	(3.1)	1.4	3.0	2.0	10.0	
9	鉄鏃	8.8	3.5	1.7	3.7	1.9		
10	鉄鏃	8.5	3.2	1.6	2.9	3.3	21.4	
11	鉄鏃	7.9	(3.5)	1.3	2.3	2.6	6.9	
12	鉄鏃	(7.6)	(2.9)	1.3	2.8	3.0	6.1	
13	鉄鏃	(7.3)	(3.0)	1.4	2.6	2.5	8.0	
14	鉄鏃	(8.1)	(2.9)	1.3	2.3	(3.8)	8.6	
15	鉄鏃	(8.9)	(1.8)	1.5	3.8	(4.0)	12.0	
16	鉄鏃	(8.8)	(3.2)	1.5	2.7	(3.7)	11.0	
17	鉄鏃	(6.1)	3.8	1.4	3.2	−	8.1	
18	鉄鏃	(4.6)	3.9	1.3	(1.5)	−	5.3	
19	鉄鏃	11.8	5.7	1.2	1.4	4.7	10.0	
20	鉄鏃	8.9	5.9	1.5	1.5	1.5	11.8	
21	鉄鏃	(7.3)	5.8	1.3	1.2	(0.3)	12.2	
22	鉄鏃	(8.9)	5.8	1.5	1.2	(1.9)	14.0	
23	鉄鏃	(7.6)	5.7	1.4	1.5	(0.4)	9.9	
24	鉄鏃	10.7	5.6	1.2	1.4	3.7	8.4	
25	鉄鏃	(7.7)	(5.4)	1.3	1.5	(0.8)	9.9	
26	鉄鏃	9.0	4.3	1.3	1.5	3.2	7.0	
27	鉄鏃	(4.8)	(4.8)	1.3	−	−	5.9	
28	鉄鏃	(1.9)	(1.9)	1.2	−	−	0.9	
29	鉄鏃	(4.9)	−	−	(1.2)	(3.7)	4.9	
30	鉄鏃	(3.5)	−	−	−	3.5	1.7	
31	鉄鏃	(1.9)	−	−	−	(1.9)	0.4	

第１表　鉄製品法量表(1)

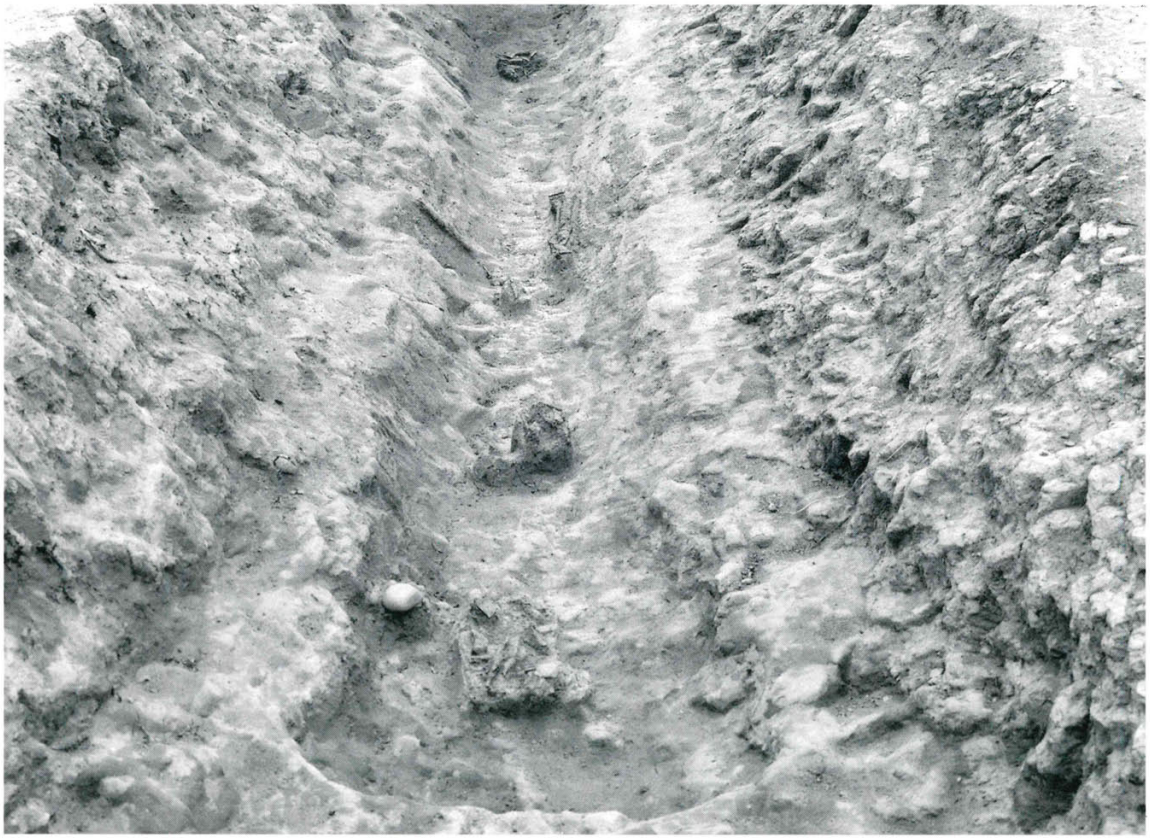
（　　）は現存

No.	器種名	全長(cm)	幅(cm)	重量(g)	茎長(cm)	茎尻幅(cm)	袋部幅(cm)	袋部厚(cm)	備考
32	鉄剣	70.7	4.1	311.0	15.4	1.6			目釘孔 2
33	刀子	10.6	1.6	16.0	(3.5)				刃側関を境に身・茎を区分
34	刀子	8.5	1.6	13.0	(2.0)				刃側関を境に身・茎を区分
35	刀子	6.8	1.2	8.0	(1.9)				刃側関を境に身・茎を区分
36	鉄斧	10.4	4.3	176.0			3.2	2.7	
37	鉄斧	8.6	4.7	110.0			2.8	2.2	
38	鉄斧	7.9	2.7	60.0			2.5	2.0	
39	鉄斧	7.2	2.7	55.0			2.3	1.9	
40	鉄斧	7.0	3.4	46.8			2.3	1.9	
41	鉄斧	5.9	3.3	36.6			2.2	1.7	
42	鍬先	3.8	6.1	18.0					
43	鍬先	3.9	6.1	20.6					
44	鎌	(8.1)	2.8	10.2					直刃鎌
45	鎌	(9.25)	2.3	14.0					直刃鎌
46	鎌	(7.3)	2.6	10.8					直刃鎌
47	鉋	(10.5)	1.0	16.0					
48	鉋	(7.9)	0.8	6.5					
49	鑿	10.1	0.8	10.4					
50	鑿	8.4	1.0	13.8					
51	鑿	(8.6)	0.8	9.6					
52	錐	10.0	0.7	6.6					
53	錐	(6.6)	0.7	4.4					
54	鑿又は錐	(3.8)	0.9	2.5					
55	鑿又は錐	(2.9)	0.9	1.2					
56	鑿又は錐	(1.4)	1.0	0.8					
57	鑿又は錐	(1.2)	(0.6)	0.6					
58	不明	(1.5)	0.7	0.3					
59	鋸	9.9	3.2	25.6					
60	釣り針	5.9	2.9						φ0.5cm
61	釣り針	5.7	2.9	4.9					φ0.5cm
62	釣り針	5.4	1.9	2.8					φ0.4cm
63	やす	21.2	4.9	148.0					φ1.0cm

第 2 表　鉄製品法量表(2)

図版 1

古墳全景（北西から）



主体部遺物出土状況（東から）

図版 2

調査前全景
（北から）

尾根切断溝の土層断面
（東から）

尾根切断溝の完掘
（西から）

図版 3

墳頂部完掘
（北西から）

主体部完掘
（東から）

主体部東端
（北から）

図版 4

主体部西端
（北から）

西側裾
（北から）

造出し
（北西から）

図版 5

主体部棺上鉄鏃
（北から）

主体部農・工・漁具
（上層、東から）

主体部農・工・漁具
（中層、東から）

図版 6

主体部中央鉄剣・刀子
（南から）

主体部西寄り鉄鏃
（西から）

西側裾埴輪出土状況
（墳丘から）

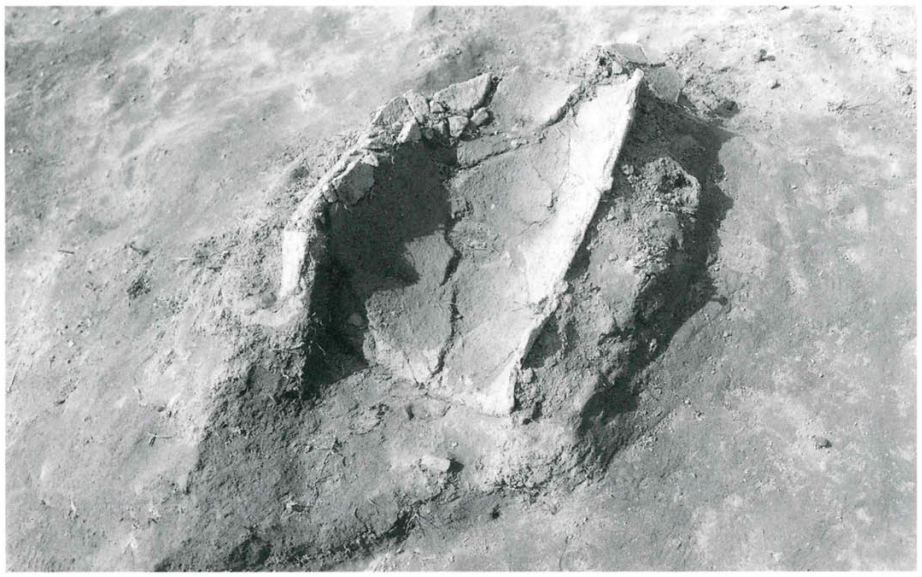
図版 7

北側溝内埴輪出土状況
（北から）

墳頂部埴輪　No.8・15
（南から）

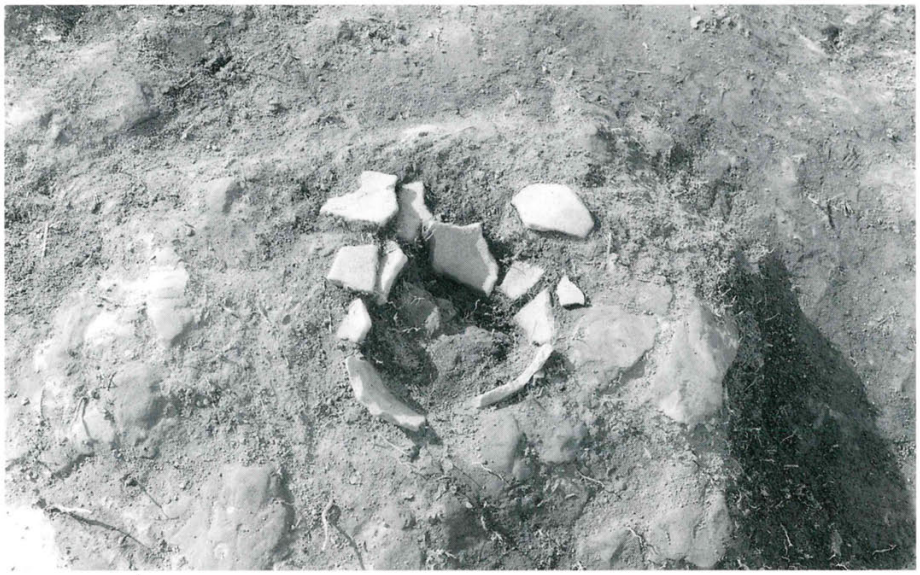
西側裾埴輪　No.28
（南から）

図版 8



西側裾埴輪　No.29
（南から）

東側裾埴輪　No.55
（南から）

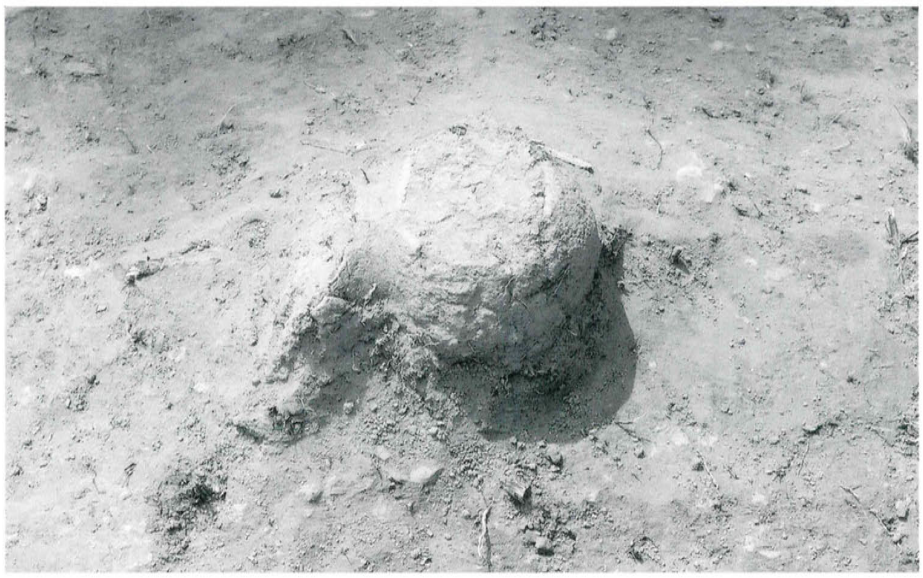


東側裾埴輪　No.57
（南から）

図版 9

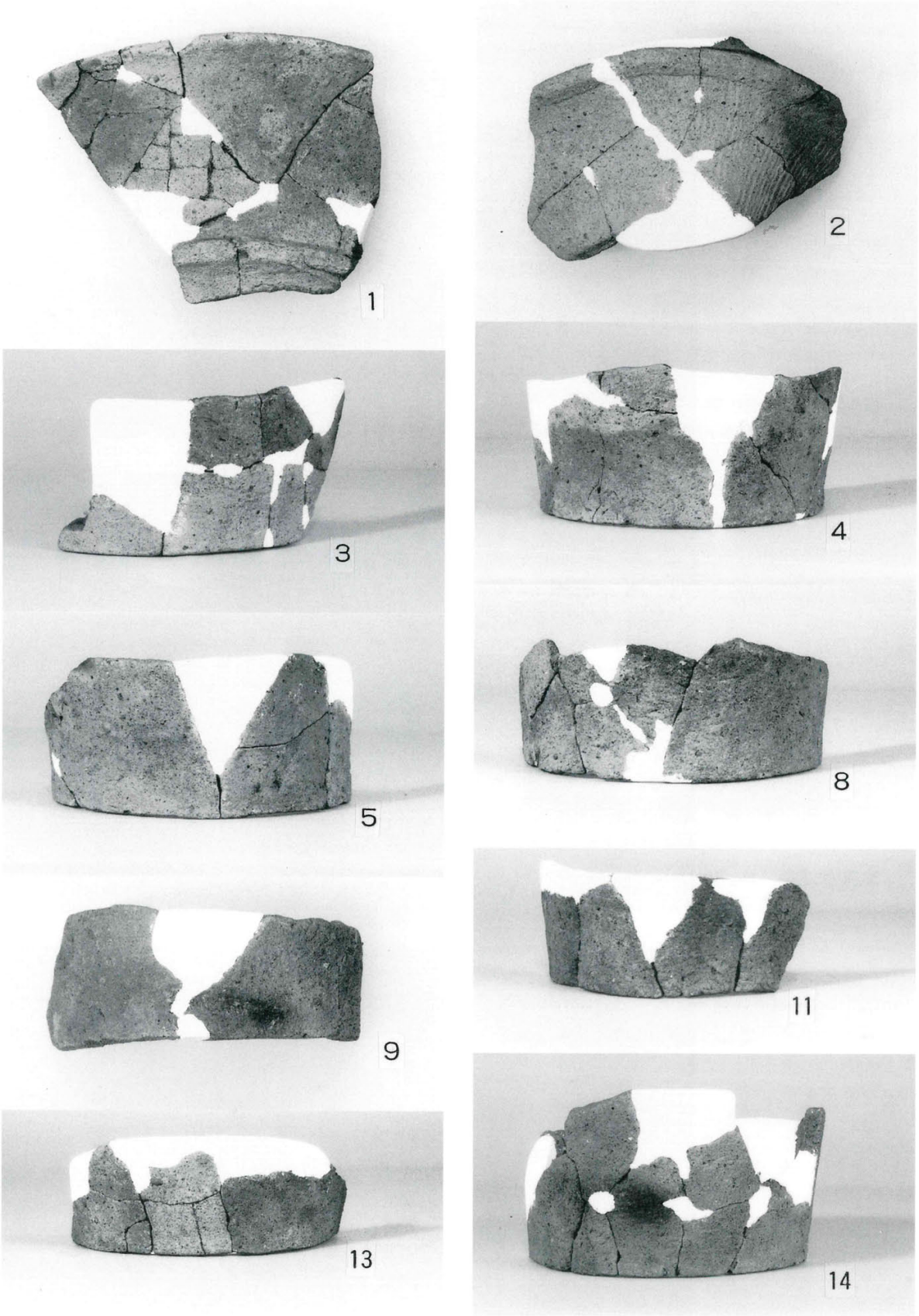
東側裾埴輪　No.58
（南から）

東側裾埴輪　No.59
（東から）

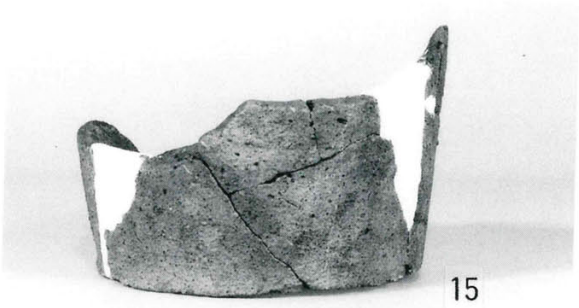


南側テラス土器　No.1
（北から）

図 版 10

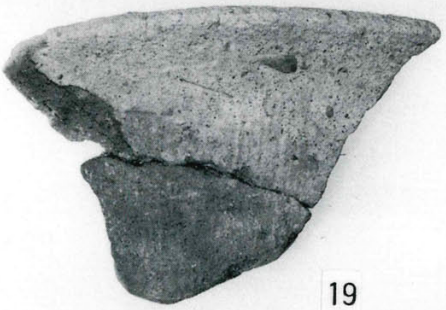


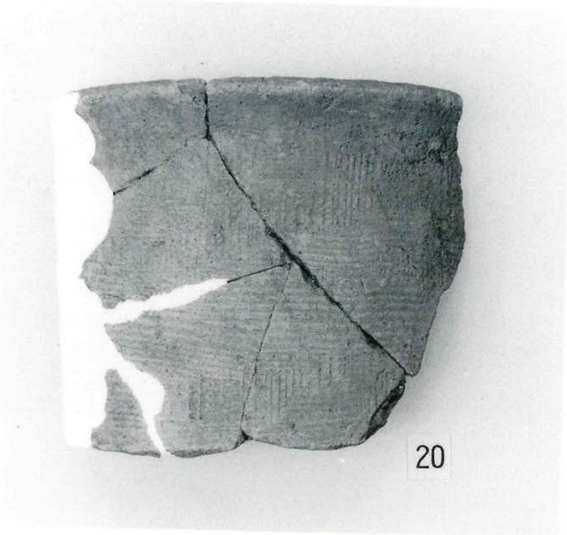
図版 11


15

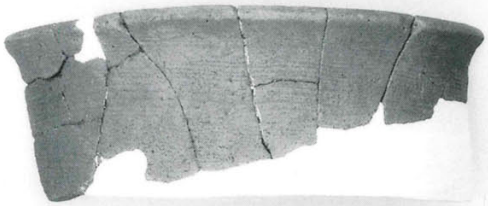
17

18


19


20

21


22

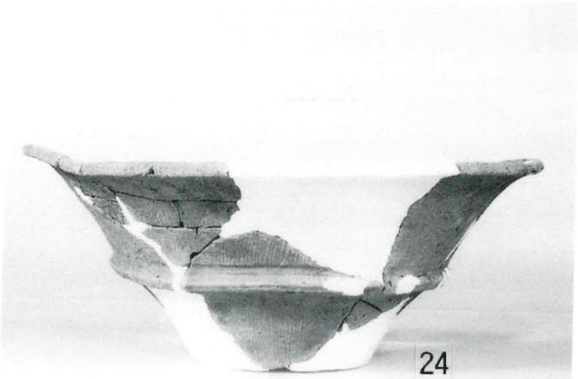

24

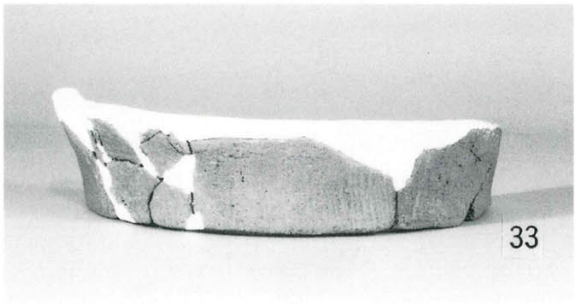
図 版 12

25

26

28

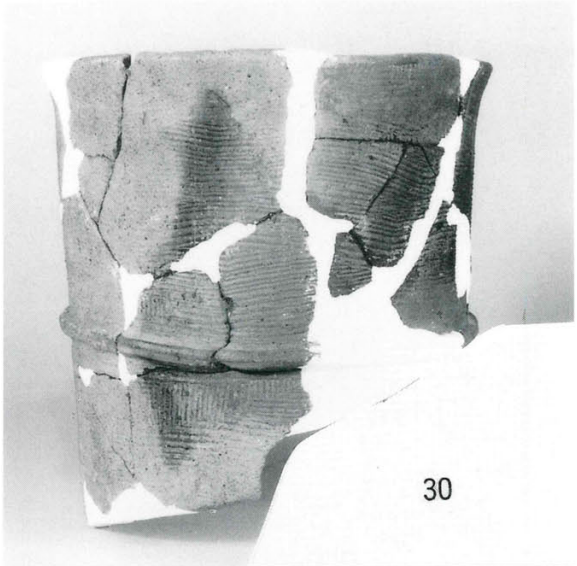
27

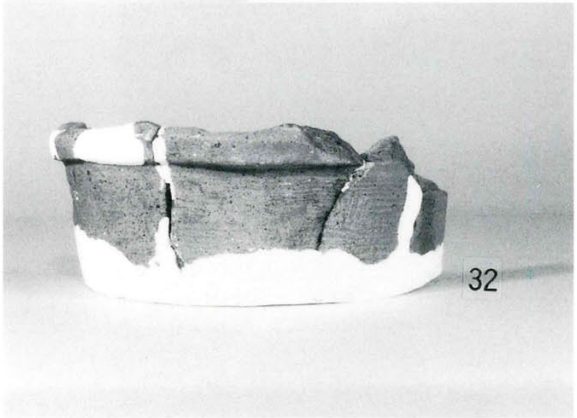

33

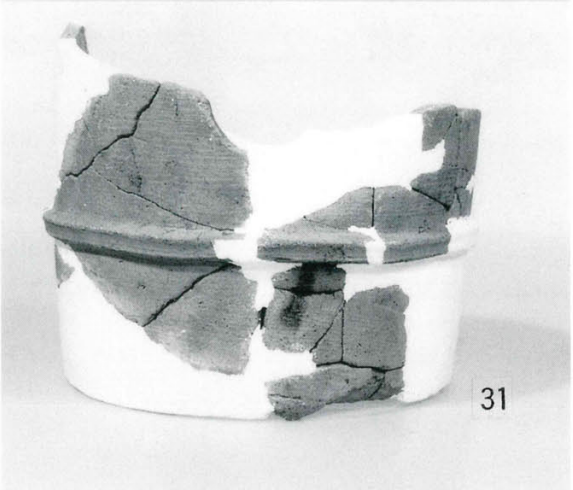
34

図版 13

29


30

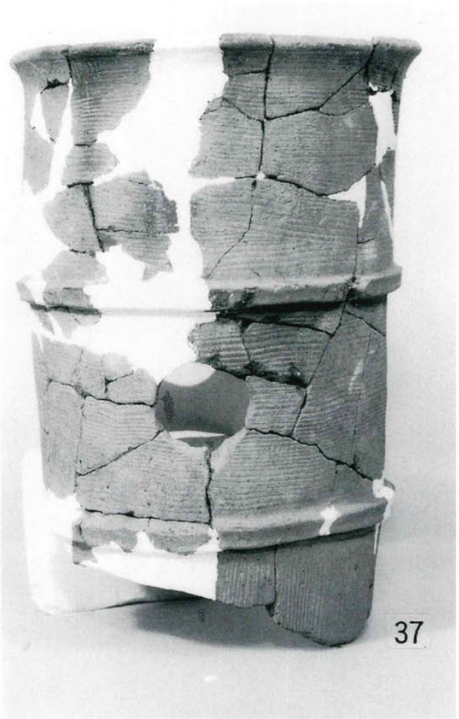

32

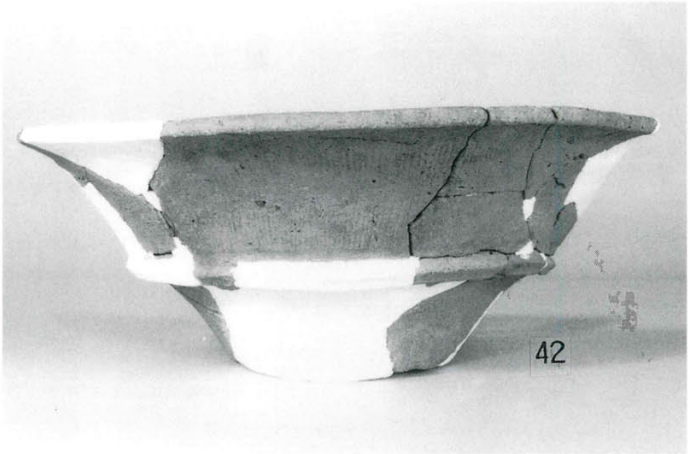

31

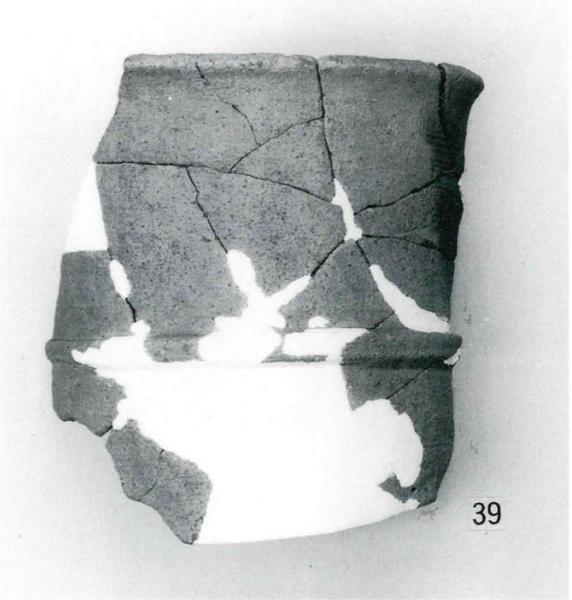
36

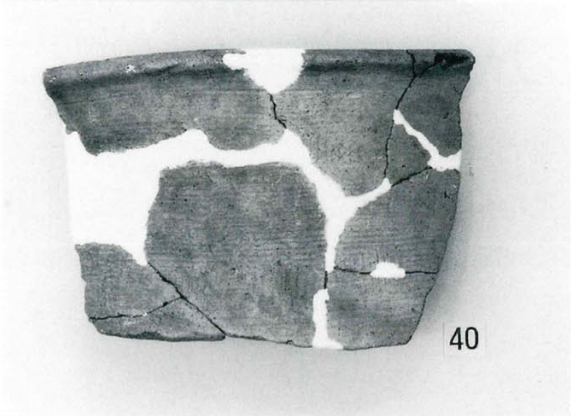
35

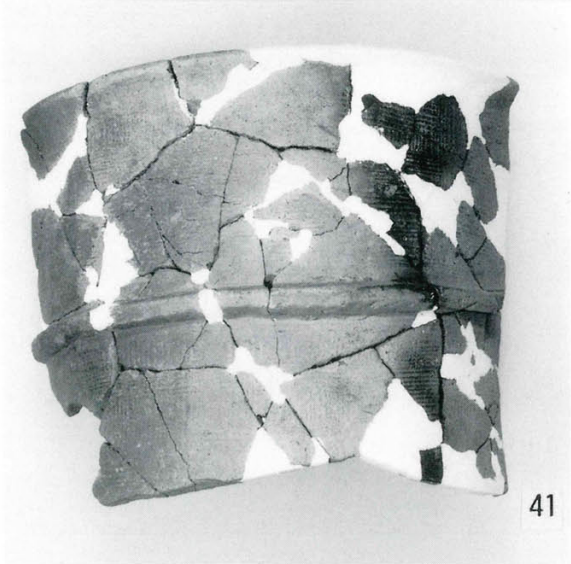
図 版 14

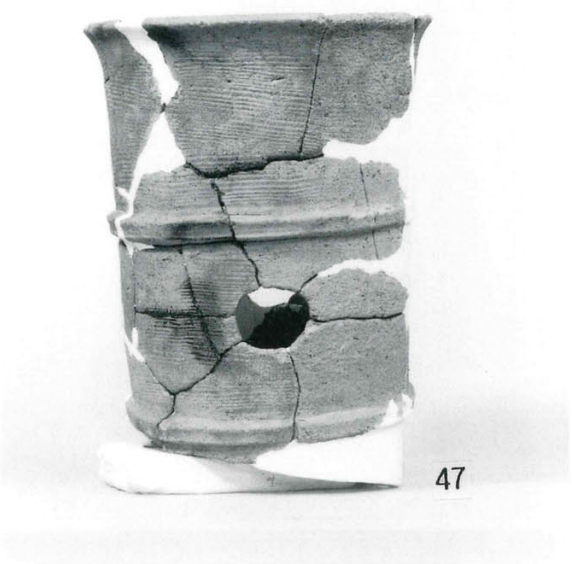




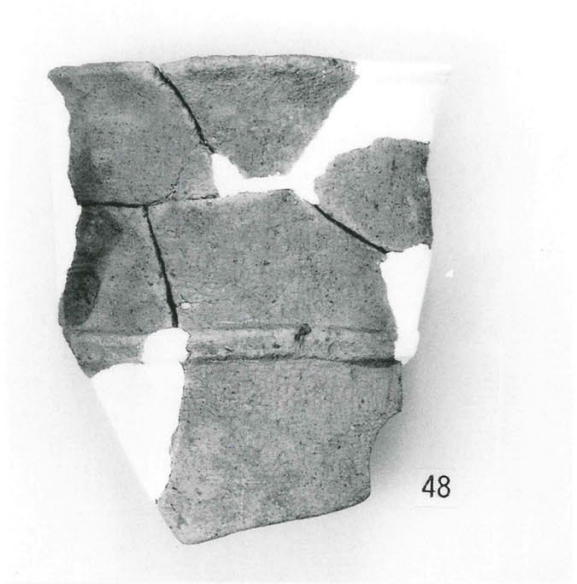


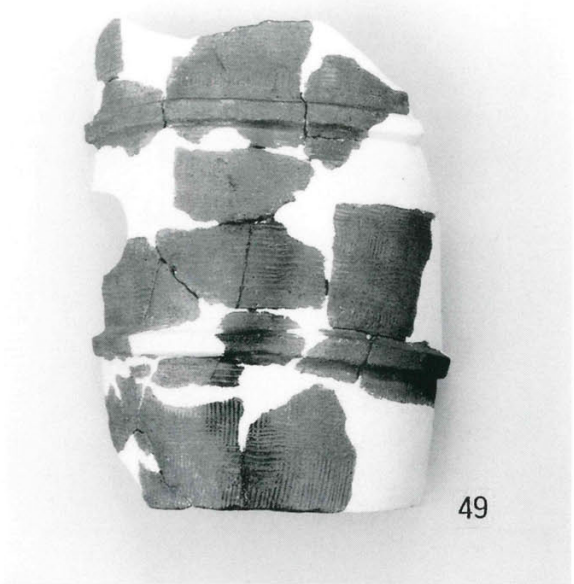


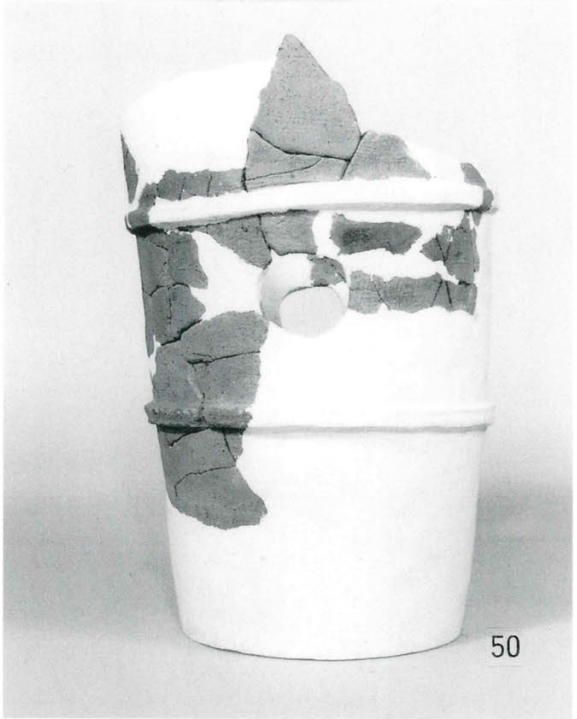


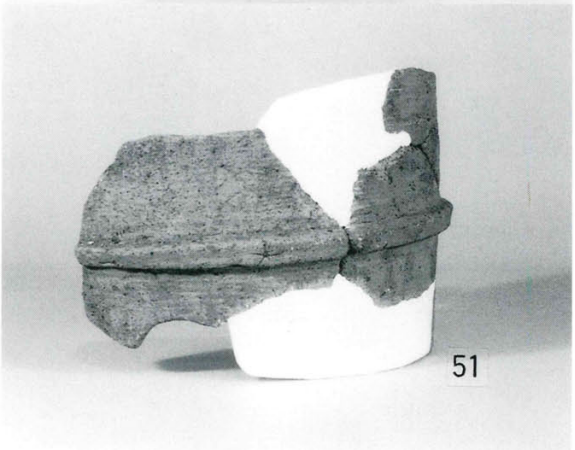


図版 15


48


49

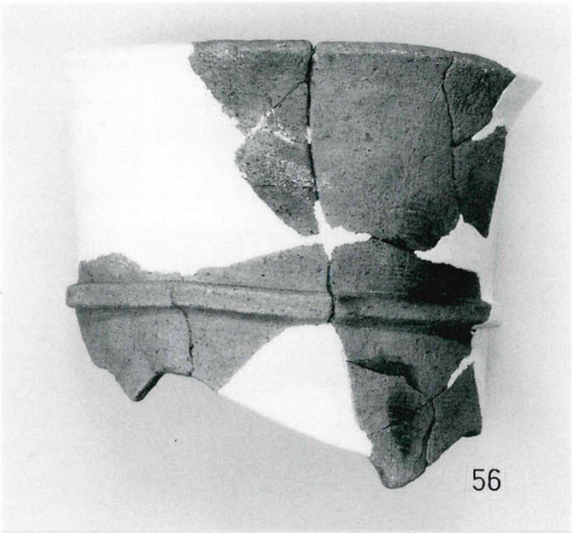

50


51

54

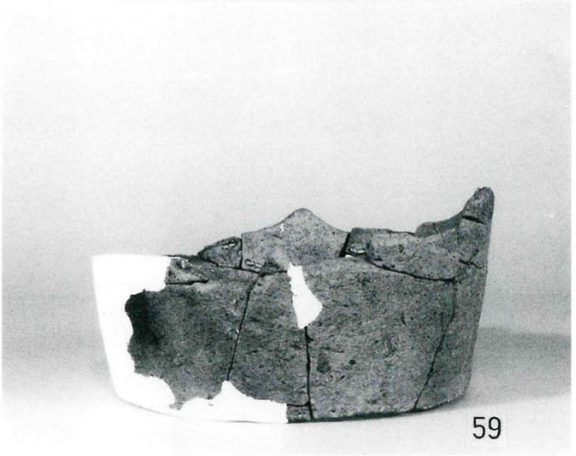
55

図 版 16

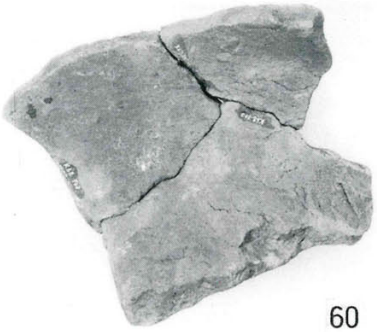

56

57

58


59

—


60

1

図版 17

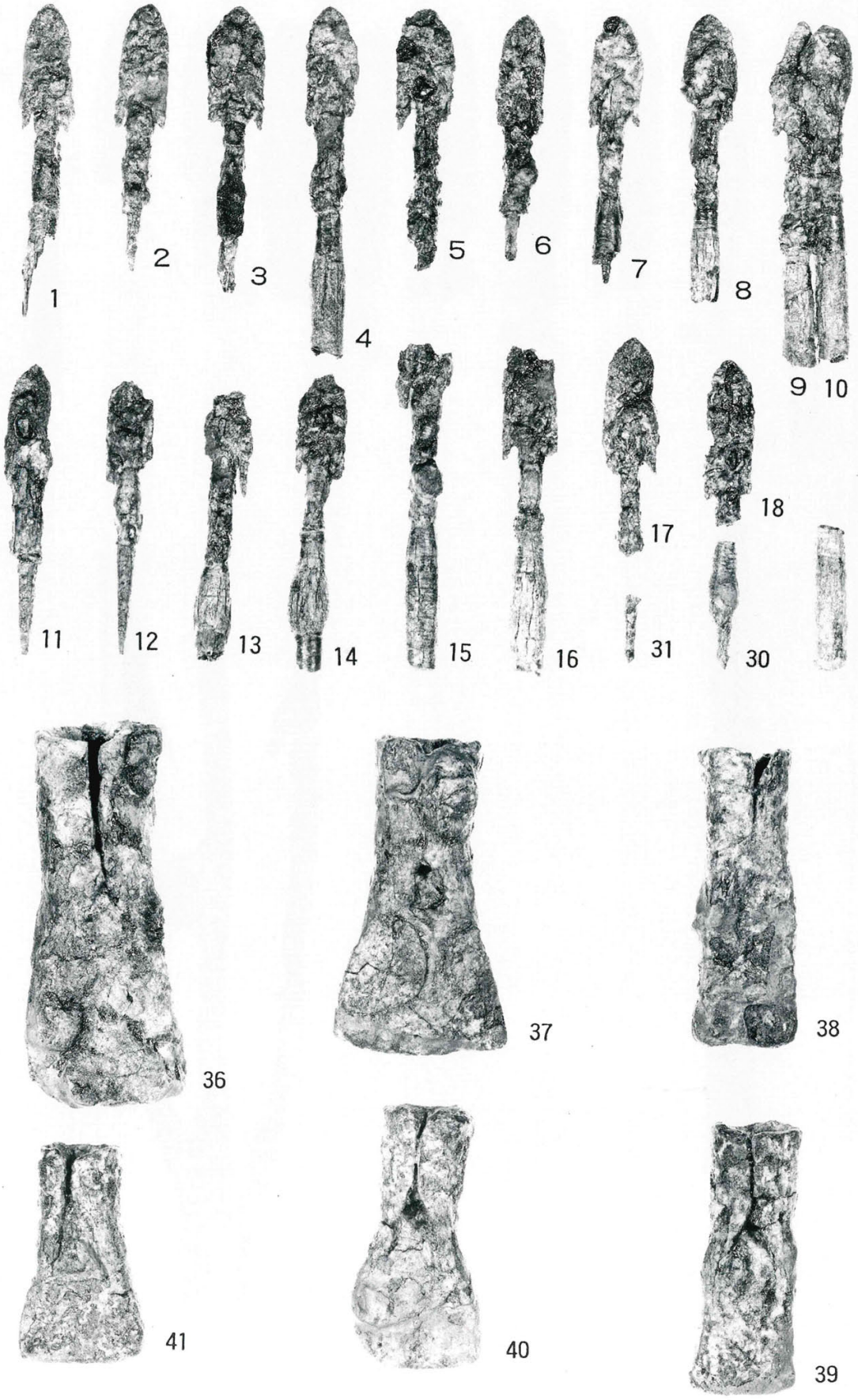
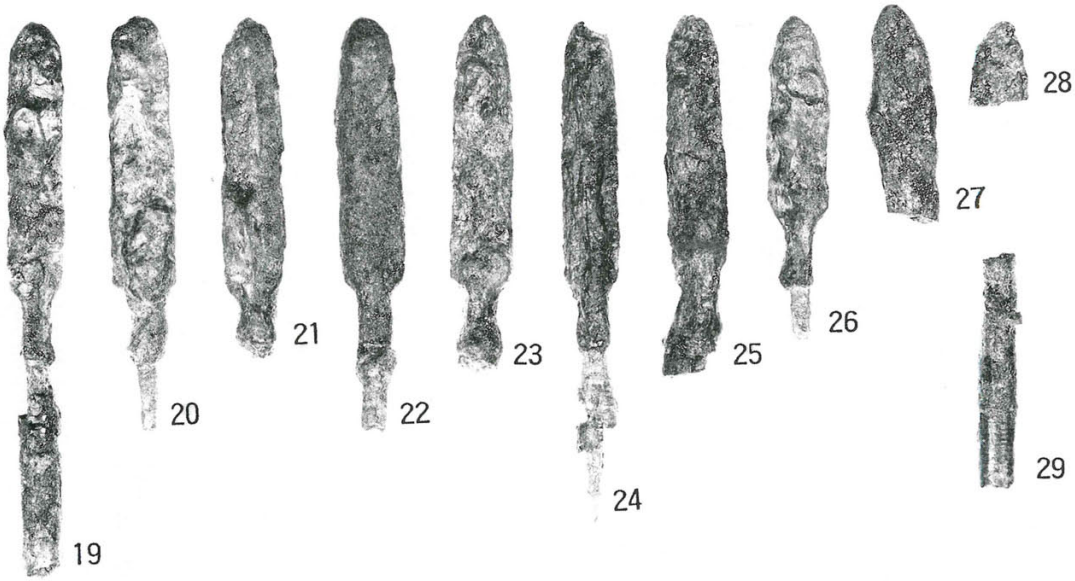
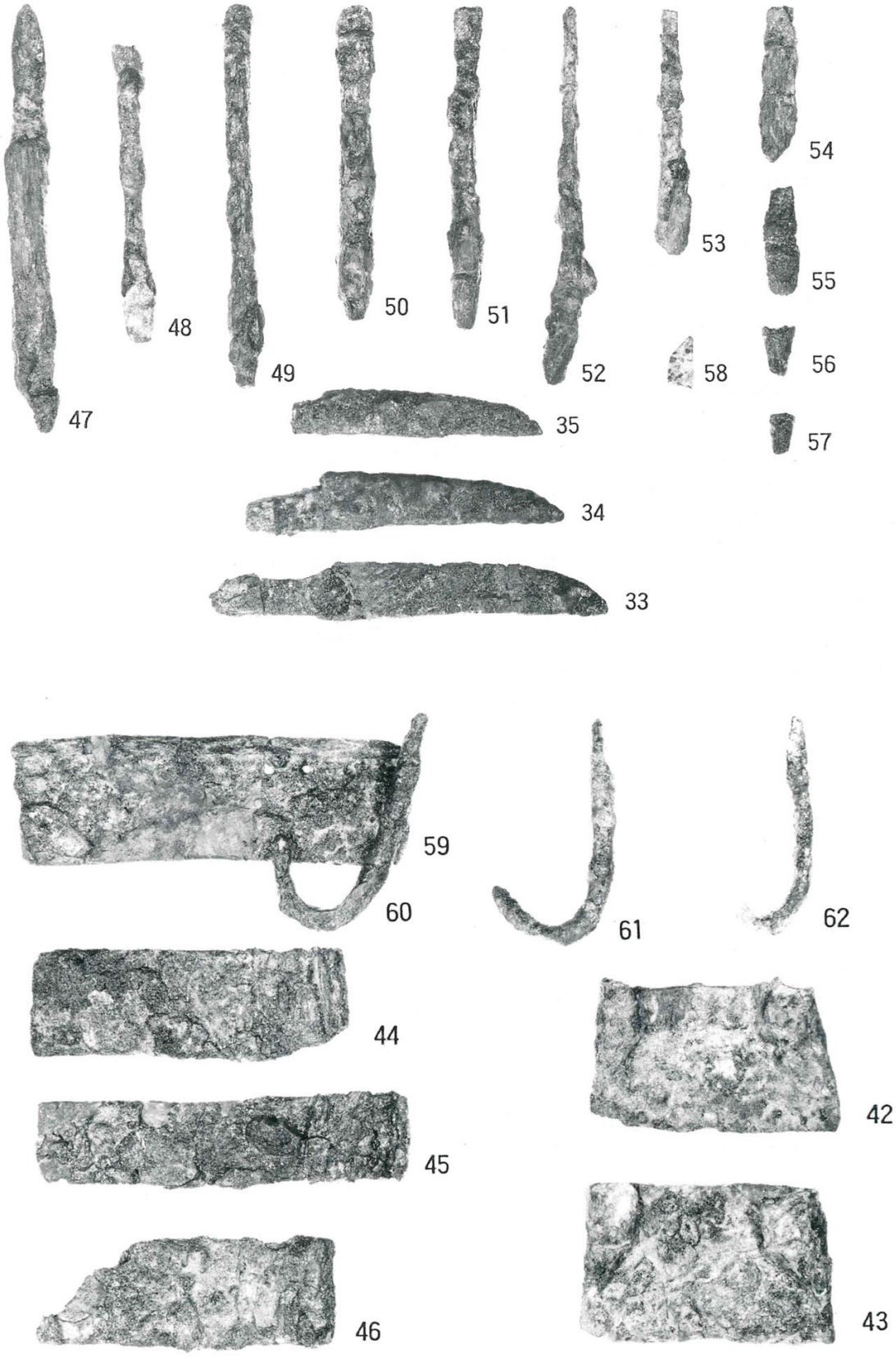


図 版 18



図版 19



V　前山横穴墓群

1．調査の概要

向山横穴墓群が尾根に近い高い位置につくられていたことから、長谷土地区画整理用地内を踏査し、確認調査を実施し、前山横穴墓群を発見した。調査は、人力で表土を除去し、横穴墓の掘削を行った。尾根上は、横穴墓に伴う祭祀場の可能性があり、調査の対象とした。調査区の軸は、尾根上は地形に合わせ、横穴墓はそれぞれの主軸を設定し、最終的に一つの図面に合成できるようにした。

現地での図面は、遺構図を20分の１の縮尺で、詳細図を10分の１の縮尺と原寸で適宜作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成９年４月15日から平成９年８月14日まで、現地調査を行った。

2. 遺構の概要

横穴墓群は、尾根から5.5m～7.3mほど下がった東斜面にそれぞれ単独でつくられた４基から成る。１号墓～３号墓までが等間隔で並び、主軸方位もほぼ同じとなる。４号墓は他と主軸方位を異にする。

墳丘状遺構（第３図）

墳丘状遺構の南側と北側に、溝が存在する。南溝は、尾根を切断する溝で、確認面の幅2.35m、深さ0.93mを測る。北溝の東端は明瞭ではない。溝は、南西に傾斜している。撹乱を受けていて、幅は不明である。深さは、48㎝を測る。溝の北側に寄って土師器が出土している。

南東の高い部分は、木の根を掘り残した場所である。墳丘状遺構は、直径8.6mを測る円形を呈する。

１号墓（第４図）

１号墓は、４基の中で一番低い位置にある横穴墓で全長7.40mを測り、玄室、羨道、墓道から成る。

玄室　長さ2.40mを測り、幅は、奥壁近くが最大となり2.70mを測る。玄門に向かい幅を狭め、前壁部分で1.36mとなる。天井の高さは、１m前後ではないかと推定される。玄室の断面形は、ドーム形と考えられる。右壁には、幅７㎝～９㎝の工具痕が、奥壁には幅約10㎝の工具痕が残っていた。

副葬品　副葬品は、鉄製品（刀子３、鉄鏃１）、玉類（石製管玉８、ガラス小玉15）がある。玉類は、人骨の周囲から出土した。人骨は、天井の崩落により散乱した状態であった。

羨道　推定の幅50㎝、推定の長さ50㎝、推定の高さ84㎝である。

閉塞　閉塞には、礫が使用されていた。閉塞の下部は、岩（堆積砂）のブロックと礫の小破片が混じり、固くしまっていた。そこに扁平な礫を敷き、さらにその上に幅75㎝、高さ60㎝、厚さ20㎝の扁平な礫を立てて塞いでいた。そして、その立てた礫を外から礫で押さえるというものであった。

墓道の閉塞石の前面から、第10図－１～５の土器が出土した。これらの土器は、掘り方底面から20㎝以上浮いた状態であった。ある時期の墓前祭の状況を示していると考えられる。

２号墓（第５図）

横穴墓は、全長4.44mを測り、玄室、羨道、閉塞施設、墓道から成る。

玄室　長さ1.77m、最大幅2.62mを測る整った隅丸長方形を呈する。天井は、すでに崩落していて、高さは不明である。断面形は、ドーム形と考えられる。玄門の左右に排水溝をつくる。壁面は、幅８㎝前後の刃先が湾曲する工具によりきれいに削り仕上げが行われている。

副葬品　玄室内から土器１点、鉄製品（小刀・鉄鏃・刀子・両頭金具）、玉類84点（石製管玉12、ガラ

ス小玉72）が出土した。土器は左壁沿いから、小刀は奥壁沿いから出土している。玉類は、石製管玉が中央付近から、ガラス小玉は奥壁沿いから出土している。

羨道　玄門の幅79㎝、羨門の幅50㎝、長さは左壁で56㎝、右壁で48㎝を測る。短羨道である。天井の高さは、90㎝前後と推定される。

閉塞施設　閉塞施設と考えられるものは、羨門部の掘り方底面に掘られた４㎝の段差で、この段差の墓道側から岩（堆積砂）のブロックが検出された。

墓道　羨門から40㎝ほどは平坦であるが、そこから先は約19度の傾斜となる。

３号墓（第６図・第７図）

３号墓は、４基の横穴墓の中で最も高い位置につくられていた。

玄室　長さ1.36m、最大幅2.30mを測る。天井は、玄門部分が最も高く93㎝を測り、奥壁部分で50㎝となる。奥壁が直立気味に立ち上がり、天井が玄門に向かい高くなるなど、変則的なドーム形といえる。玄門部分の左右と中央から、排水溝が延びている。掘り方、壁面、天井は、ほとんど工具痕を残さず、きれいに仕上げられている。

副葬品　掘り方底面から20㎝～30㎝ほど浮いた高さから、須恵器の破片、鉄製大刀の破片、礫が検出された。第７図は、その下の掘り方底面近くから検出された遺物等を示したものである。土器は、右壁際から出土した。鉄製品は奥壁際から破損した状態で、一部右壁際の土器の周辺から出土した。ガラス小玉47点は、玄室左半から集中して出土した。中央左壁寄りから礫が１点検出され、その礫の下から玉が出土したり、鉄製品が破損していて、玄室内は攪乱を受けている可能性がある。

羨道　幅1.03m、高さ1.06mの正方形で、他の横穴墓の羨門に比べ幅広くつくられている。長さは左壁で32㎝、右壁で17㎝を測る。短羨道である。

閉塞施設　閉塞施設と考えられるのは、上端の幅15㎝、下端の幅10㎝、長さ1.13mの溝で、中央が一段深く掘られていて、そこから排水溝が墓道に延びている。木板で塞いだ時にここから排水できるように、一段深くしてあると考えられる。この一段深くなった部分で、羨道掘り方からの深さ18㎝を測る。この溝の墓道側から多量の岩のブロックと少量の礫が検出された。これらの岩のブロックと礫は、溝に木板を立てて外から押さえるために使用されたものと考えられる。

墓道　排水溝の上を中心にして５㎝～20㎝の大きさの礫が検出された。排水溝の蓋として使用されたと考えられるが、墓道の側壁に沿ったところからも検出されていて、墓道全体の礫敷きを意図した可能性もある。墓道の先端付近からは、第10図－11～第11図－22の土器がまとまって出土した。14の坏身は21の坏部に、11の坏蓋は17の坏部に、13の坏身は19の坏部に、12の坏身は20の坏部に入れられていた。第７図のエレベーション図で黒く塗りつぶしてあるのが、土器である。礫との間に間層が存在することから、築造後のある時期の祭祀に伴う遺物であることが判明する。羨門近くの両壁沿いに平坦な部分がつくられている。

４号墓（第８図・第９図）

４号墓は、他の３基と主軸方位を異にする。横穴墓は、全長8.06mである。

玄室　長さ1.87m、最大幅2.66m、天井の高さ1.10mを測る。断面形は、ドーム形である。掘り方底面と壁の境は、稜がつき明瞭である。天井と壁面には、円形の工具痕が無数に残る。

副葬品　玄室内から土器、鉄製品、ガラス小玉28点が出土した。土器は、中央と左壁沿いから、鉄製品は左奥半から出土した。玉類は、玄室内を４分割した左奥半と右前半の区画から出土した。

羨道　羨道は、幅66㎝、高さ98㎝、長さは左壁で58㎝、右壁で61㎝を測る。短羨道である。

閉塞施設　羨門の壁と天井に幅15㎝～20㎝、奥行き20㎝の彫り込みが存在した。ここに木板をはめ込

むものと考えられる。この部分の外側から岩のブロックが検出されていて、木板を外から押さえるために使用されたものと考えられる。

墓道　羨門外の掘り方底面から70cmほど浮いた状態で、第11図－29の須恵器壺が出土した。築造後のある時期の墓前祭に伴う遺物と考えられる。墓道先端から出土した第11図－31の土師器高坏は、３号墓の墓道からの転落と考えられる。

３．遺物の概要

遺物には、土器、鉄製品、玉類がある。

土器（第10図・第11図）

１～５は１号墓墓道、６は２号墓玄室、７～10は３号墓玄室、11～22は３号墓墓道、23～28は４号墓玄室、29～31は４号墓墓道、32・33は墳丘状遺構の周溝から出土した。これらの土器のうち、６・９・10・15～22・31～33は、土師器である。

１は、口縁部に明瞭な段を持ち、天井部外面に赤彩を施す。２は、４とセットになる可能性が高い。５は、有蓋高坏の坏部である。７は、口径が小さく、器高が高いという特徴がある。天井部内面に当て具痕が残る。８の無蓋高坏の脚部には円形の透かしが３方にある。９・10は、土師器坏のセットの可能性がある。３号墓墓道出土の土師器高坏は、器壁を薄くつくる15・16・18と、器壁が厚く横ナデを施す19～21の２タイプに分類可能である。23の坏蓋は、24の身とセットになる可能性が高い。27の広口壺は、頸部の中ほどに２条の沈線を巡らし、その上下に波状文を施す。頸部下半から体部にカキ目を施す。底部外面には、タタキ目が付く。30は、壺の口縁部と考えられる。

鉄製品（第12図・第13図）

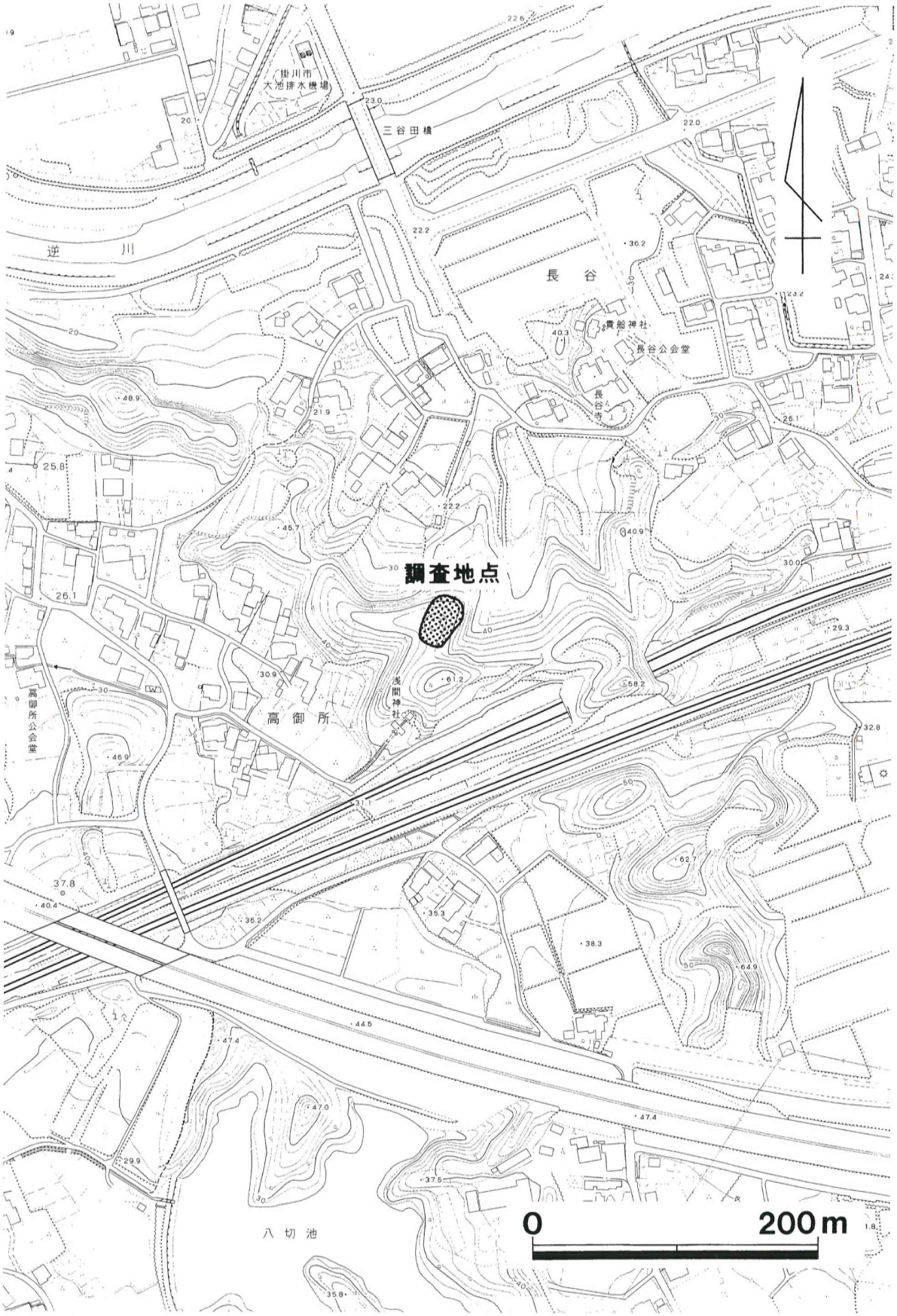
１～４は１号墓玄室、５～27は２号墓玄室、28～37は３号墓玄室、38は４号墓玄室から出土した。

１の鉄鏃は、頸部・茎部を欠損する。２の刀子は、現存長16.8cmを測る。切先を欠損する。３の刀子は、全長8.3cmを測る。５の腸抉三角形鏃は、全長13.2cmを測り、逆刺を欠損する。６の長三角形鏃は、全長13.4cm、鏃身の長さ2.4cmを測る。18の三角形鏃は、全長14.0cm、鏃身の長さ4.6cmを測る。22の小刀は、全長34.8cmを測る。背側の関は明瞭に観察できるが、刃側の関は明瞭ではない。刃部の幅は、切先近くで2.1cm、関近くで2.8cmを測る。茎に目釘と考えられる錆の盛り上がりがある。23の刀子は、刃部を欠損する。24の刀子は、切先を欠損するほかは完存であるが、錆に覆われていて詳細は不明である。25は、刀子の刃部で、木質が付着している。26・27は、両頭金具である。28・29は、鏃身で、30は鏃の茎である。31～33は、刀子の破片と考えられる。34は、小刀の茎と考えられる。35～37は、大刀の破片である。38は、鉄棒を曲げたもので、輪と足に有機質あるいは木質が残る。

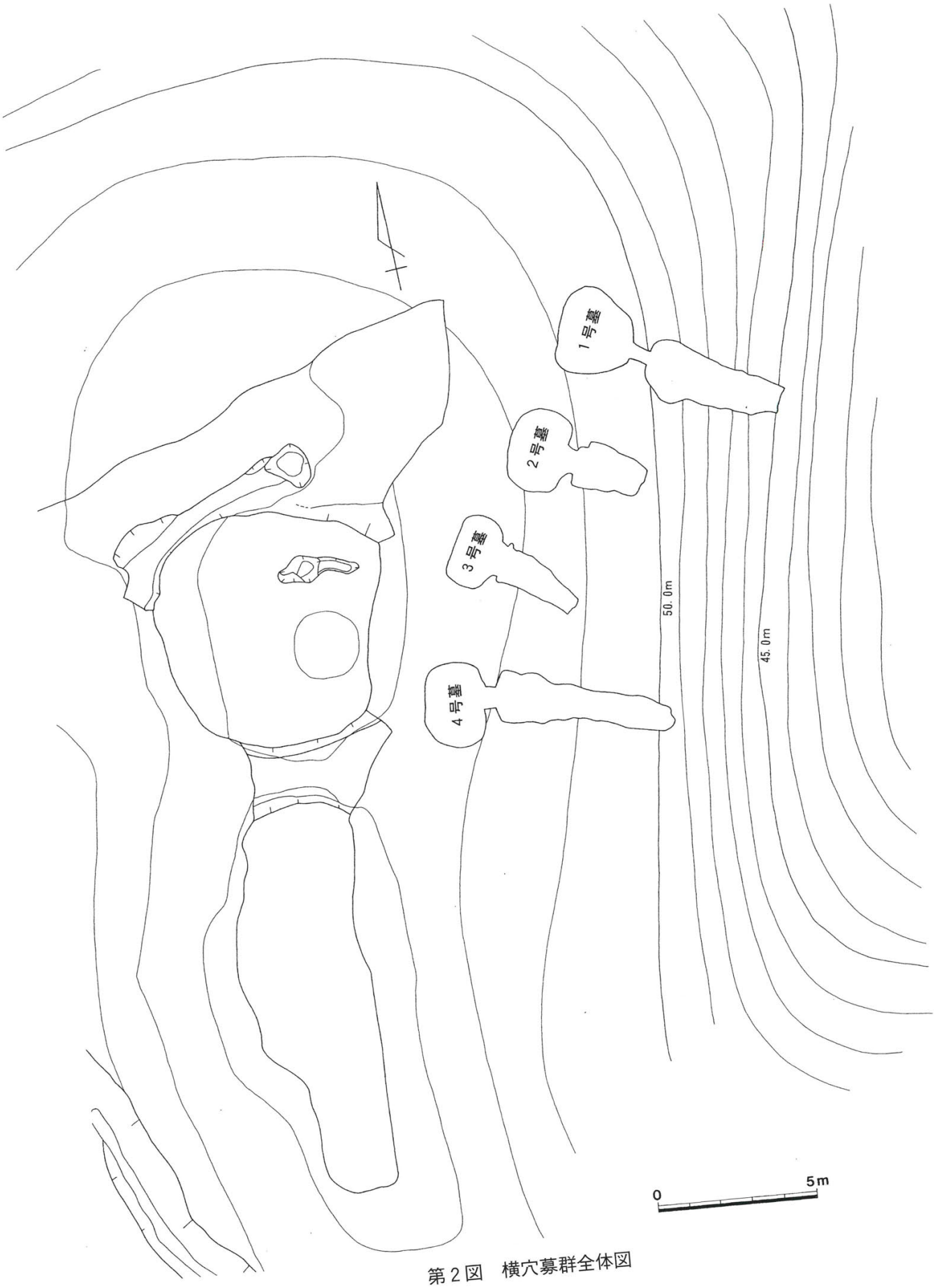
玉類（第14図）

１～20は１号墓玄室、21～40は２号墓玄室、41～60は３号墓玄室、61～70は４号墓玄室出土である。

１号墓から出土したガラス小玉は、直径6.5mm～８mm、厚さ４mm～６mm、色調が紺色を呈するものと、直径2.5mm～４mm、厚さ1.5mm～４mm、色調が青色、緑色、水色を呈するものの２種類に分けられる。２号墓出土のガラス小玉は、直径2.5mm～４mm、厚さ1.5mm～３mm、色調は紺色、青色、水色、黄色を呈する。３号墓出土のガラス小玉は、直径5.5mm～７mm、厚さ３mm～６mm、色調は紺色、青色、水色を呈するが、１点だけ直径４mm、厚さ２mm、色調黄色を呈するものが混じる。４号墓出土のガラス小玉は、直径３mm～５mm、厚さ1.5mm～3.5mm、色調は紺色、青色、青緑色、黄色を呈するが、１点だけ直径８mm、厚さ５mm、色調が紺色を呈するものが混じる。

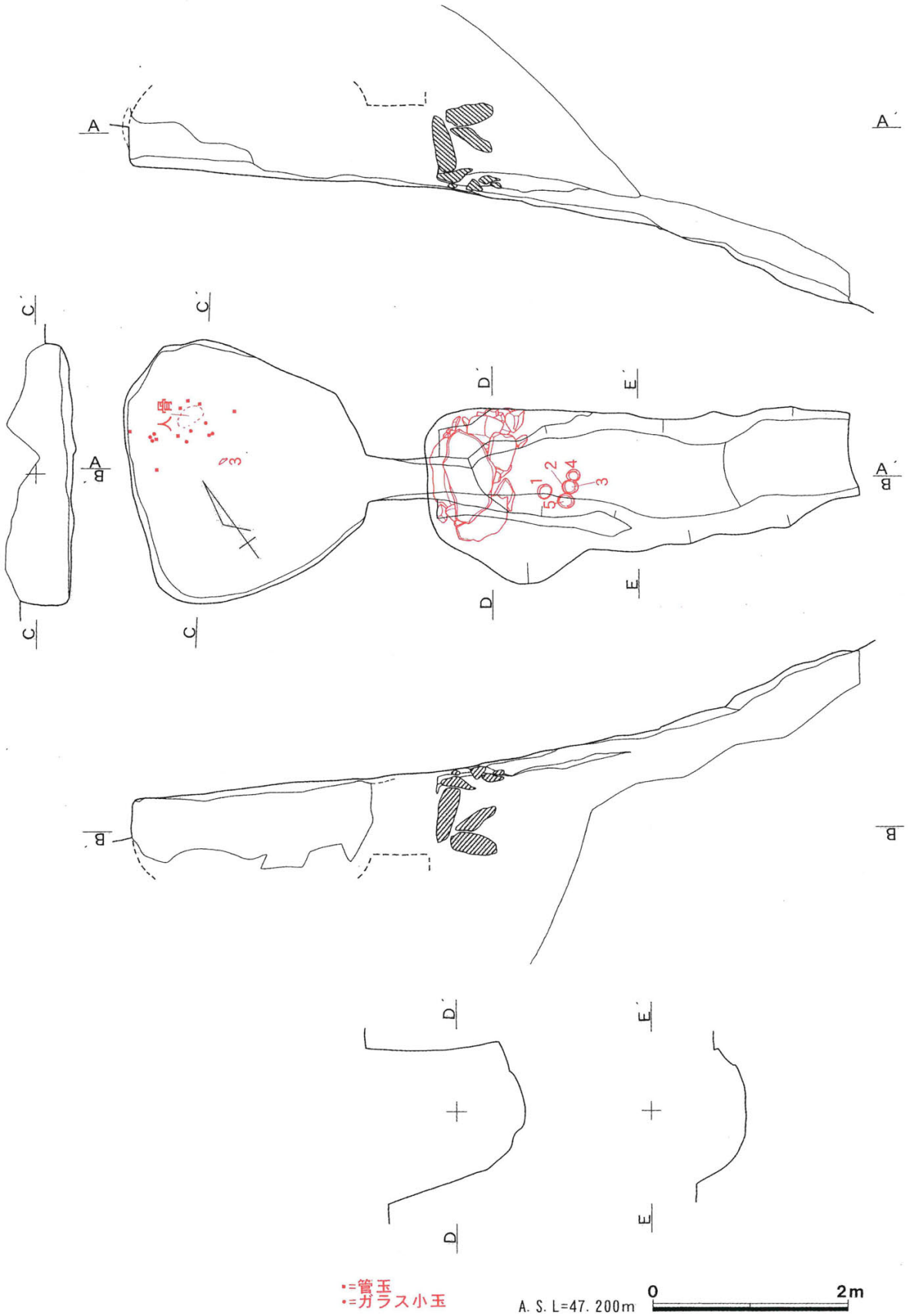

掛川市
大池排水機場
三谷田橋
逆川
長谷
貴船神社
長谷公会堂
長谷寺
調査地点
高御所
浅間神社
高御所公会堂
八切池
0
200m

第1図　位置図

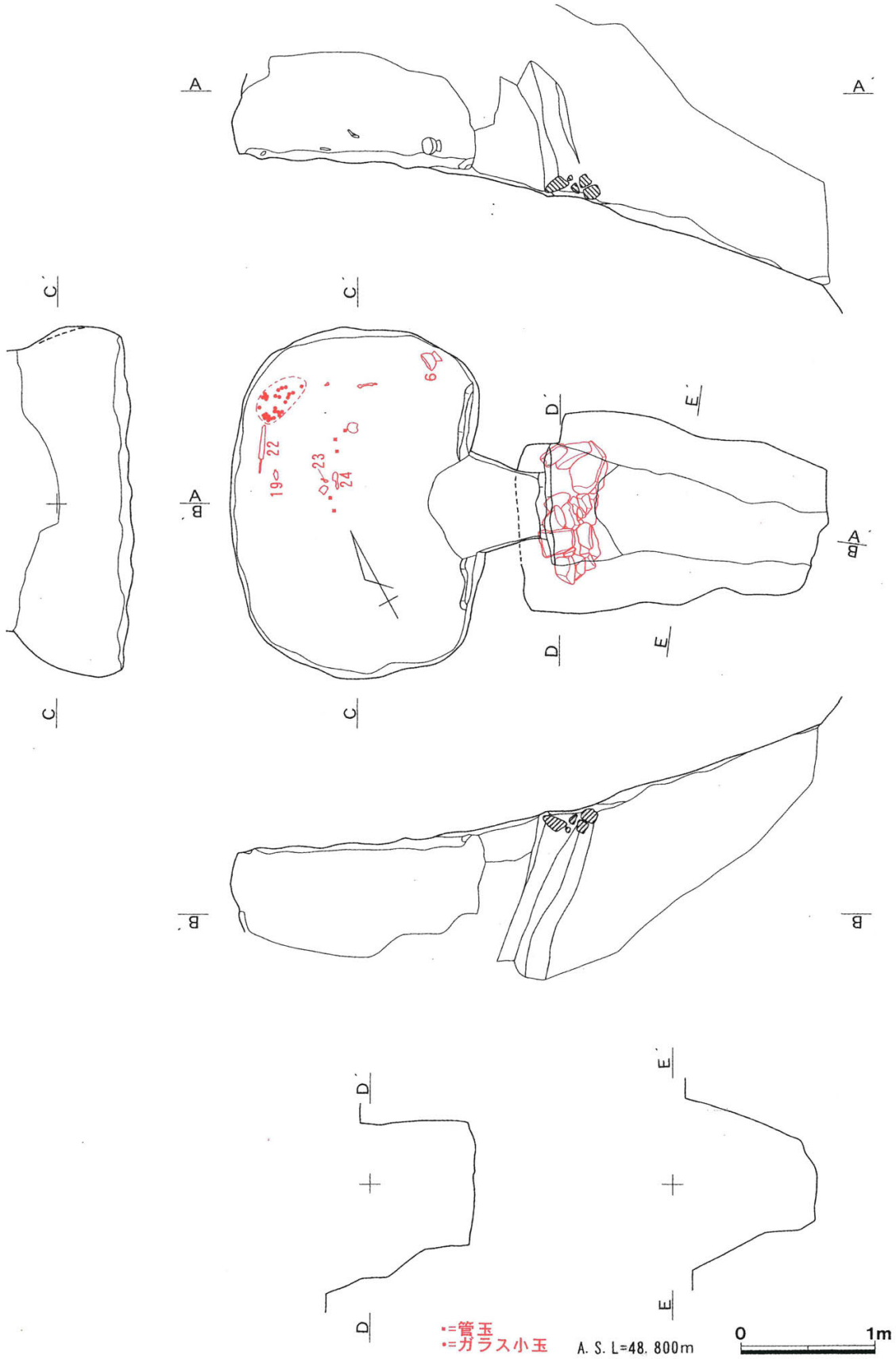


第2図　横穴募群全体図

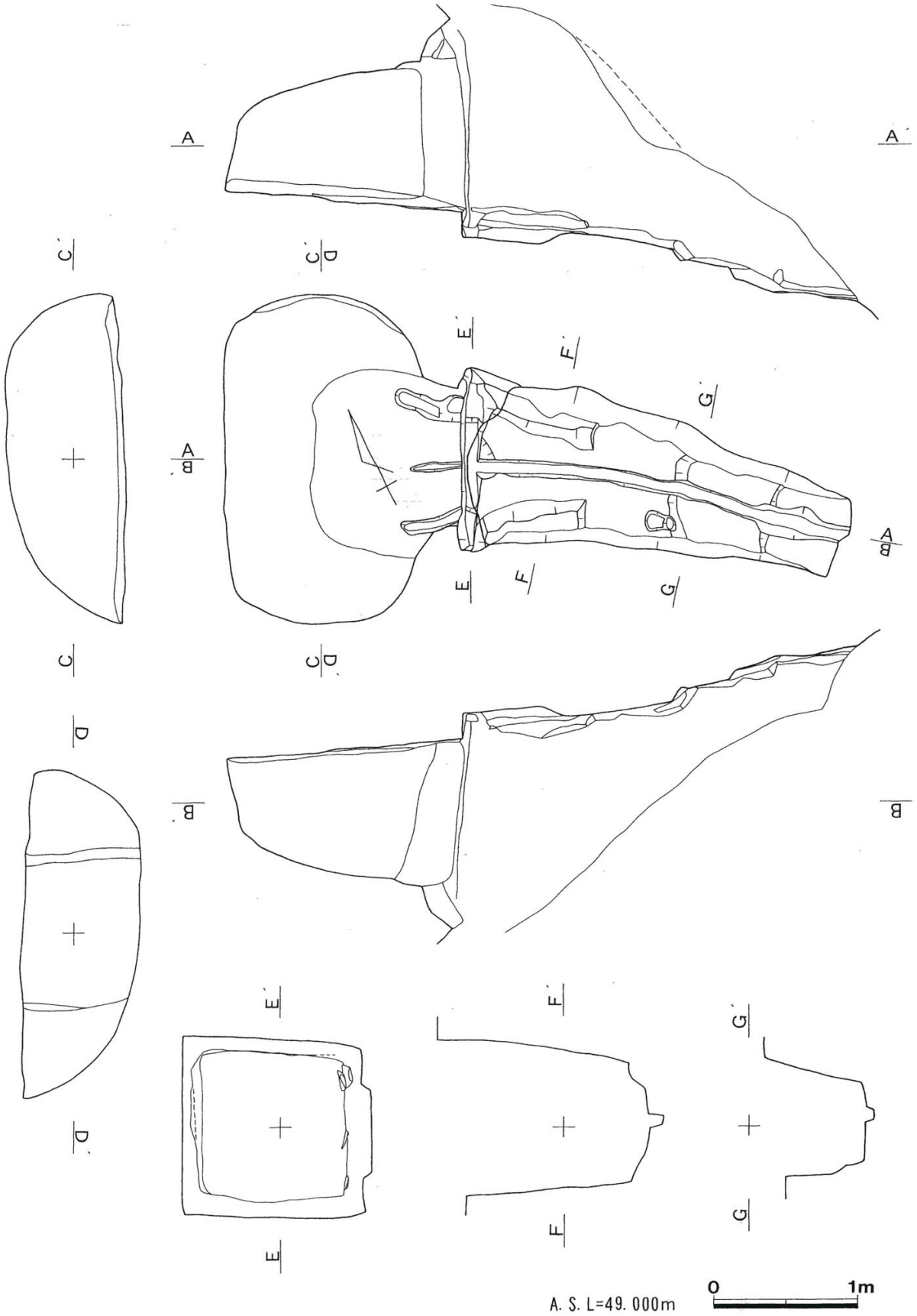
第３図　墳丘状遺構実測図



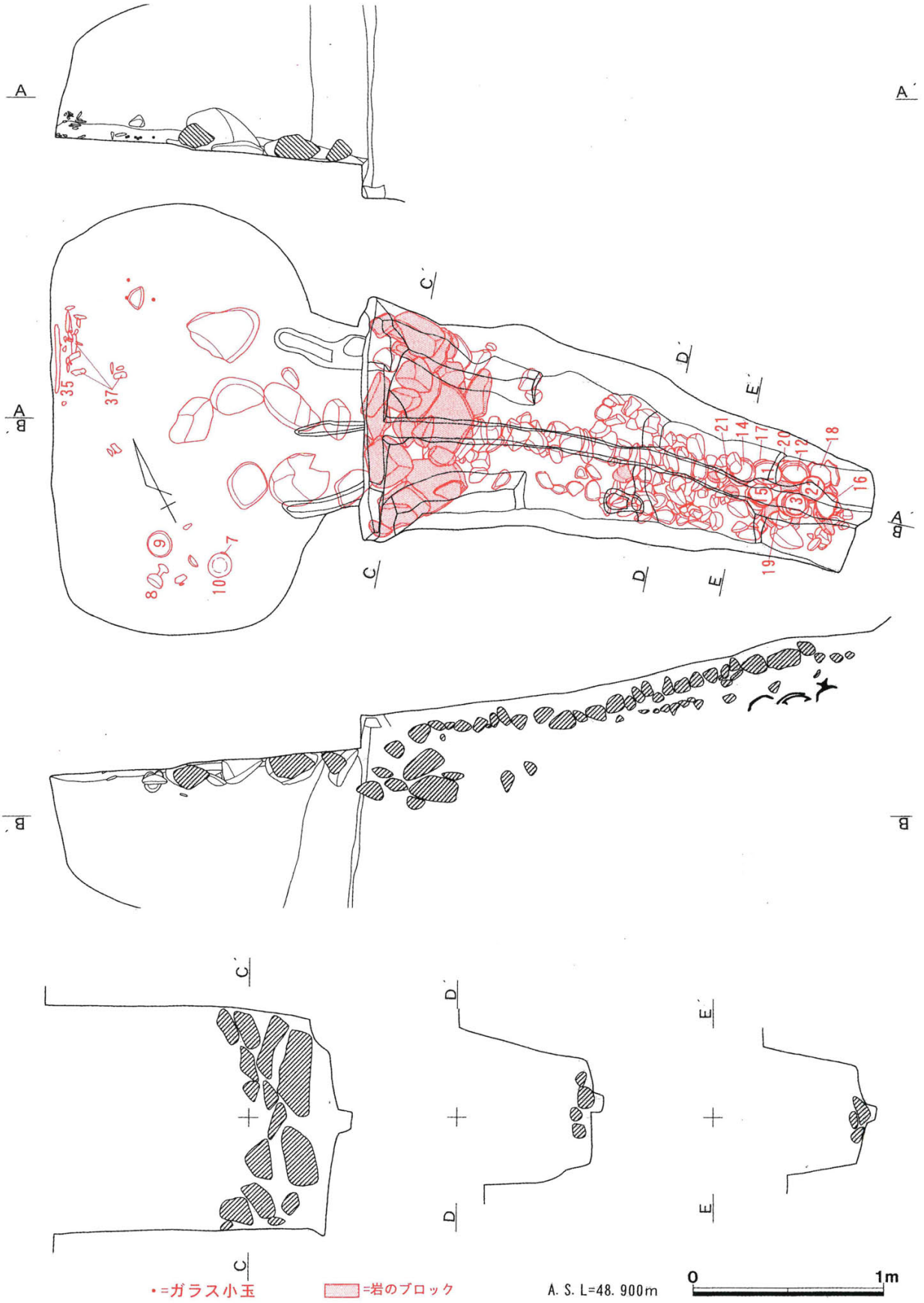
第４図　１号墓実測図



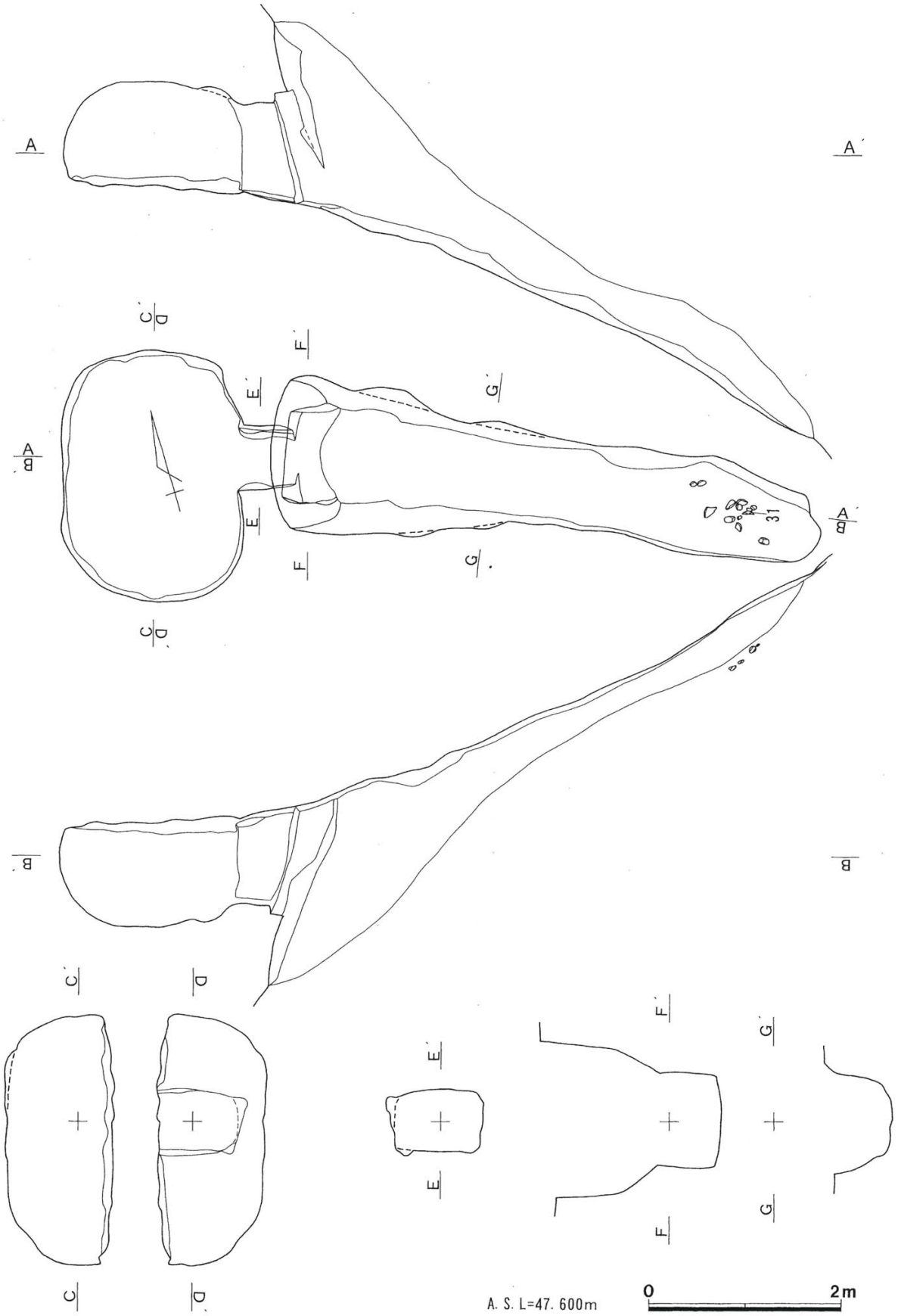
第５図　２号墓実測図



第６図　３号墓実測図(1)

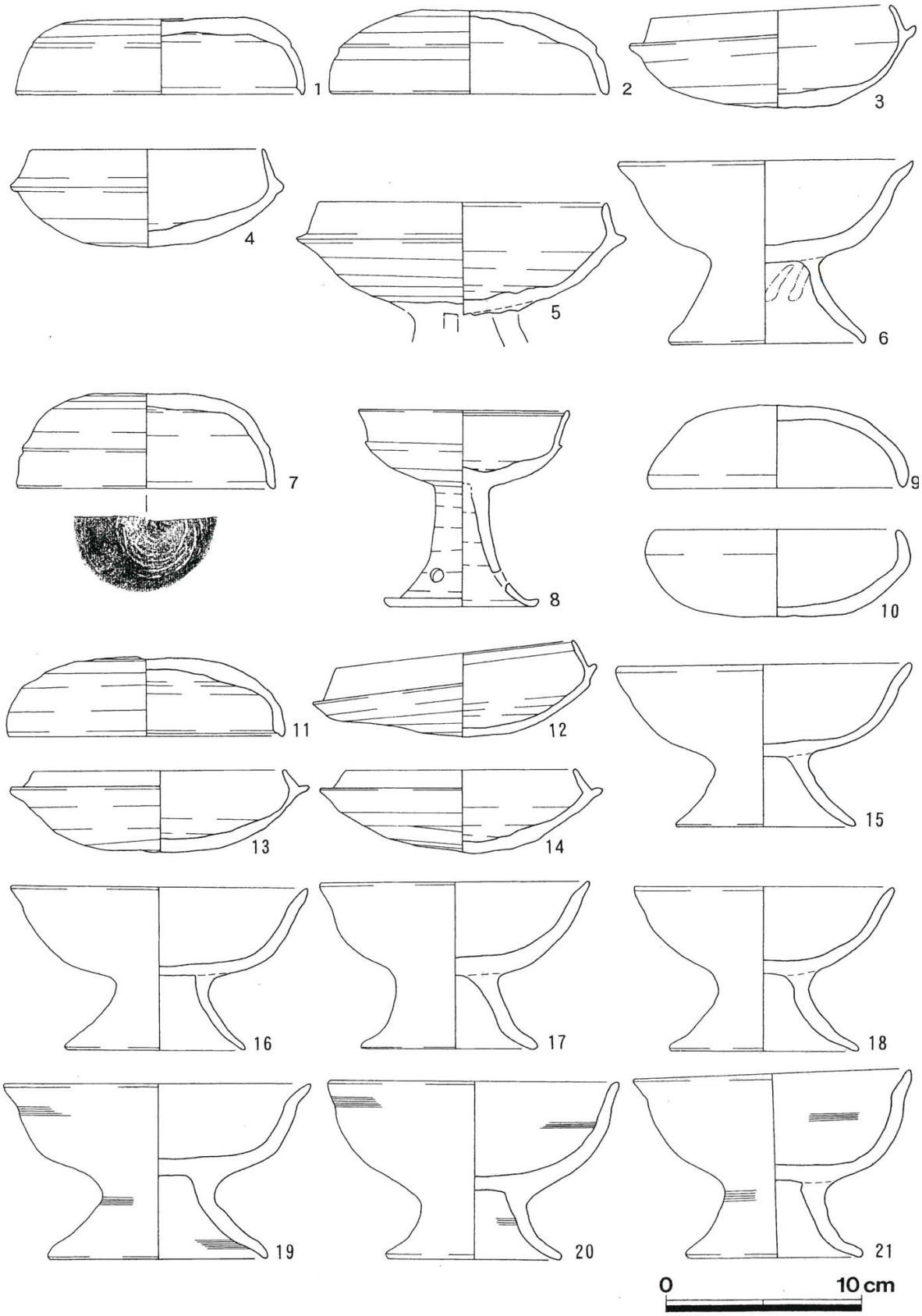

A
A´
A
B´
B
C´
D´
E´
C
D
E
35
37
9
8
10
7
21
14
17
20
12
18
16
15
13
22
19
・=ガラス小玉
=岩のブロック
A. S. L=48. 900m
0
1m

第７図　３号墓実測図(2)

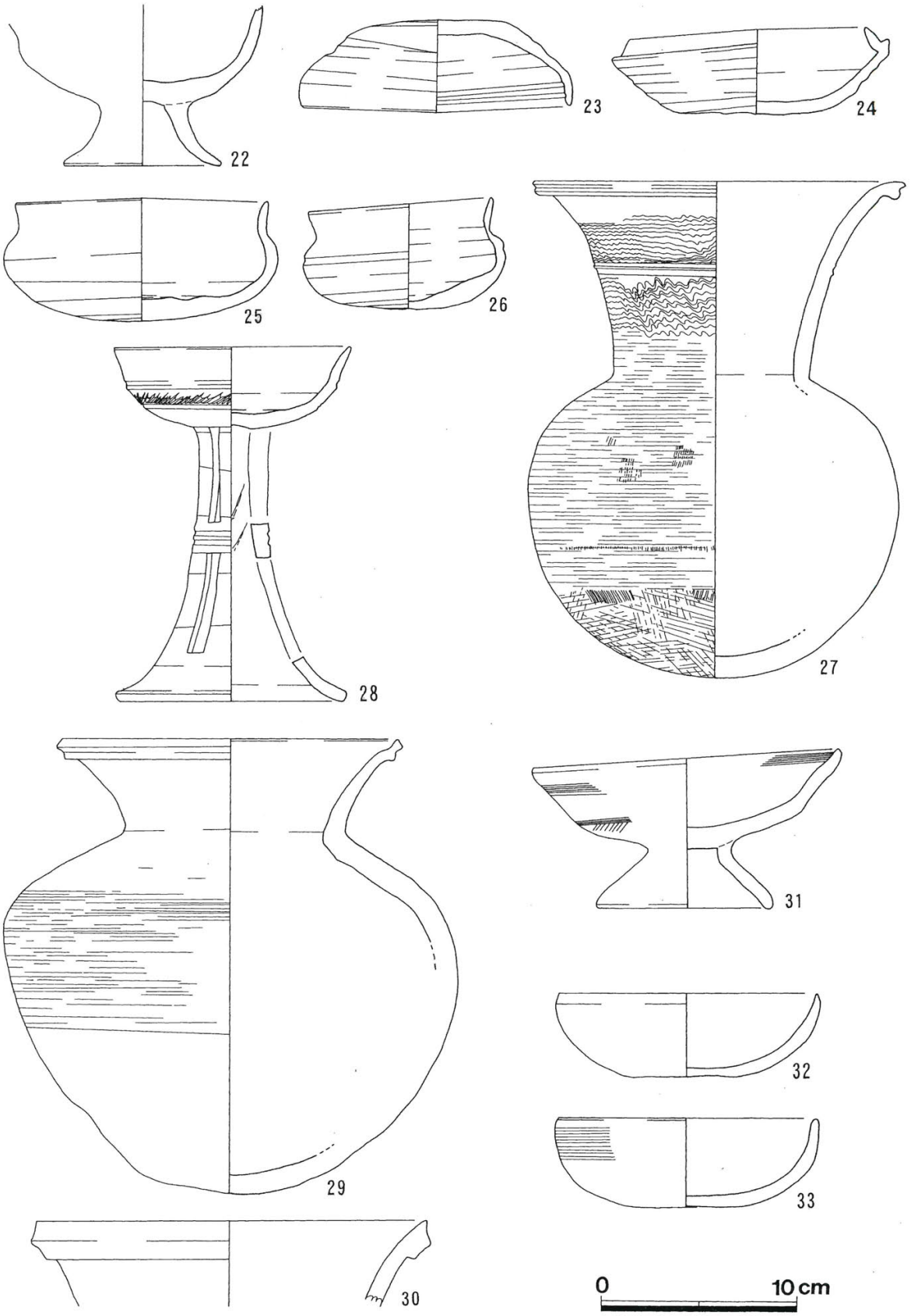


第８図　４号墓実測図(1)

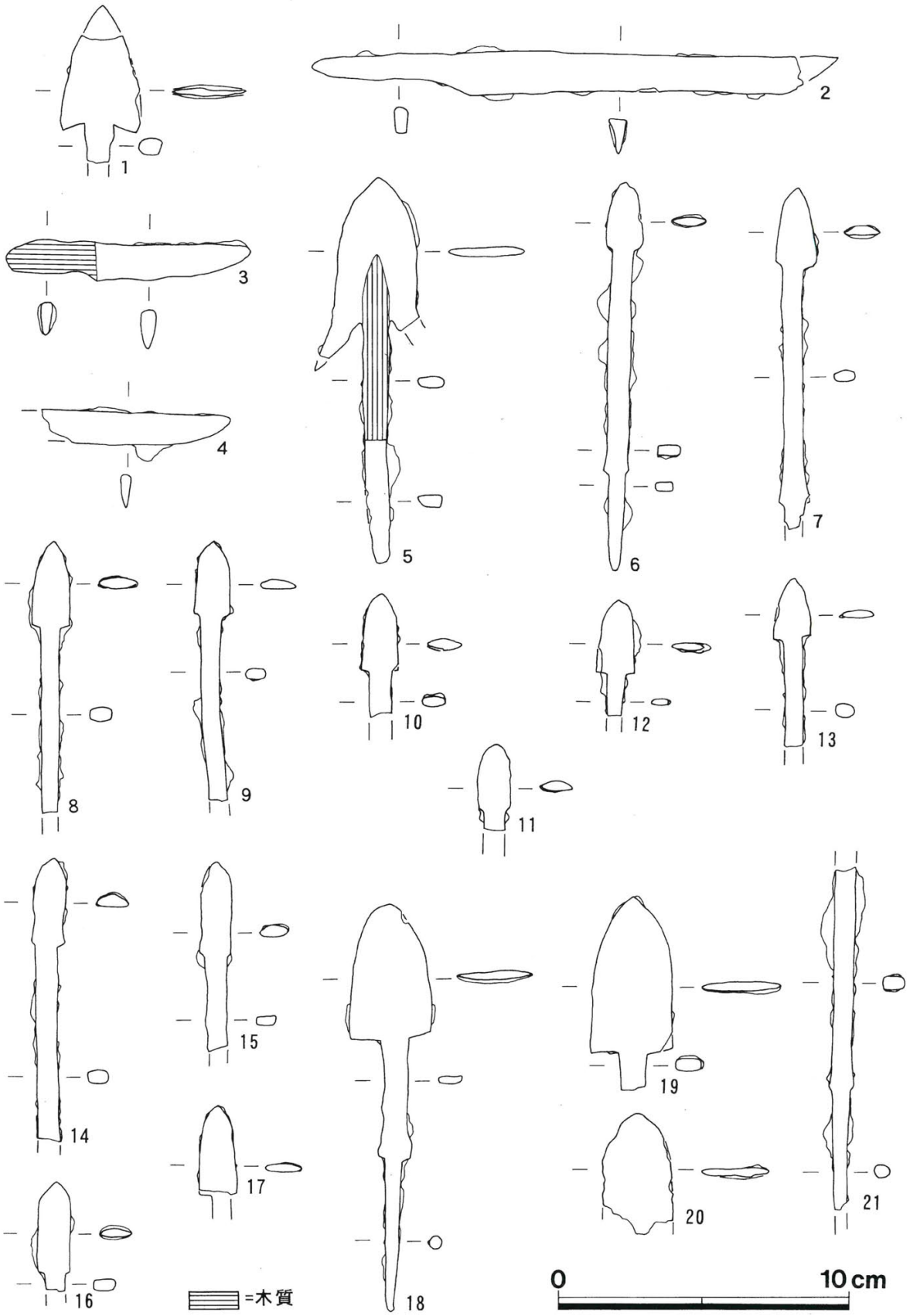
第９図　４号墓実測図(2)



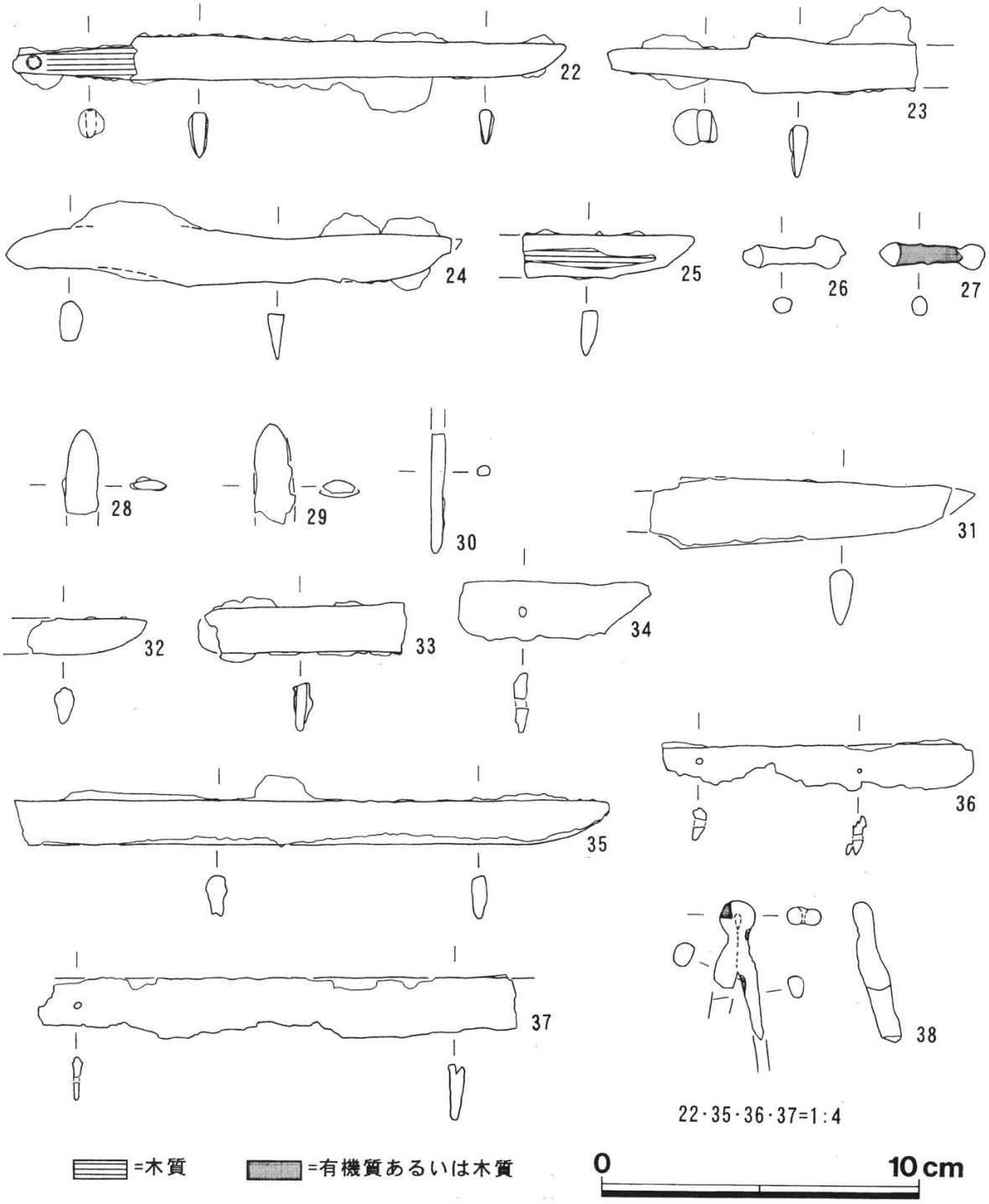
第10図　土器実測図(1)



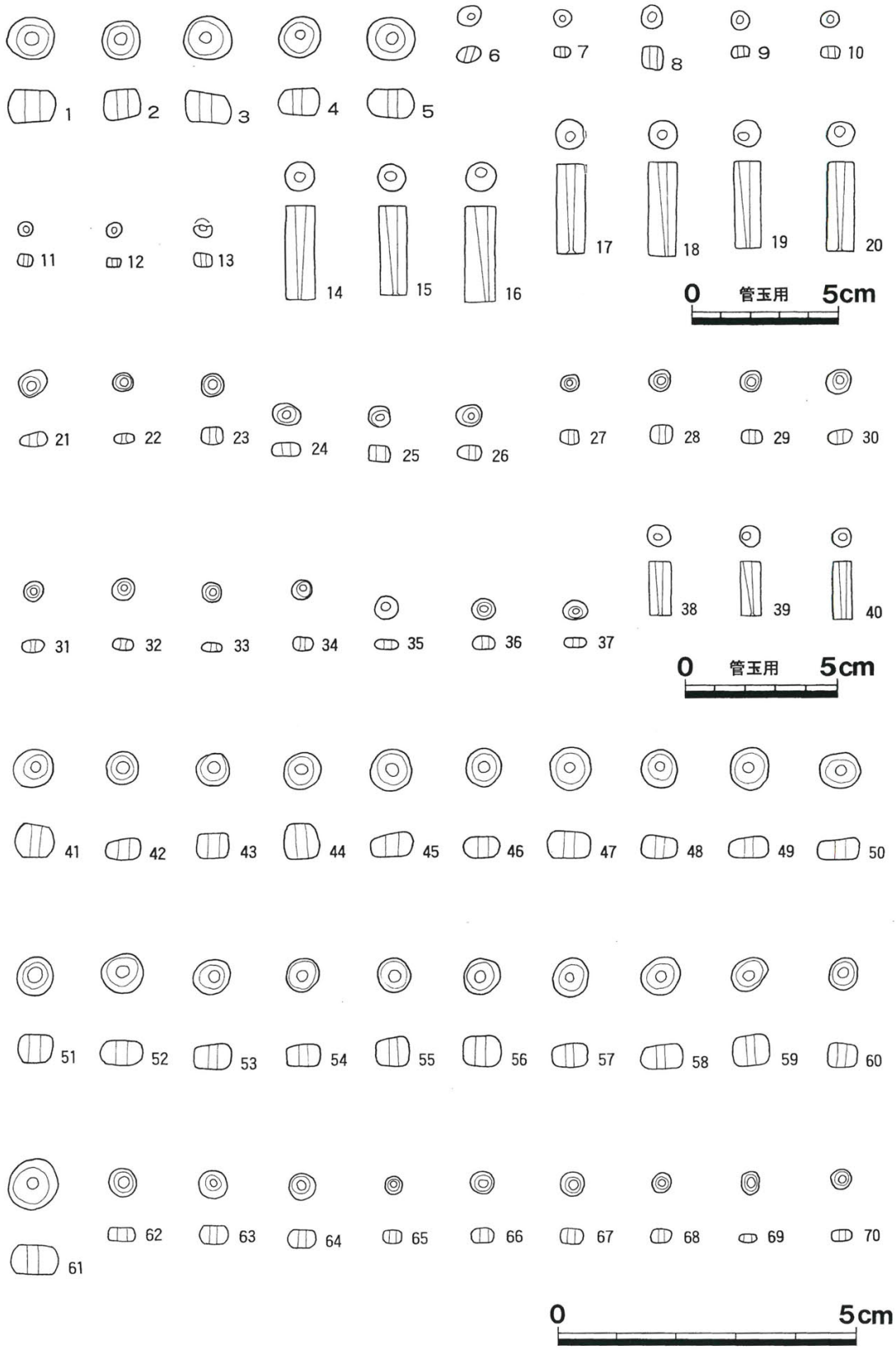
第11図　土器実測図(2)



第12図　鉄製品実測図(1)



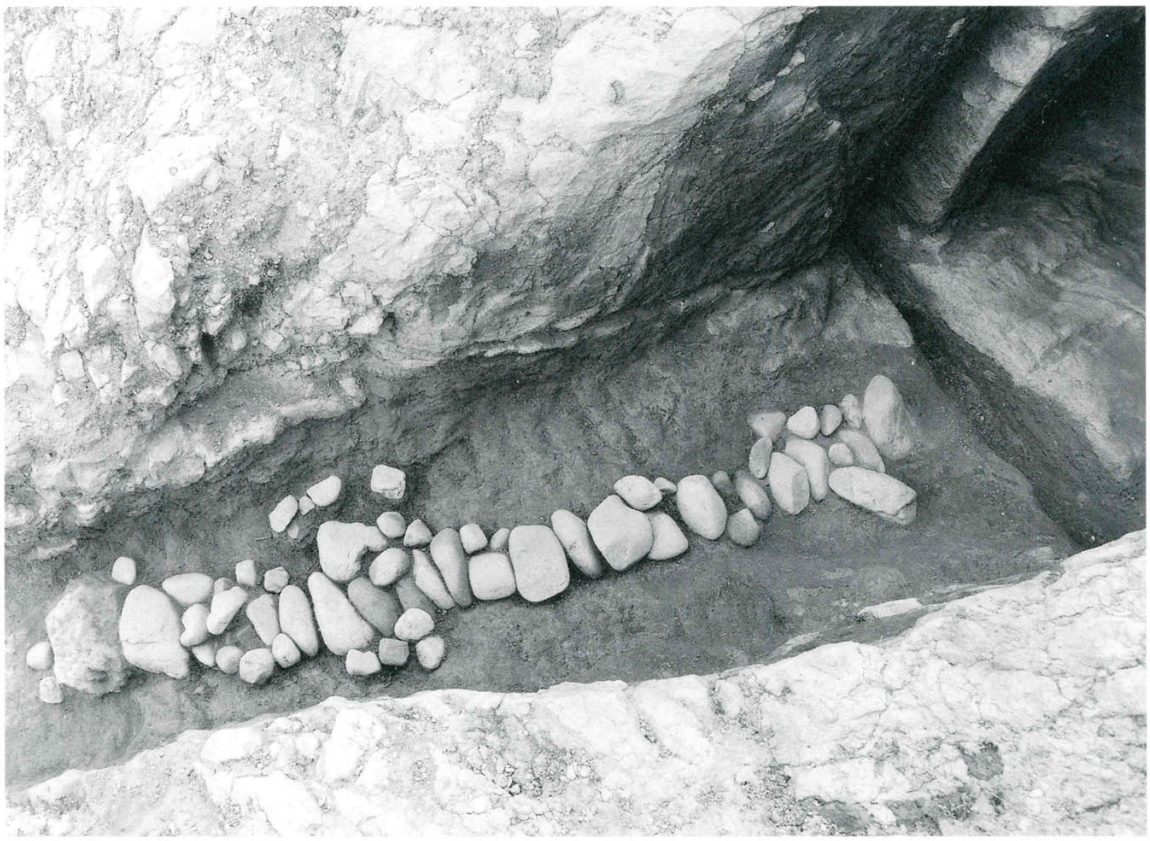
第13図　鉄製品実測図(2)



第14図　玉類実測図

図版 1

横穴墓群全景（東から）

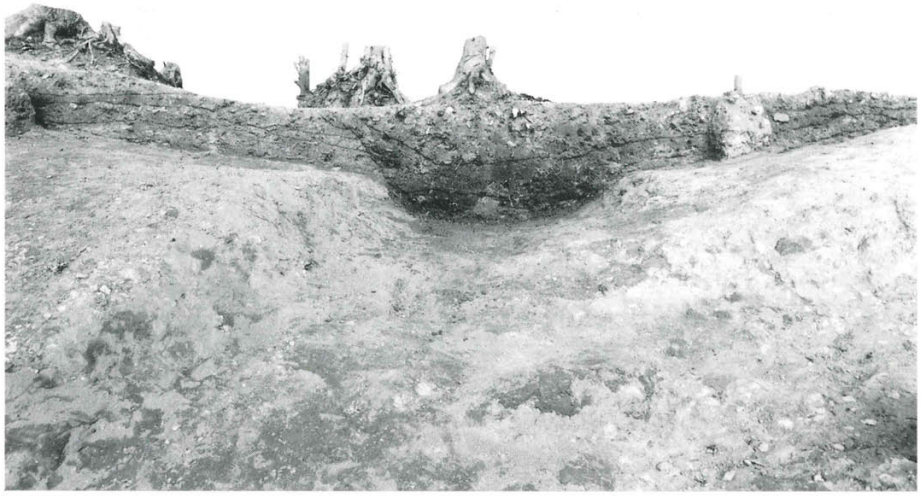


3号墓排水溝の蓋石（左壁方向から）

図版 2

墳丘状遺構全景
（北西から）

北側周溝内遺物
（北西から）



南側周溝土層断面
（西から）

図版 3

北側周溝土層断面
（西から）

１号墓閉塞状況
（墓道から）

１号墓閉塞状況
（左壁方向から）

図版 4

1号墓閉塞下部
（墓道から）

1号墓墓道遺物
（墓道先端方向から）

1号墓玄室内工具痕
（左壁から）

図版 5

2号墓羨門
（墓道から）

2号墓全景
（墓道から）

3号墓閉塞状況
（墓道から）

図版 6

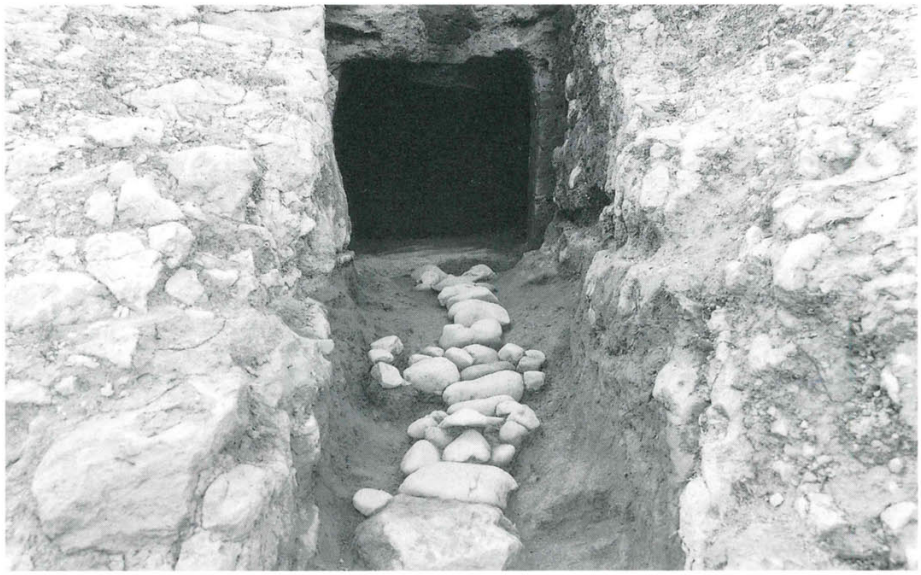
3号墓玄室上層遺物
（墓道から）

3号墓玄室下層遺物
（墓道から）

3号墓墓道遺物
（墓道先端から）

図版 7

3号墓墓道敷石
（左壁方向から）

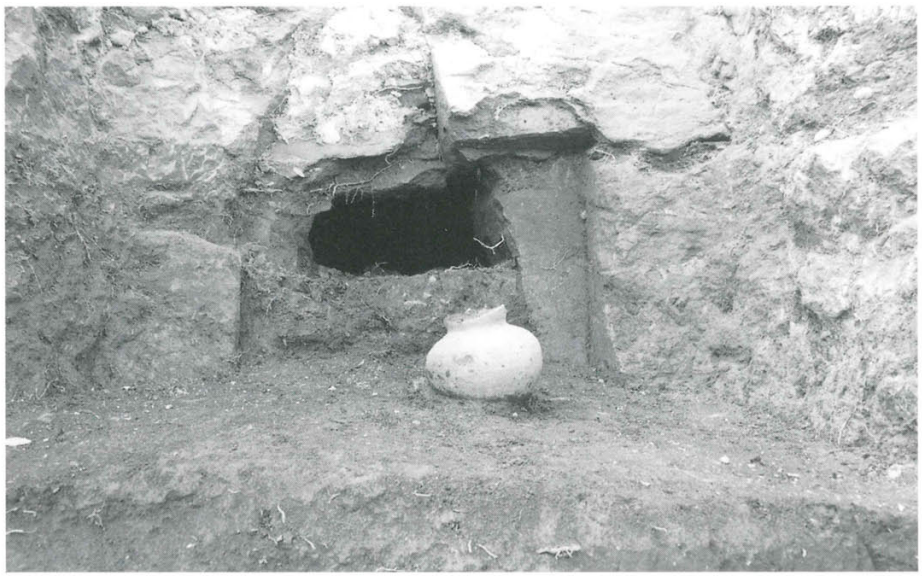


3号墓墓道排水溝蓋石
（墓道先端から）

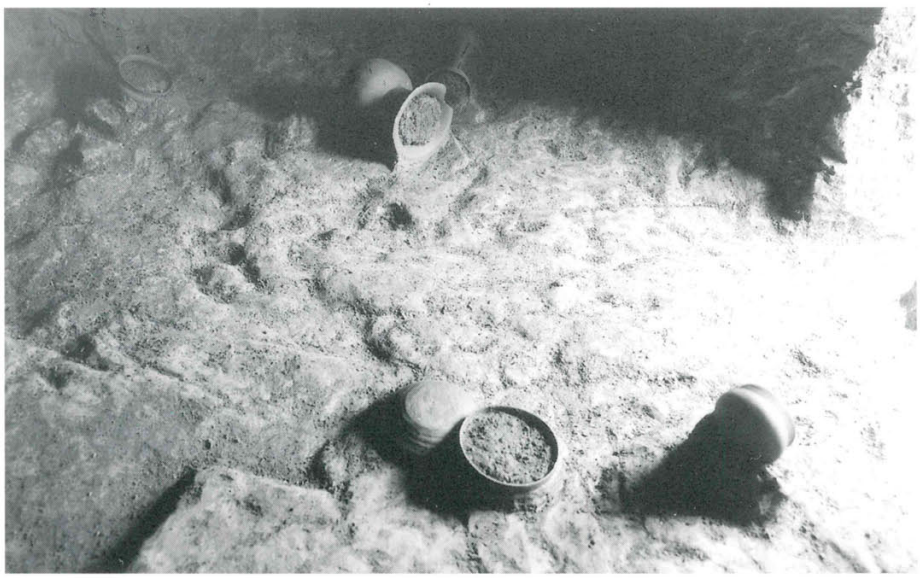
3号墓閉塞施設
（墓道から）

図版 8

3号墓排水溝
（左壁方向から）

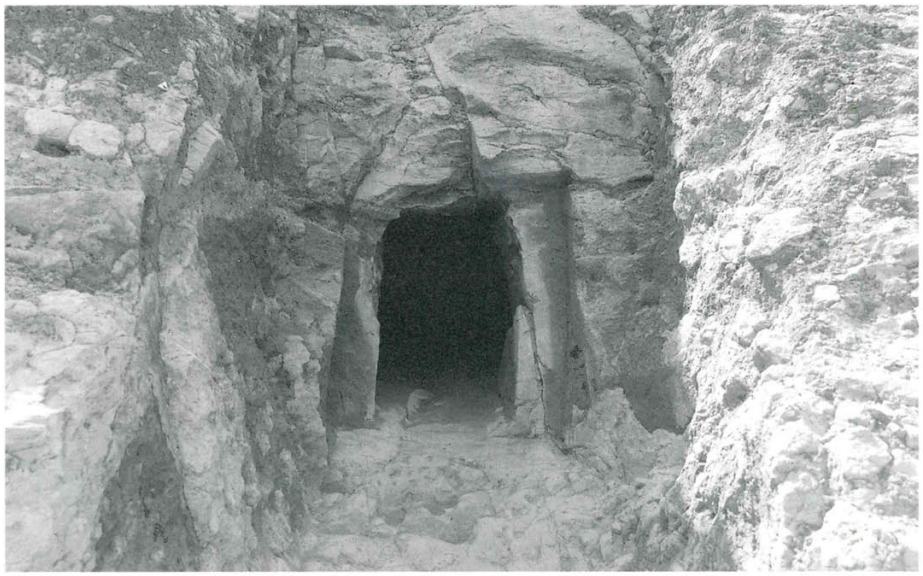


4号墓羨門外遺物
（墓道から）



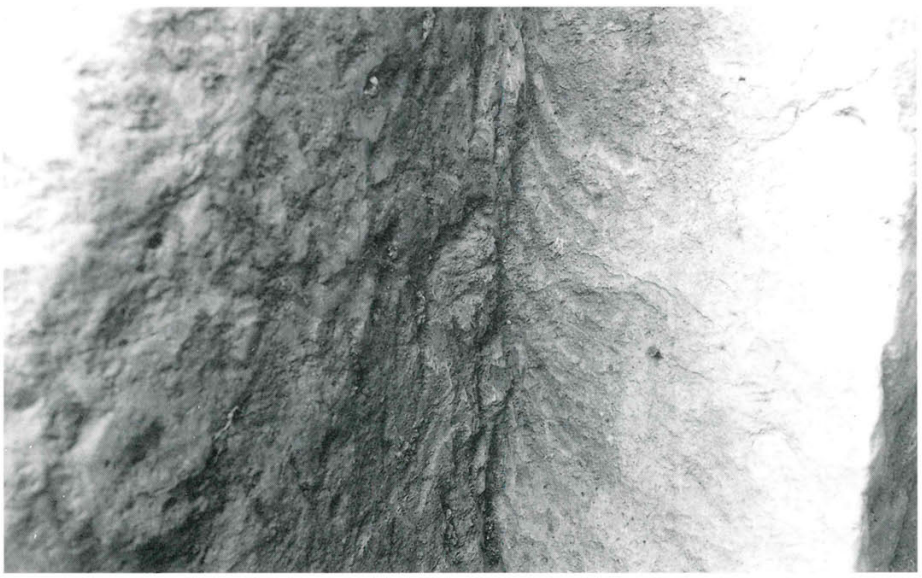
4号墓玄室内遺物
（右壁から）

図版 9



4号墓羨門
（墓道から）

4号墓閉塞施設
（右壁方向から）



4号墓閉塞施設に残る
工具痕（墓道から）

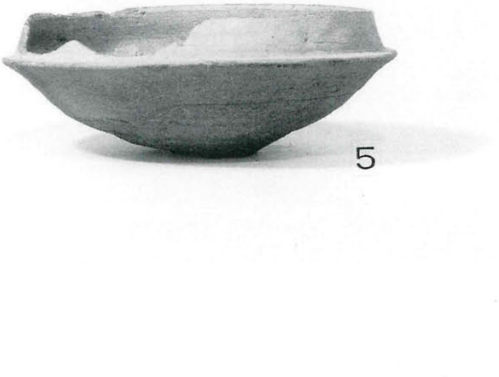
図 版 10

1

2

3

4

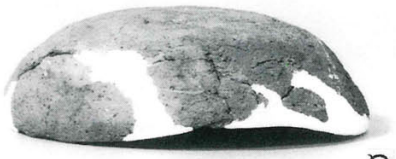

5

6

7

8

図版 11

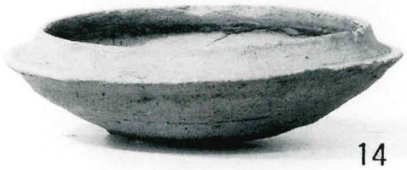

9

10

11

12

13


14

15

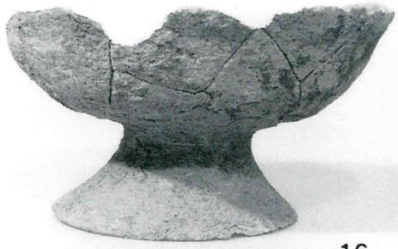
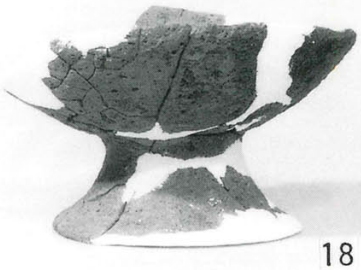

16

図 版 12

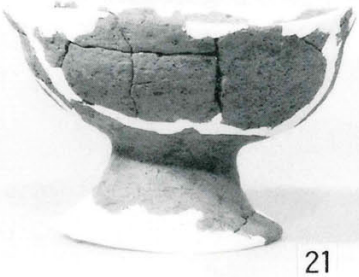
17



18

19

20

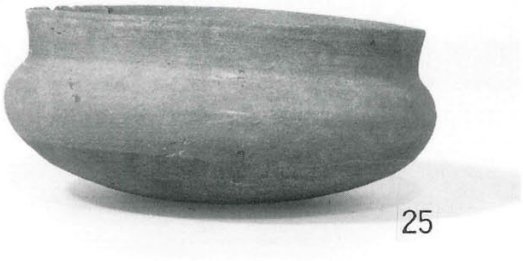


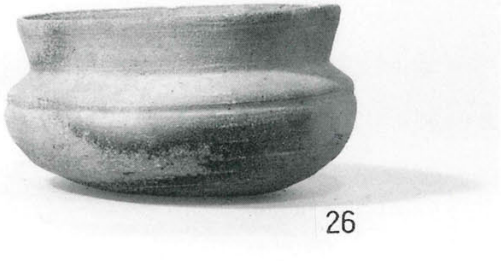
21

22

23

24


25

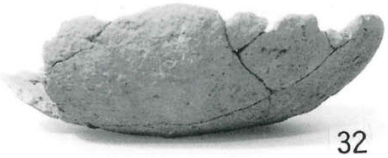

26

27

28

29

31


32

33

図版 14

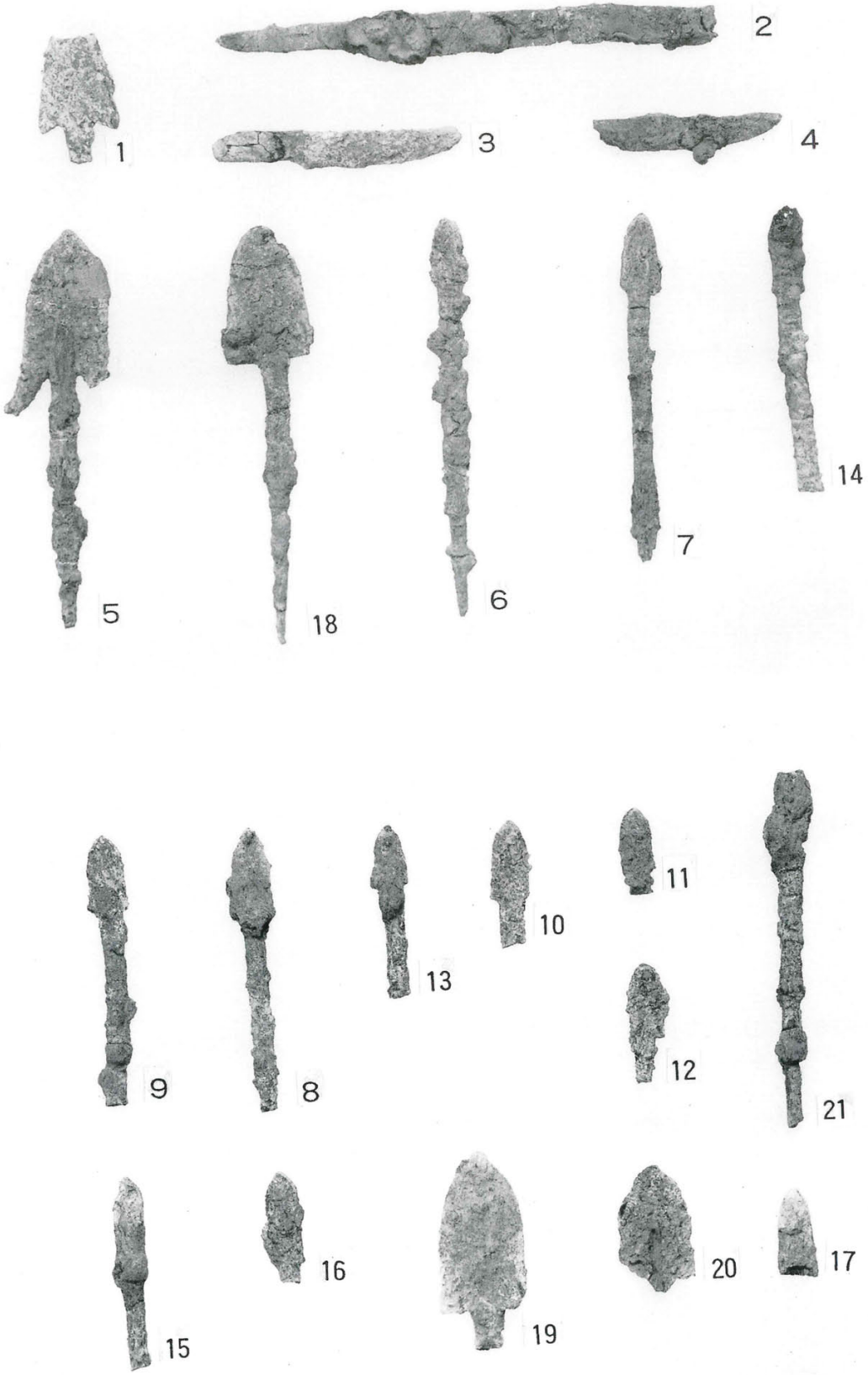


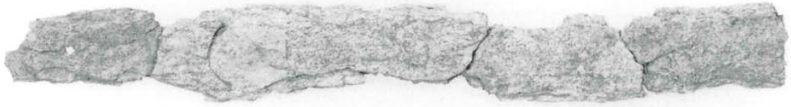
図 版 15

22

35

36

34


37

24

23

25

26

27

28

29

30

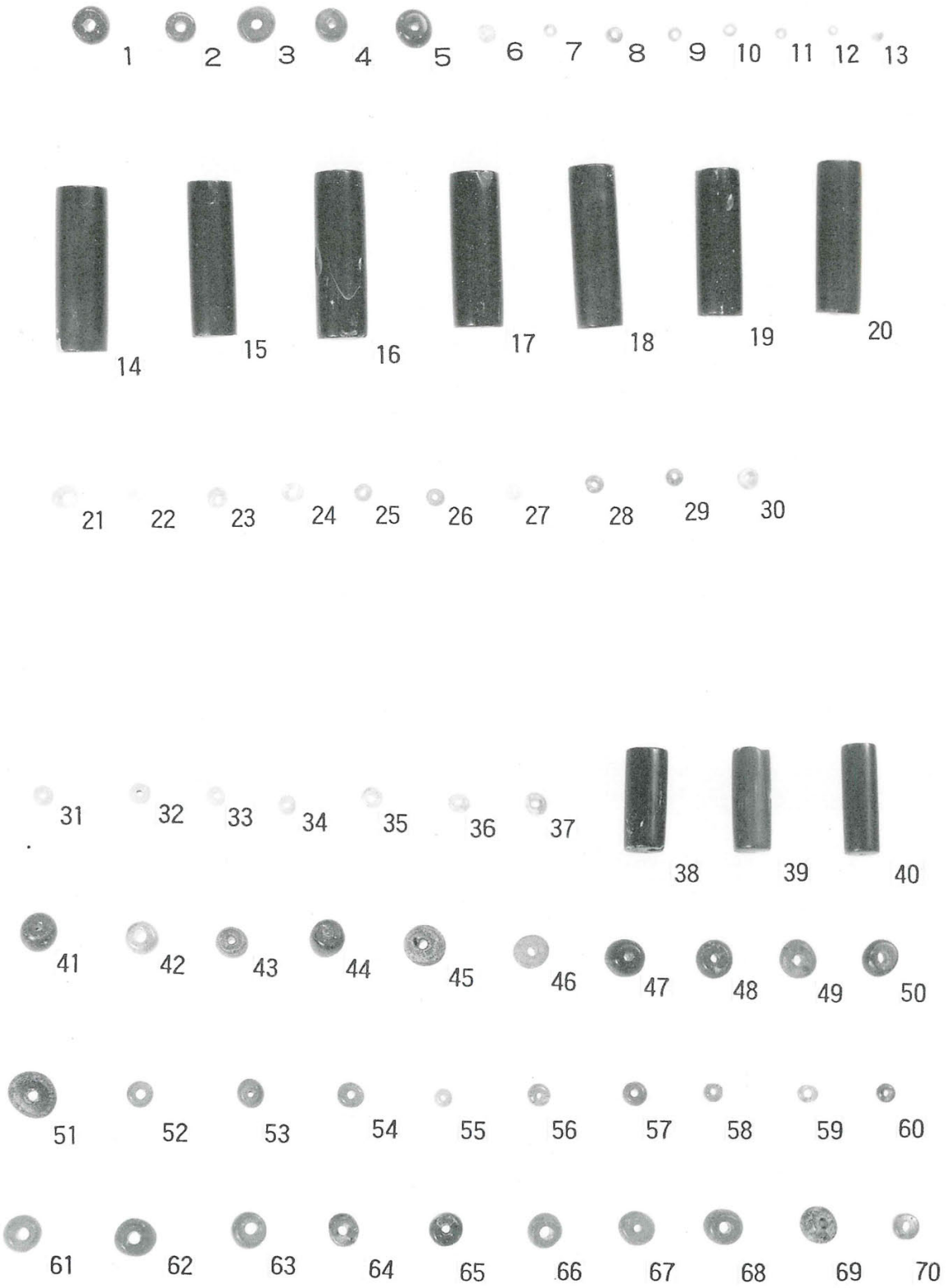
31

32

33

38

図 版 16


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
14 15 16 17 18 19 20
21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
31 32 33 34 35 36 37 38 39 40
41 42 43 44 45 46 47 48 49 50
51 52 53 54 55 56 57 58 59 60
61 62 63 64 65 66 67 68 69 70

Ⅵ　寺ヶ谷横穴墓群

1．調査の概要

調査で確認された横穴墓は、単独で存在する１基であるが、遺跡地図･地名表に「寺ヶ谷横穴墓群」と記載されているので、寺ヶ谷横穴墓群として記述する。

調査は、雑草の草刈り後、バックホウで緩斜面の表土を除去した。その結果横穴墓を１基確認した。急斜面部分については、人力でトレンチを掘削し、横穴墓の有無を確認した。残存する丘陵斜面から確認された横穴墓は１基で、この横穴墓周辺を調査対象とした。

現地での図面は、遺構図を10分の１の縮尺で作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成10年12月14日から平成11年３月31日まで、現地調査を行った。

2．遺構の概要

横穴墓（第２図・第３図）

横穴墓は、全長4.20ｍを測り、玄室、羨道、閉塞施設、墓道から成る。

玄室　長さ左壁で1.7ｍ、右壁で1.34ｍ、最大幅1.59ｍを測る楕円形を呈する。現存する高さは、0.96ｍを測る。推定される天井の高さは、1.1ｍ前後である。玄室の断面形は、ドーム形である。羨道と玄室との境は明瞭であるが、前壁と側壁との境、奥壁と側壁との境は区別できない。奥壁沿いと右壁、左壁の前半は、壁際の掘り方底面が壁に向かって傾斜していて、排水を意図しているものと考えられる。工具痕は、幅３㎝～５㎝の刃先が平らなものと、７㎝～８㎝、９㎝～10㎝、10㎝～12㎝の刃先が湾曲するものの２種類が見られる。

最奥の礫の下から、土葬・火葬の区別のつかないごく少量の骨粉が検出された。

羨道　羨道は、玄室との境で幅0.86ｍを測り、閉塞の溝との境で0.44ｍを測る。残存する壁面の高さ25㎝を測る。左壁沿いの排水溝は断面「Ｖ」字状、右壁沿いの排水溝は断面逆台形を呈する。右壁沿いの排水溝は、深さ５㎝を測り、閉塞用の溝まで緩やかに傾斜している。この排水溝には、蓋に使用されたと考えられる20㎝前後の大きさの礫が存在した。礫に重なりが見られたり、中央から左壁寄りから検出されたりしていて、原位置から移動している可能性がある。

羨道は、岩（堆積砂）を少し掘り下げた程度であり、横穴墓の羨道に地山を掘ってつくった天井が存在しなかった可能性が考えられる。

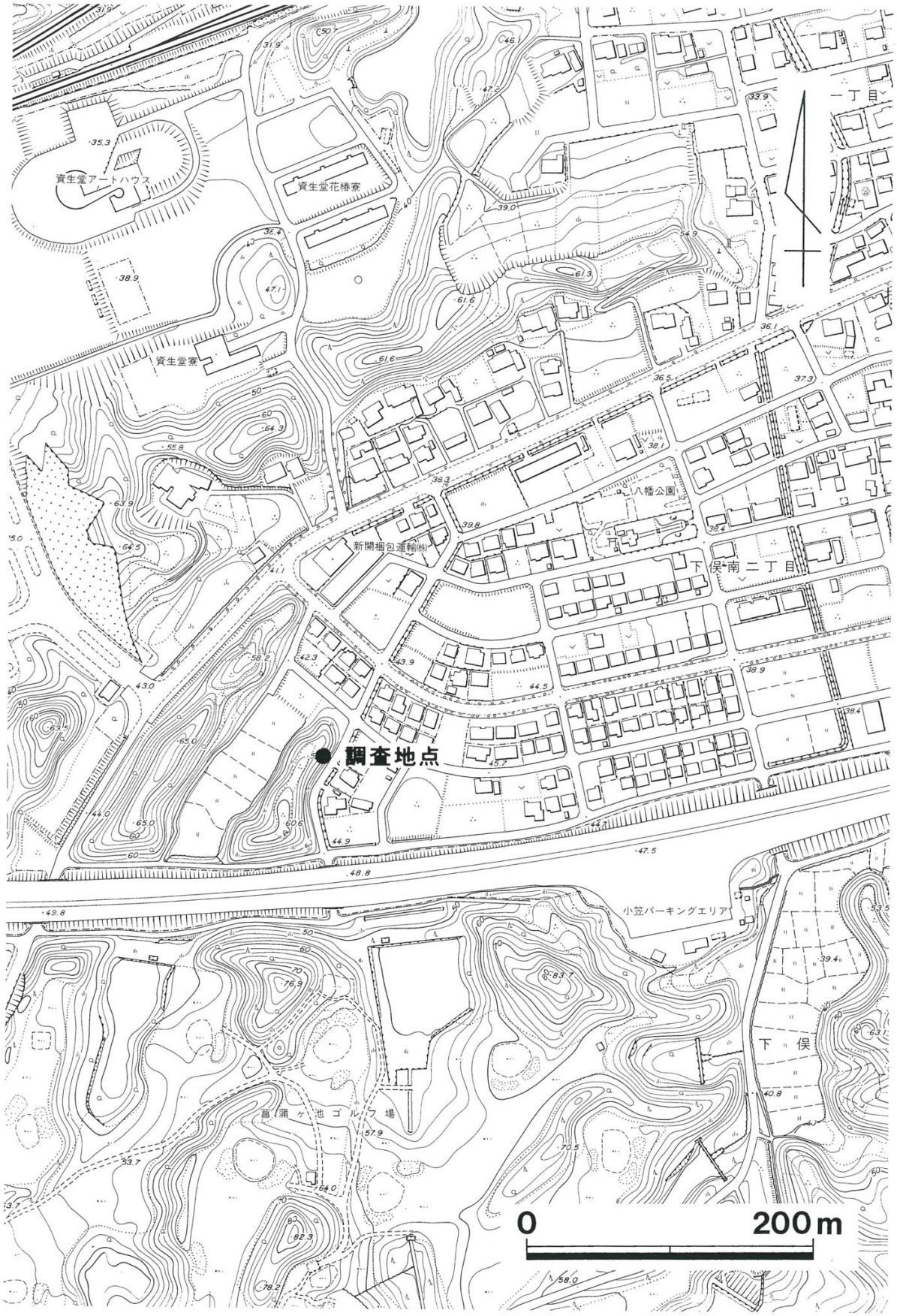
閉塞施設　閉塞施設と考えたのは、幅10㎝、長さ70㎝の溝である。羨道掘り方底面からの深さ10㎝を測る。この溝を境に掘り方底面に５㎝の段差がつくことから、溝から外を墓道と考えた。この溝に木板等をはめたと考えられる。羨道に地山を掘ってつくった天井がなかった可能性があるので、この閉塞は、形骸化したものである可能性と、羨道に木等で天井を架構した可能性が考えられる。

この溝の右横と左前方から柱穴状の遺構が検出されたが、性格・時期ともに不明である。

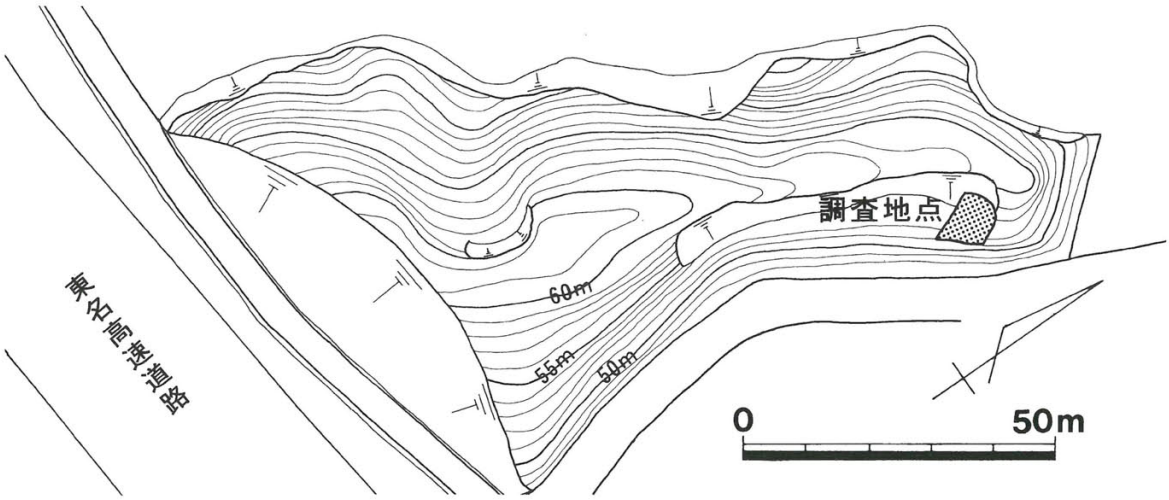
墓道　墓道は、閉塞用の溝から85㎝を確認した。掘り方底面の幅26㎝を測る。

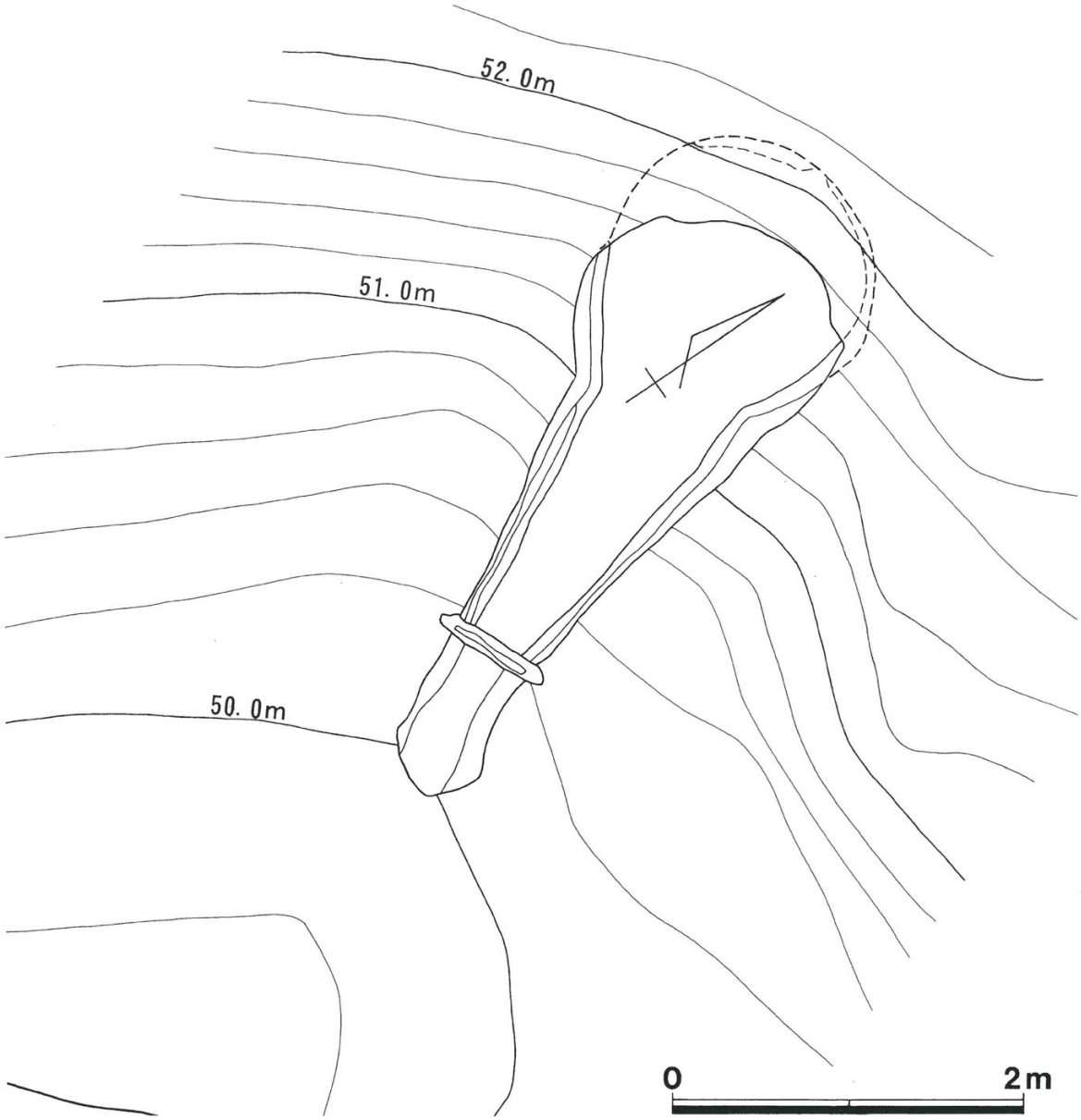
副葬品　副葬品は、羨道右壁の玄室寄りの場所から出土した土師器坏１点だけである。

坏の体部外面には、ヘラ磨きが施され、体部内面には暗文が施される。底部内外面の調整は、器表が磨滅していて不明である。内外面に赤彩の痕跡が残る。口径16.2㎝、器高3.3㎝を測る。

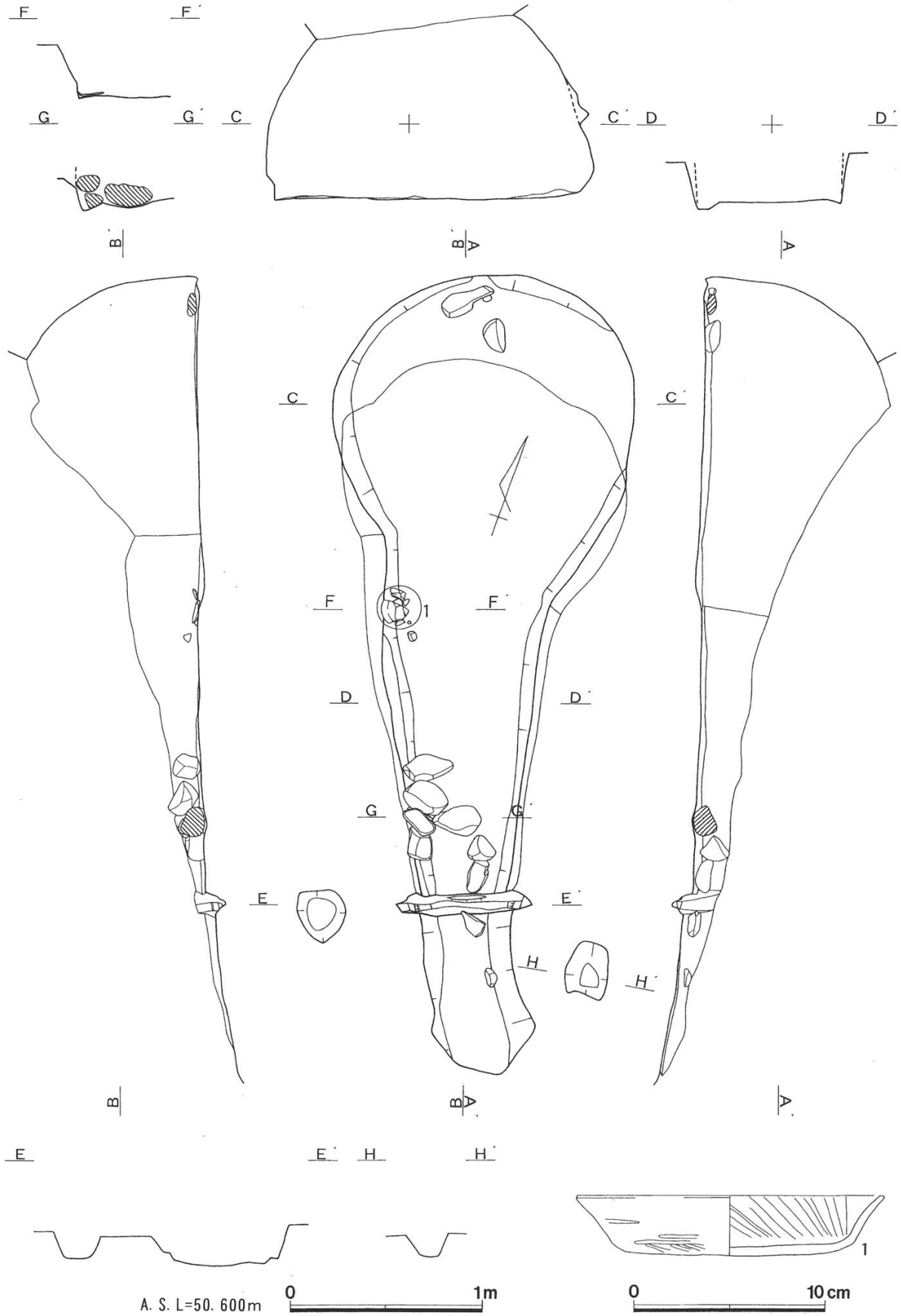

資生堂アートハウス
資生堂花椿寮
資生堂寮
一丁目
八幡公園
新開梱包運輸㈱
下俣南二丁目
調査地点
小笠パーキングエリア
菖蒲ヶ池ゴルフ場
下俣
0
200m

第1図　位置図





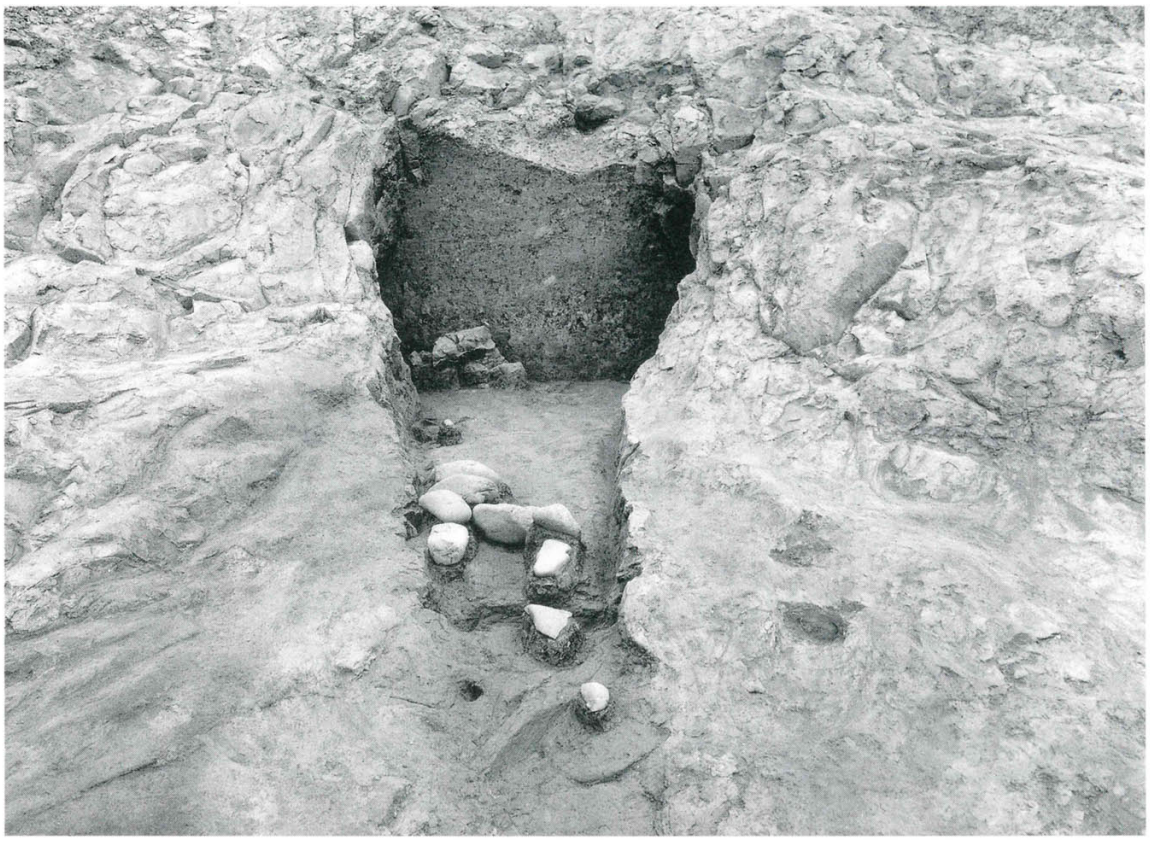
第2図　地形図



第３図　遺構・遺物実測図

図版 1

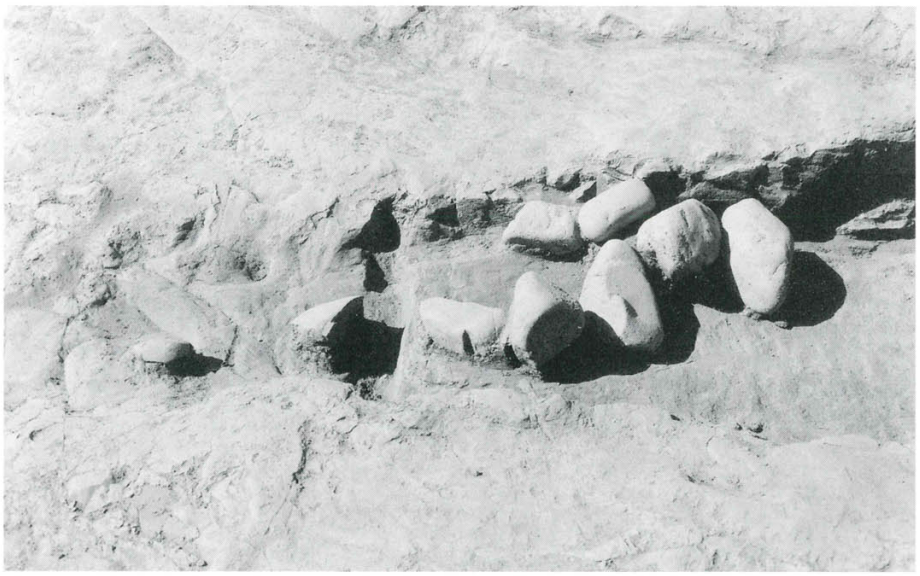
横穴墓全景（南東から）



遺物出土状況（南東から）

図版 2

遺物出土状況
（左壁方向から）



礫検出状況
（左壁方向から）

玄室内工具痕
（羨道から）

図版 3

閉塞施設
（左壁方向から）

横穴墓全景
（左壁方向から）

1

出土遺物

附載　Ⅰ　西池古墳出土の鉄製品

平成13年度に『掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査Ⅰ』の中で、報告できなかった西池古墳、山脇横穴墓群、本村横穴墓群Ｅ群出土の金属製品について報告する。実測図と記述は、錆落としをした状態の観察であり、Ｘ線撮影は実施していないことを断っておく。

ＳＦ０１（第１図・第３図）

ＳＦ01出土の鉄製品は、第３図－１の剣、２の大刀、３の鉈、４の鉄斧がある。

１は、全長78.45㎝、刃部の長さ62.25㎝、刃部の幅は、切先近くで3.5㎝、関近くで3.9㎝を測る。茎に目釘孔が１箇所確認できる。

２は、現存長68.6㎝、切先を欠損する。茎の長さ13.1㎝を測る。茎は反っている。目釘孔は肉眼では確認できない。

３は、全長8.5㎝、幅1.1㎝～1.4㎝を測る。中央に直径1.8㎝、厚さ２㎜の鉄の責金具が存在する。責金具を除くほぼ全面に有機質あるいは木質が付着している。この鉈は、首飾りの玉類の位置から、被葬者の頭部付近に供えられていたと考えている。２つに分かれて出土した。

４の鉄斧は、現存長11.8㎝、刃部の幅推定で7.0㎝である。刃部は、緩く弧状を描くことが確認できる。刃部は、はぜているが、鋭利であったと考えられる。袋部の厚さ4.0㎝、袋部の幅5.2㎝を測る。肉厚の鉄斧である。袋部の木質は確認できない。

ＳＦ０２（第１図・第３図・第４図）

ＳＦ02出土の鉄製品は、第３図－５の刀子、第４図－６・７の大刀がある。

５の刀子は、現存長12.3㎝、切先を欠損する。刃部側に関が認められる。刃部の幅1.9㎝、厚さ４㎜を測る。茎に木質が付着する。

６の大刀は、全長1.014ｍを測る。はぜていて、詳細は不明で、関・目釘孔も不明である。

７の大刀は、現在身の部分で２つに割れてしまっているが、現地での実測図の長さをもとに図上で長さを復元した。目釘孔のところで茎を欠損する。切先に近い部分で刃部の幅2.3㎝、関に近い部分で2.6㎝を測る。

ＳＦ０３（第２図・第４図）

ＳＦ03からは、第４図－８～10の鉄鏃、11の鉄剣が出土している。

８は、腸抉三角形鏃で、全長6.0㎝を測る。鏃身・逆刺を欠損する。鏃身の長さ4.4㎝、鏃身の幅3.3㎝と推定される。茎の長さ2.3㎝で、全面に木質が付着する。

９は、長三角形鏃で、頸部で欠損している。鏃身の長さ3.5㎝、鏃身の幅1.6㎝を測る。頸部の断面形は、四角形である。頸部に他の鏃の頸部と考えられる断面四角形の鉄製品が癒着している。

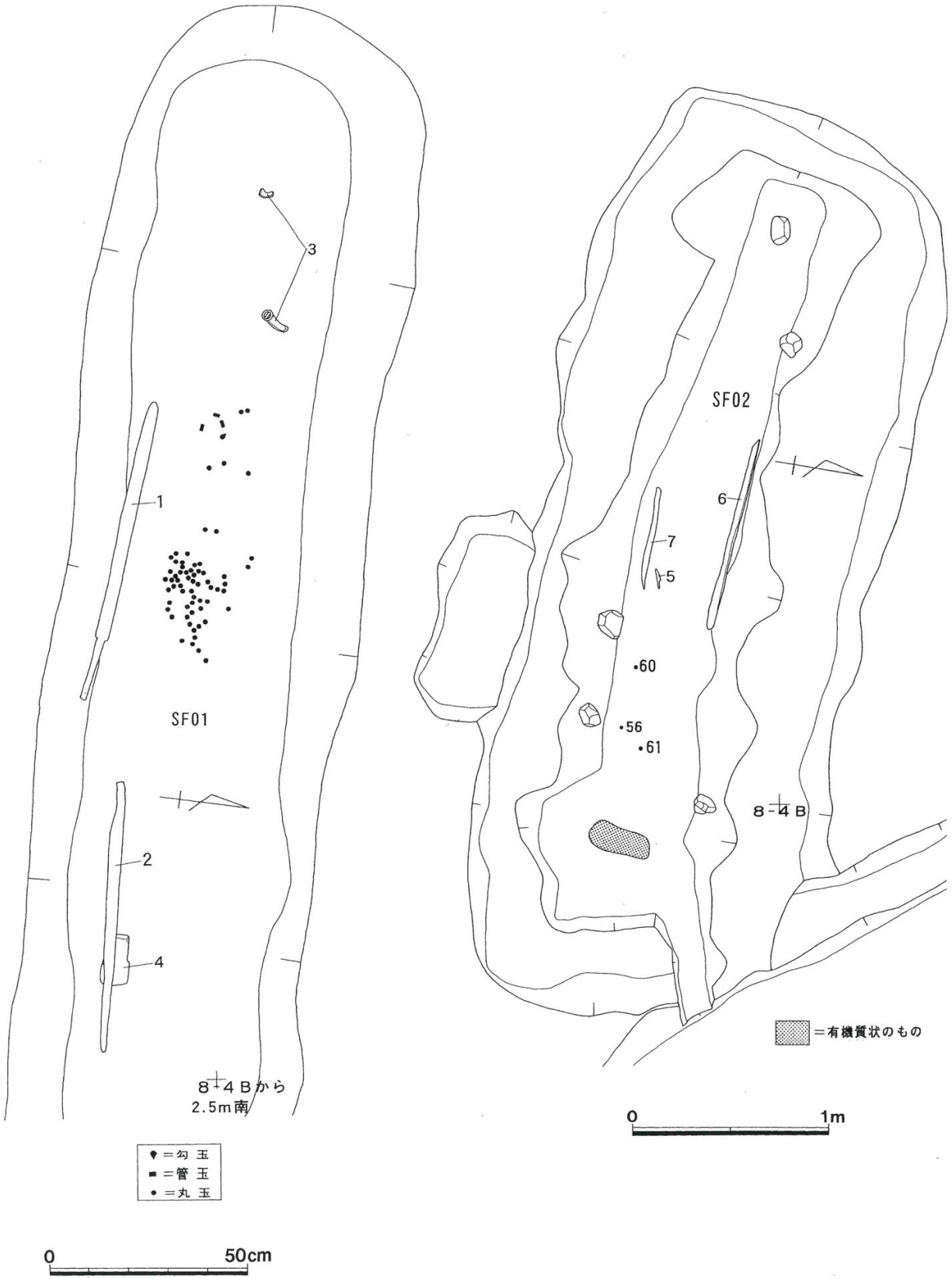
10は、鏃の茎の破片で、現存の茎の長さ3.4㎝を測る。

11の剣は、現存長32.1㎝を測る。茎の目釘孔で欠損する。刃部の幅は、切先に近い部分で2.0㎝、関に近い部分で2.8㎝を測る。関は不明瞭である。刃部の中ほどに木質が付着している。

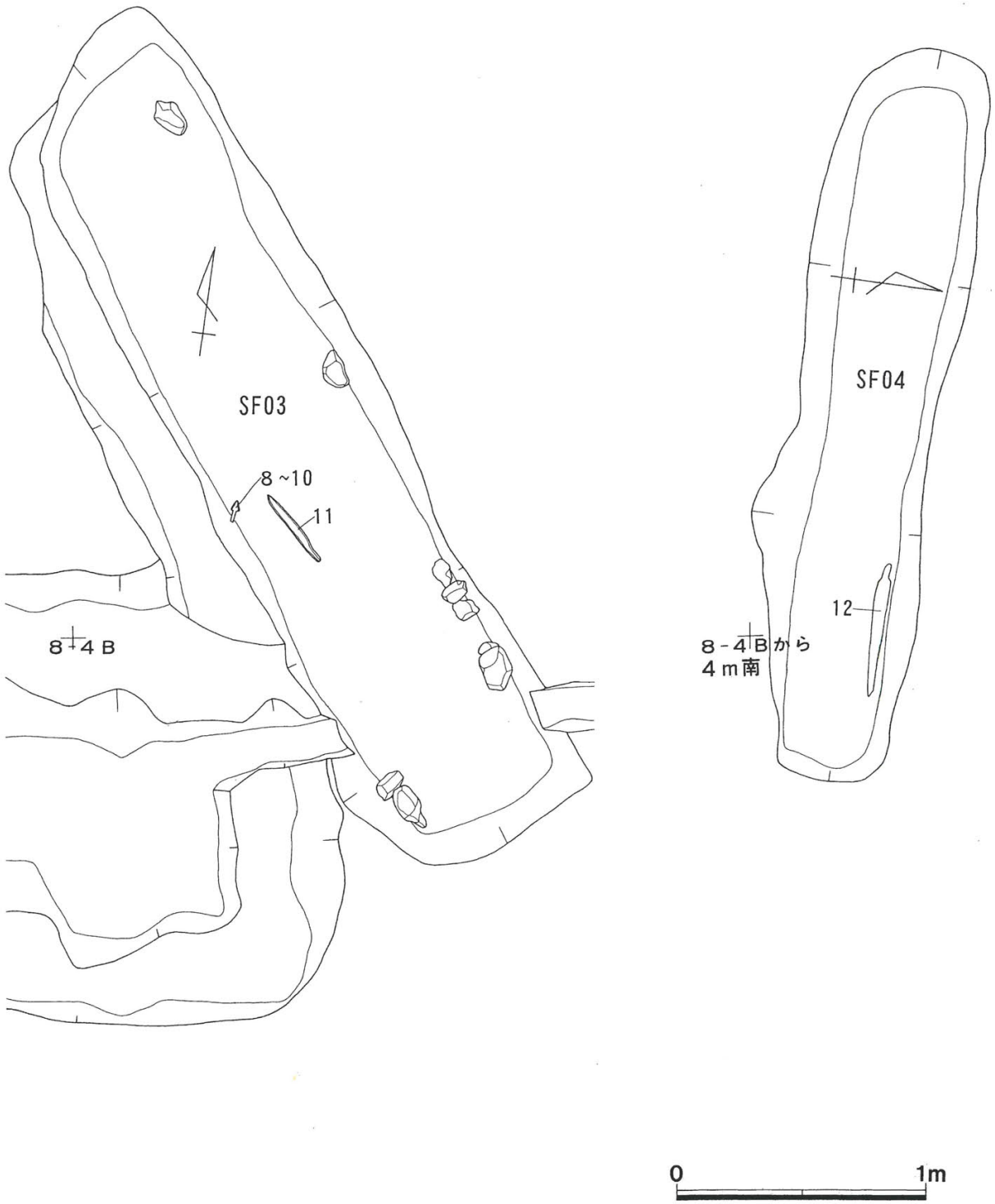
ＳＦ０４（第２図・第４図）

ＳＦ04出土鉄製品については、平成13年度の『掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査Ⅰ』の報告の中で大刀としたが、剣であった。

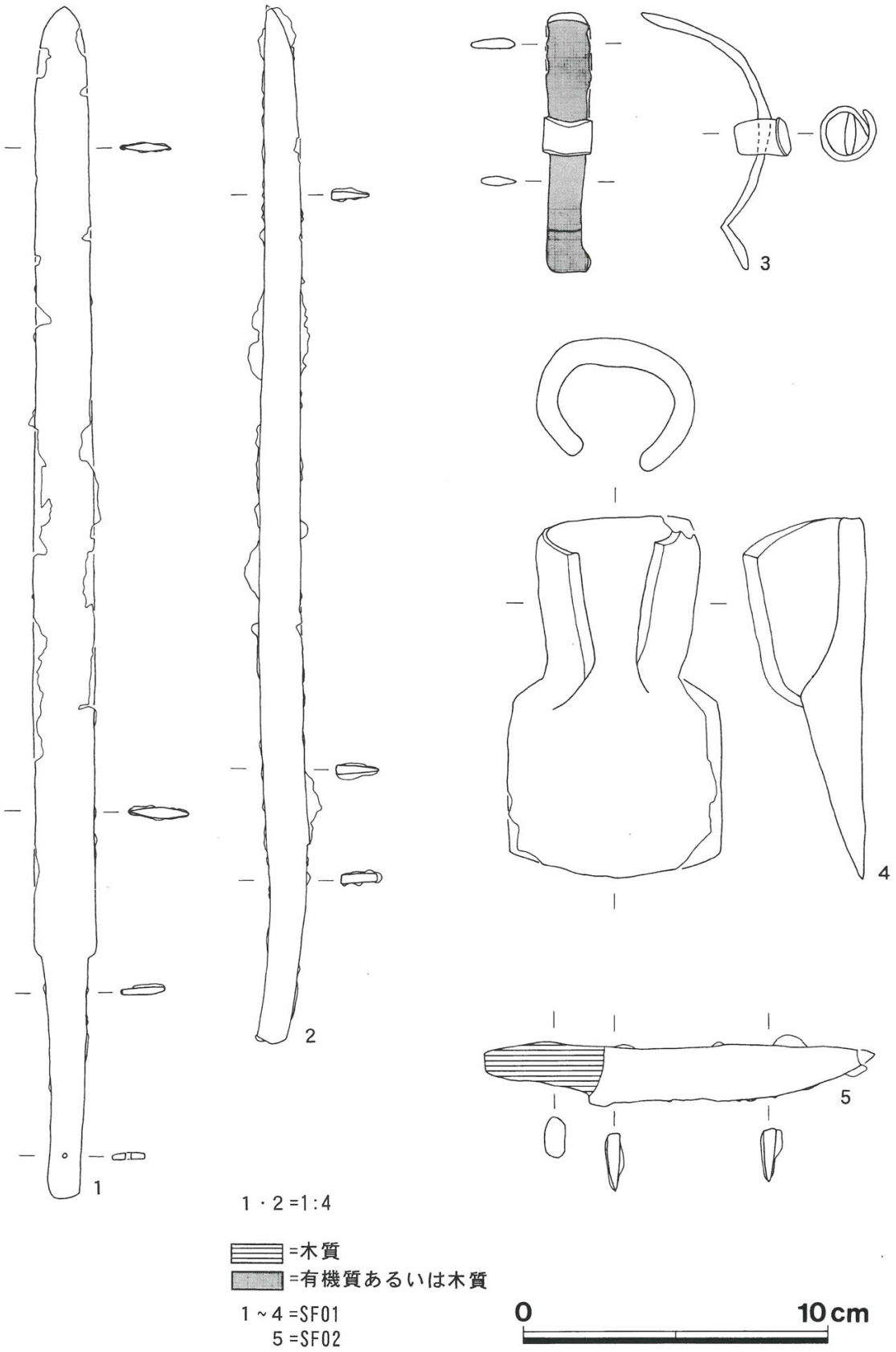
12は、現在身の部分で２つに割れてしまっているので、現地での実測図の長さをもとに図上で長さを復元した。刃部の幅は、切先に近い部分で2.8㎝、関に近い部分で3.6㎝を測る。切先にだけ木質が付着する。茎に目釘孔が１箇所確認できる。



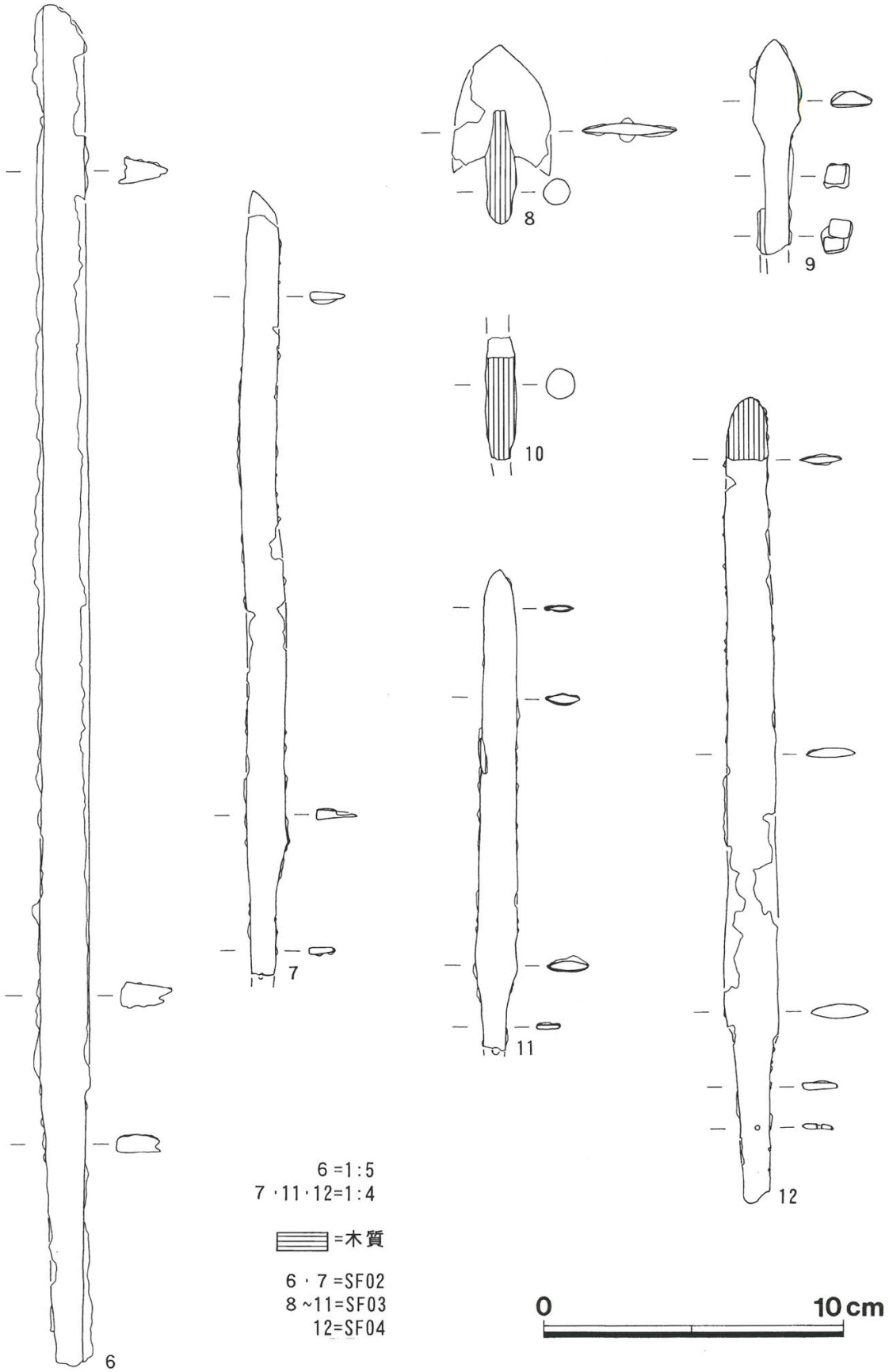
第１図　ＳＦ０１（左）・ＳＦ０２（右）平面実測図



第２図　ＳＦ０３（左）・ＳＦ０４（右）平面実測図



第3図　鉄製品実測図(1)



第４図　鉄製品実測図(2)

図版 1

1

2

3

4

5

図版 2

6

12

11

9

8

Ⅱ　山脇横穴墓群出土の鉄製品

山脇横穴墓群出土鉄製品には、大刀、刀子、鉄鏃、両頭金具、鞍がある。鉄製品以外に銅製品が出土している。横穴墓順に遺物の概要を述べる。

1号墓（第1図・第4図）

1号墓からは、第4図－1の大刀、2・3の刀子、4の銅環が出土している。大刀と2の刀子は、玄室の中央右寄りから、3の刀子と銅環は玄室左壁寄りの骨が集中する場所から出土している。

1は、現存長82.2㎝、切先を欠損する。鍔の周辺は、錆がひどく関等まったく観察できない。茎に目釘孔が2箇所確認できる。

2は、全長14.9㎝を測る。背側の関は明瞭であるが、刃側の関は明瞭ではない。肉厚な造りである。茎に木質が残る。

3は、全長10.8㎝を測る。刃部は、使用によりすり減っている。関は明瞭ではない。茎に木質が残る。

4の銅環は、直径1.5㎜、幅1.3㎝を測る。

2号墓（第2図・第4図・第5図）

2号墓からは、第4図－5の大刀、6の鍔・鏻、7～10の鏃、第5図－11～14の刀子、15・16の両頭金具、17の鞍がある。鍔・鏻は、大刀についた状態で、玄室右半につくられた棺座の上から出土した。7～10の鏃は、玄室左半の礫床の奥からまとまって出土した。11・12の刀子は、棺座と礫床の間から、14の刀子は棺座の上から出土した。16の両頭金具は、鏃近くの礫床部分から出土した。17の鞍は、右袖部分の棺座上から出土した。

5は、現在身の部分で2つに割れているため、現地の実測図をもとに図上で長さを復元した。切先を欠損し、関は明瞭ではない。茎は短く、一部に木質が付着する。6の鍔と鏻は、5の大刀にはまっていたものである。

7は、現存長21.7㎝を測る。鏃身は、長三角形鏃と考えられる。鏃身の長さ2.7㎝と推定される。頸部と茎部の境は明瞭ではない。

8は、三角形鏃で、全長20.4㎝を測る。鏃身の長さ1.4㎝を測る。頸部と茎部の境は明瞭ではない。

9は、長三角形鏃で、現存長16.8㎝を測る。鏃身の長さ2.15㎝を測る。茎部を欠損する。

10は、現存長16.1㎝を測る。鏃身と茎部の途中から欠損する。関は棘状関である。

11は、現存長16.7㎝を測る。切先と茎を欠損する。関は明瞭ではない。

12は、全長11.2㎝を測る。刃部は使用によりすり減っている。関は、明瞭ではない。茎に木質が残る。

13・14は、刀子の刃部で茎を欠損する。

15・16の両頭金具には、木質が付着する。

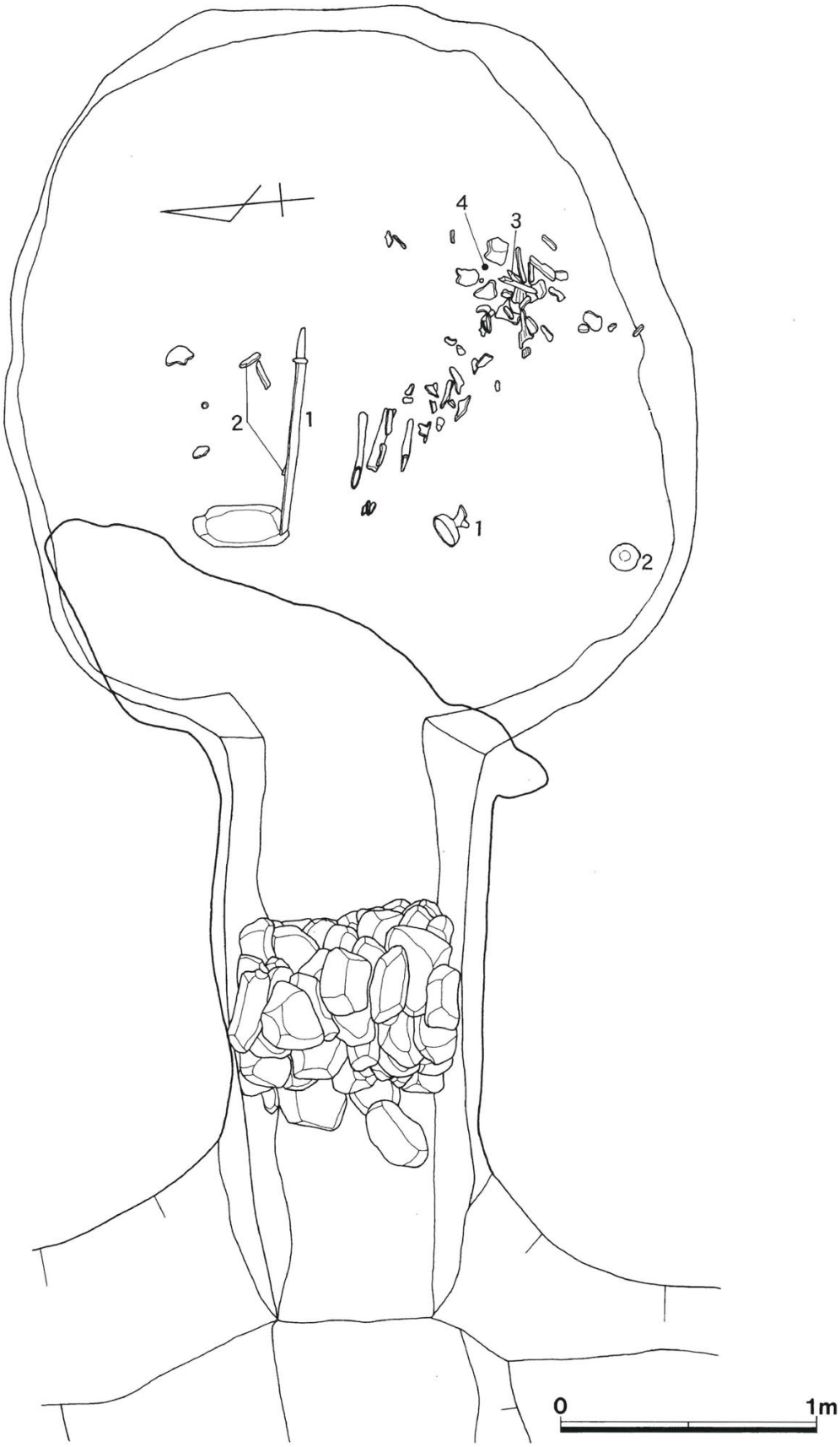
17の鞍は、鉸具状金具に刺金をもたない。座金具は、円盤形で鉄地金銅貼の可能性がある。

3号墓（第3図・第5図）

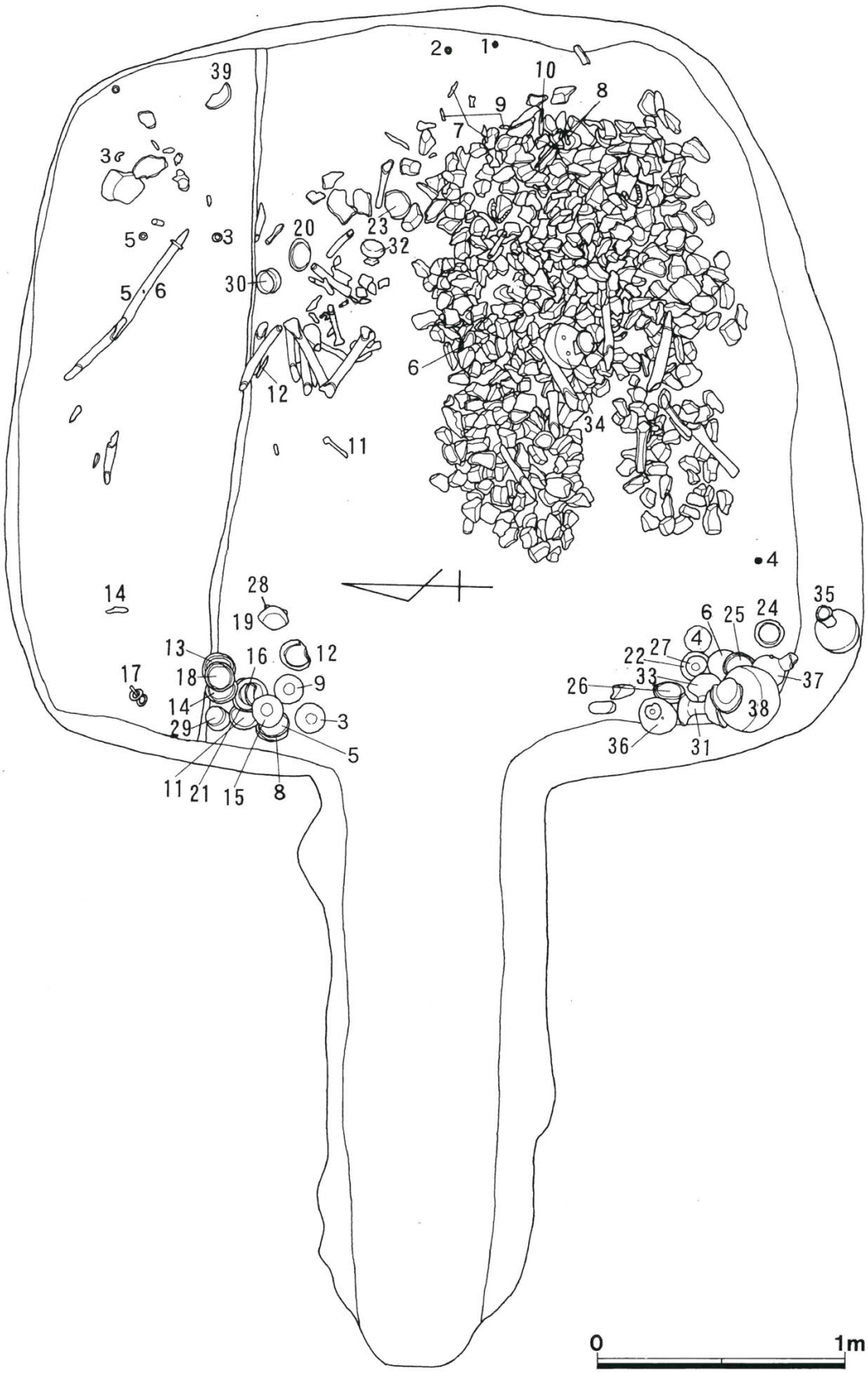
3号墓出土鉄製品は、第5図－18の大刀、19の刀子がある。大刀は、礫床の横から、刀子は、礫床の中央から出土した。

18は、全長47.5㎝を測る。付着した土が鍔から切先まで覆っていて、関の構造など不明な点が多い。切先近くで刃部の幅2.5㎝を測る。茎の目釘孔は、確認できない。鉄製鍔がはまっている。

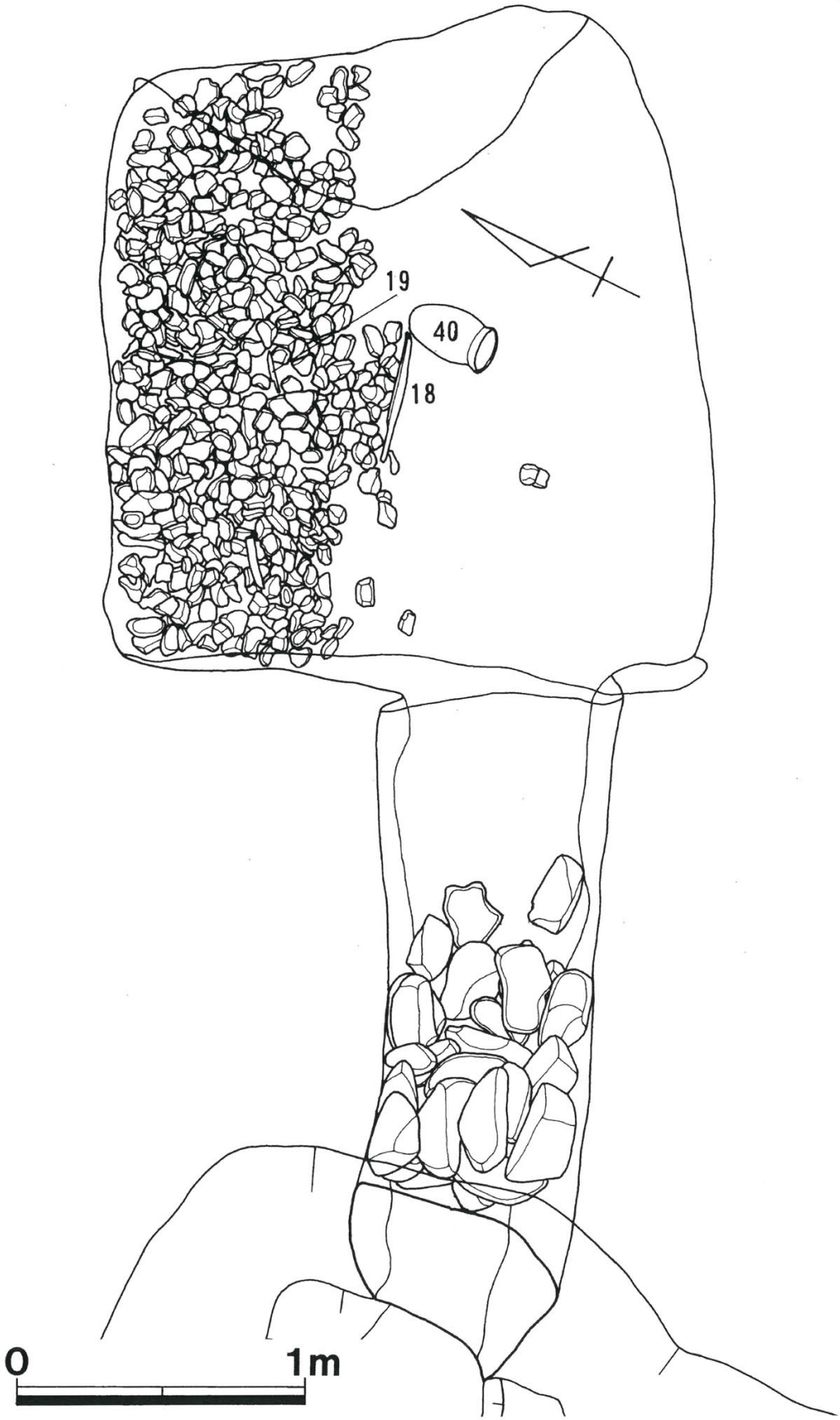
19は、全長16.3㎝を測る。刃側の関は確認できる。



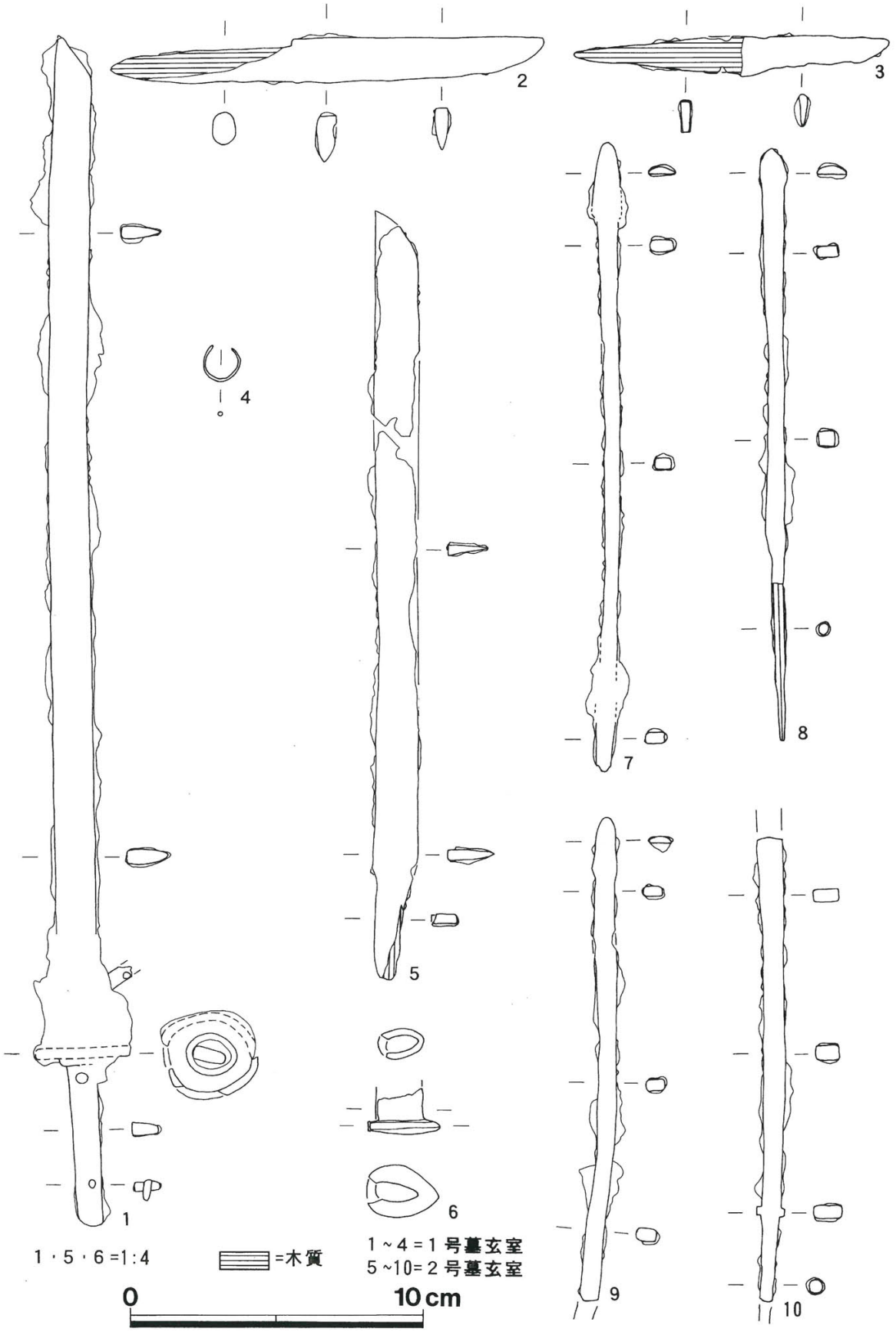
第１図　１号墓平面実測図



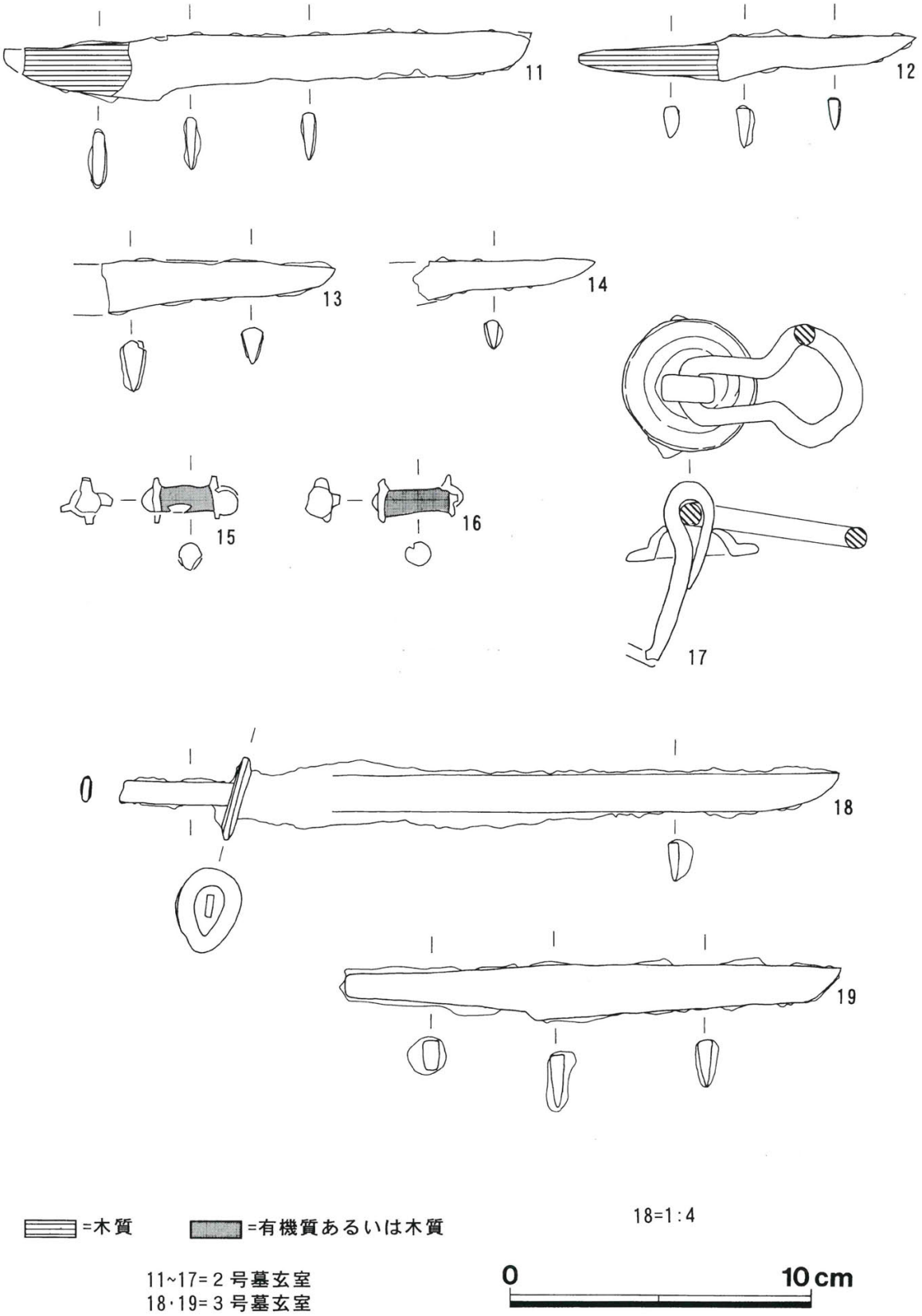
第２図　２号墓平面実測図



第３図　３号墓平面実測図



第4図　鉄製品実測図(1)


11
12
13
14
15
16
17
0
18
19
=木質
=有機質あるいは木質
18=1:4
11~17=2号墓玄室
18・19=3号墓玄室
0
10cm

第5図　鉄製品実測図(2)

図版 1

1

5

2

3

7

8

9

10

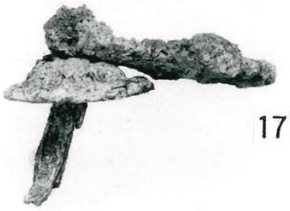
図版 2

11

12

13

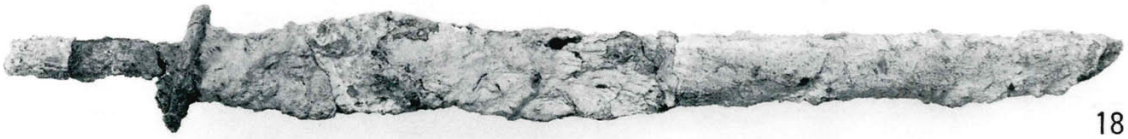
14



17

15

16



18

19

Ⅲ　本村横穴墓群Ｅ群出土の金属製品

本村横穴墓群Ｅ群出土金属製品は、鉄製品と金銅製品がある。鉄製品は、刀子、鏃、大刀、馬具がある。金銅製品は、３号墓から出土した馬具である。

１号墓（第１図・第３図－１）

１は、１号墓から出土した刀子の刃部で、切先を欠損する。

２号墓（第１図・第３図－２～７）

２号墓からは、鉄製品、ガラス小玉２、砥石が出土している。鉄製品と砥石は、玄室右壁沿いの中央付近からまとまって出土した。

２は、鉄鏃の鏃身と頸部の破片である。鏃身は、五角形状を呈すると考えられる。

３は、現存長10.9㎝を測る鏃であるが、鏃身と頸部の境は明瞭ではない。

４は、現存長14.2㎝を測る。鏃身は、長三角形で長さ3.3㎝を測る。関は、肉眼で観察する限り、斜関である。茎部を欠損する。

５は、現存長12.5㎝を測り、鏃身と茎部を欠損する。関部は、肉眼で観察する限り斜関である。

６の刀子は、現存長12.7㎝を測る。切先を欠損する。関部に鎹と考えられる金属がはまる。刃部は使用によりすり減っている。

７は、刀子の刃部破片である。

３号墓（第２図・第３図－８～15）

３号墓からは、土器、鉄製品、金銅製品、玉類が出土しているが、盗掘を受けた時に破損したと考えられるものが多く、また原位置を保つものはほとんどない状態と考えられる。

８は、現存長11.5㎝を測る鉄鏃で、茎部を欠損する。鏃身は、三角形で、長さ2.4㎝を測る。

９の刀子は、現存長12.6㎝を測る。関は明瞭ではない。切先を欠損する。

10は刀子の刃部で、現存長10.4㎝を測る。切先を欠損する。

11は、鉄製の鎹で、欠損、変形が見られる。

12は、大刀の刃部の破片で、欠損が著しく切先、関の区別がつかない。

13は、鉄製の鍔である。

14は、鉄製鉸具の破片と考えられる。

15は、鐙の吊り金具の破片と考えられる。

金銅製品（第４図）

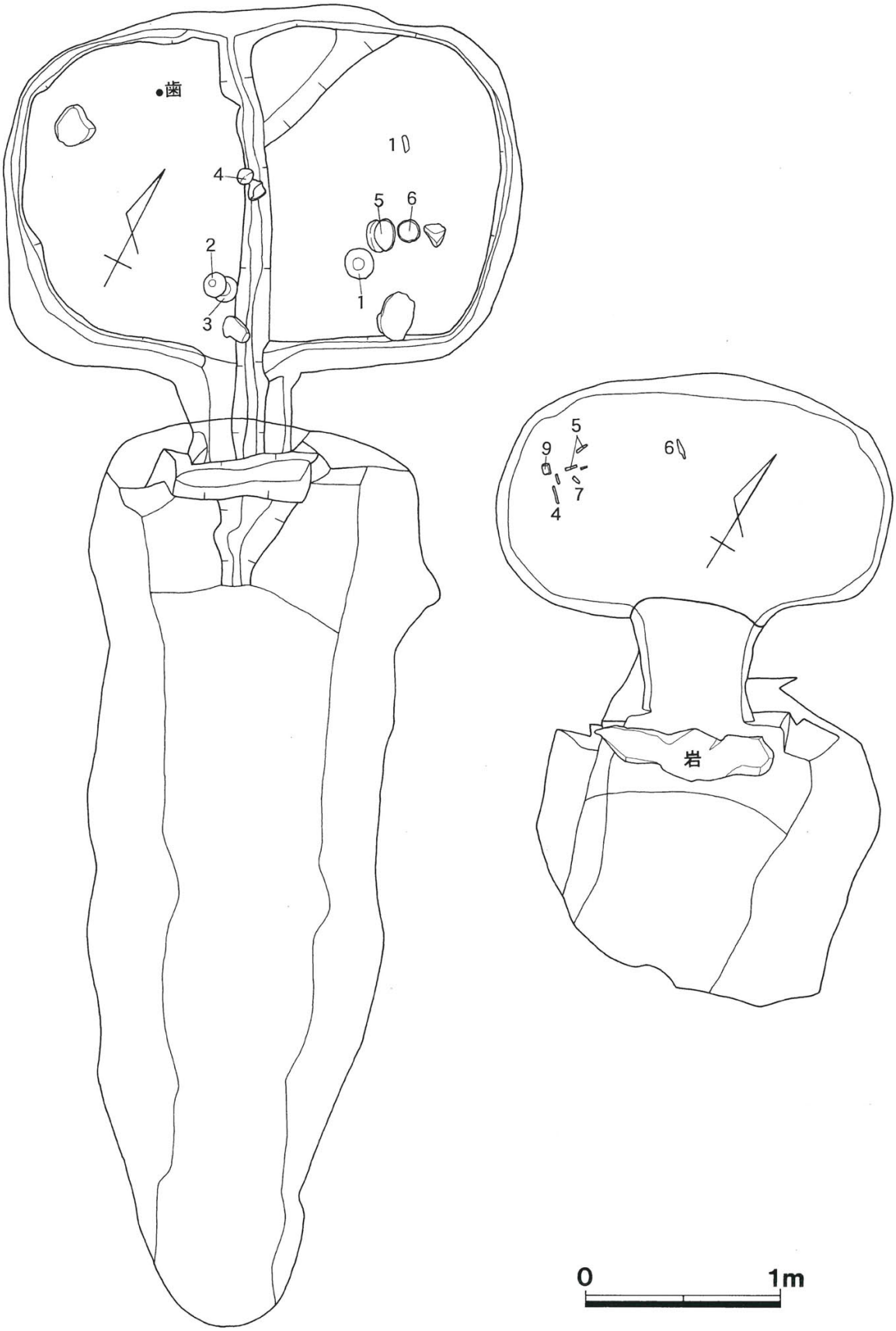
金銅製品は、杏葉、辻金具、雲珠、帯飾り金具がある。

１～３は、心葉形三葉文透かしの杏葉である。縁付きの三葉文の形に抜いた鉄台の上に金銅製の縁付きの透かし金具を載せ、金銅をかぶせた鋲で止めている。最大幅は、１が8.9㎝、２が9.2㎝、３が9.1㎝を測る。１と２は、８本の鋲で、３は６本の鋲で留められている。１～３は、立聞を欠損する。

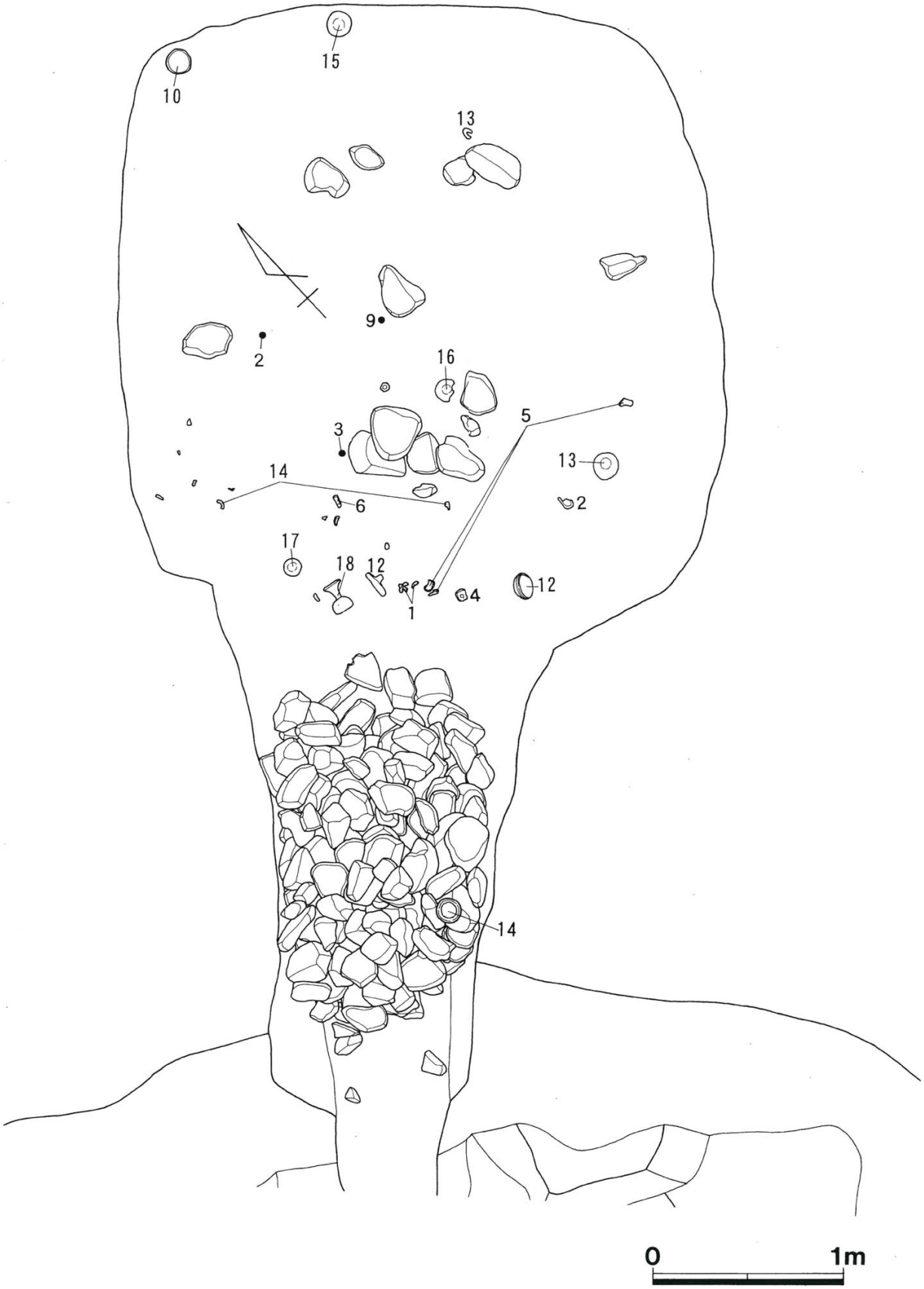
４は、鉄地に金銅をかぶせた辻金具で４本の足のうち２本を欠損する。頂部に鋲が付く。体部の側面に２条の凹線が巡る。

５は、鉄地に金銅をかぶせた雲珠で、体部の２分の１、足の大半を欠損する。体部に３条の凹線が巡る。体部の直径は、12.6㎝を測る。

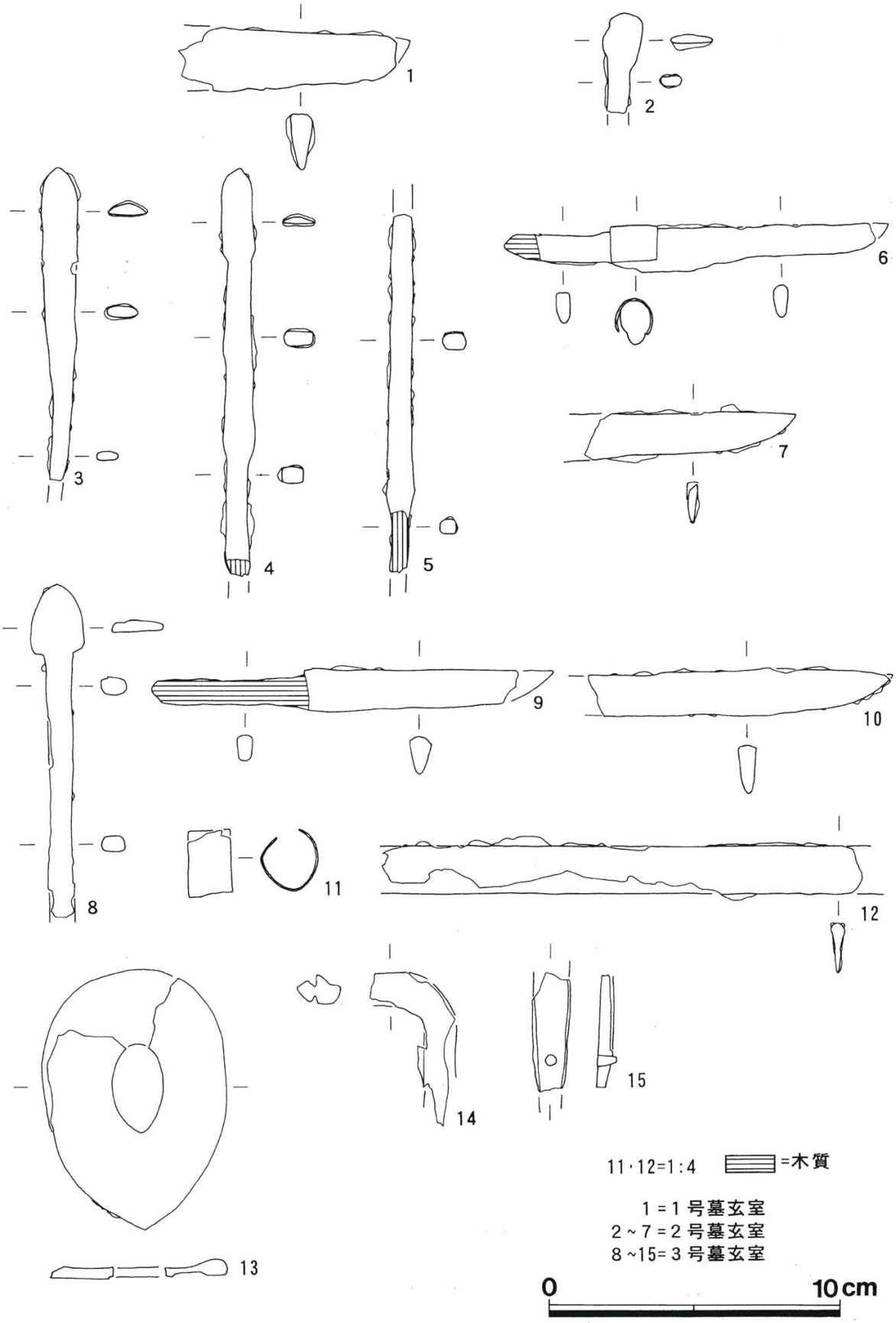
６の帯飾り金具は、鉄地に金銅をかぶせ、幅９㎜の鉄製の責金具がはまる。鋲が２本打たれていて、鉄製責め金具のところで欠損している。７～９は、鉄地金銅貼の帯金具である。10～13は、辻金具か雲珠の足と考えられる。



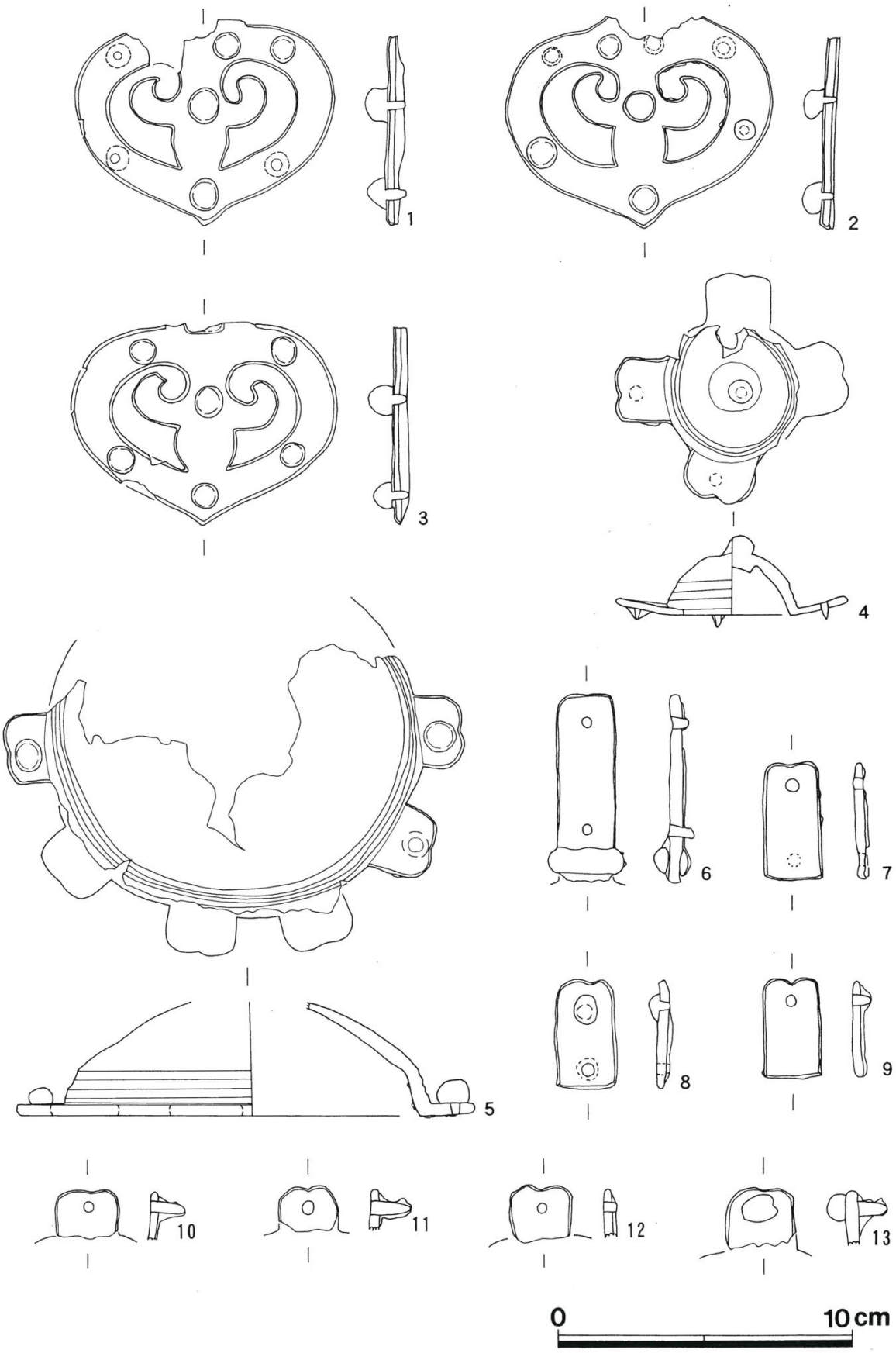
第１図　１号墓(左)・２号墓(右) 平面実測図



第２図　３号墓平面実測図

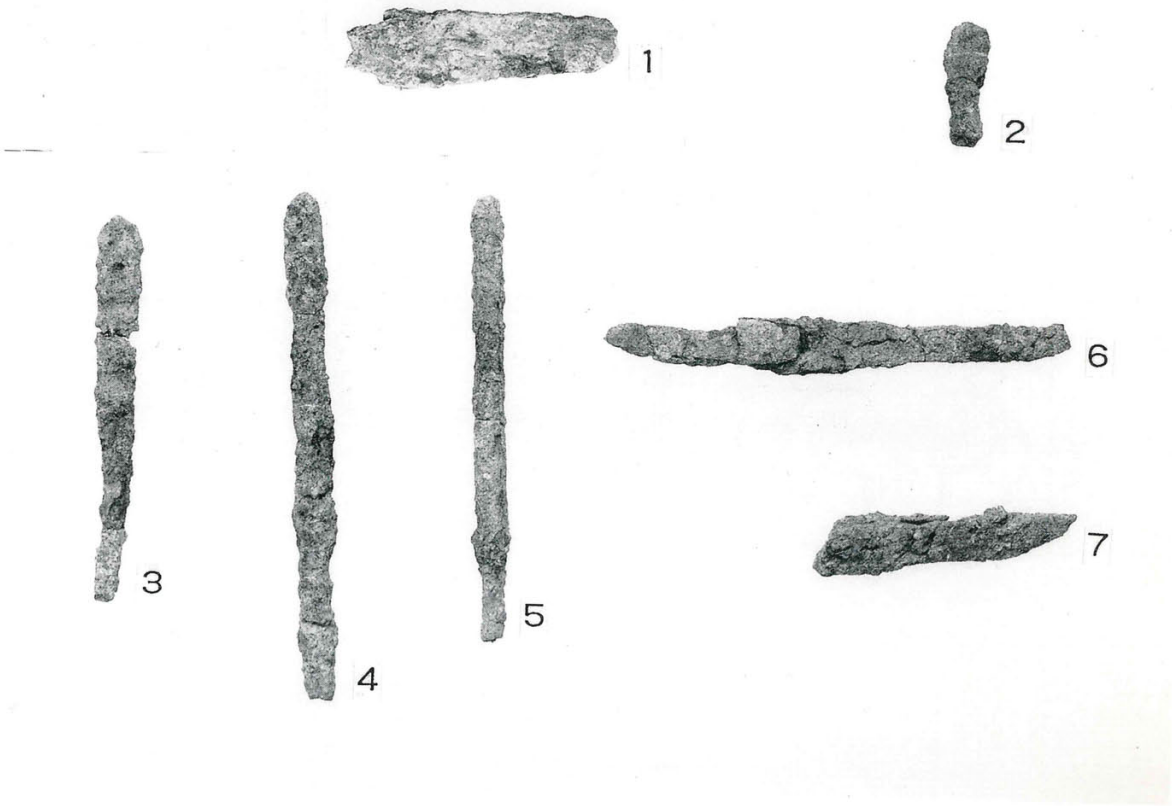

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
11・12=1:4
=木質
1＝1号墓玄室
2～7＝2号墓玄室
8～15＝3号墓玄室
0
10cm

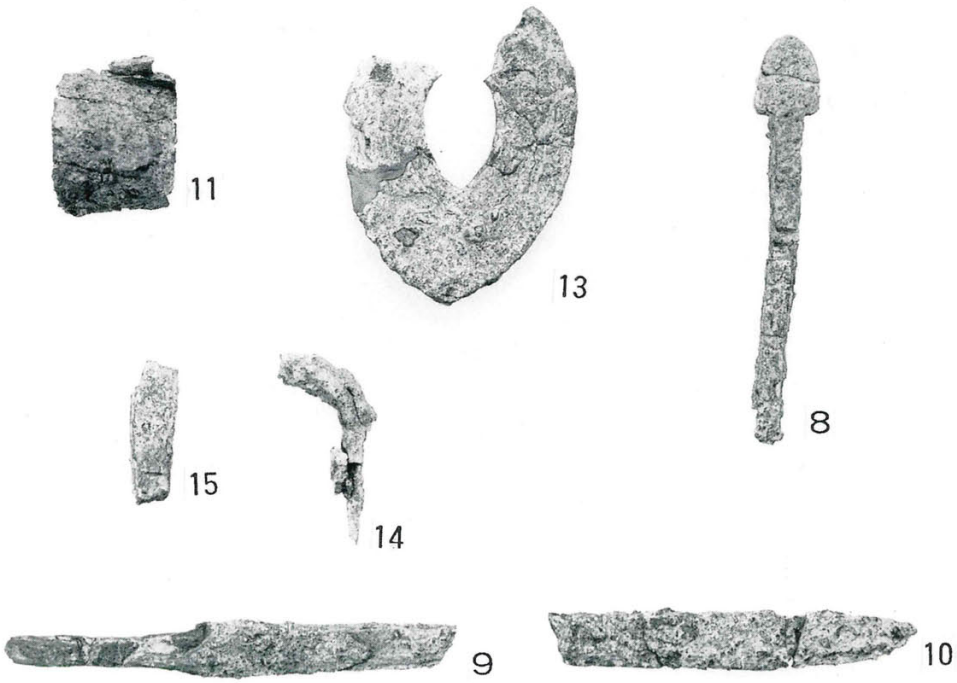
第3図　鉄製品実測図



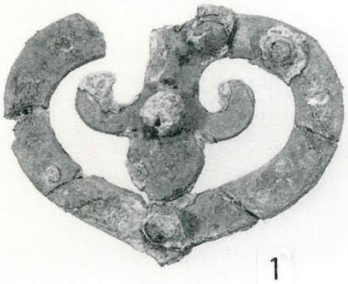
第４図　金銅製品実測図

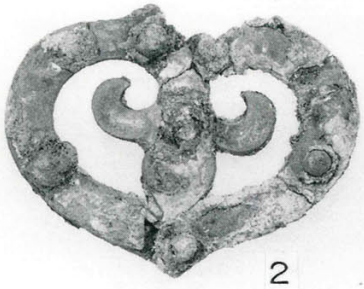
図版 1

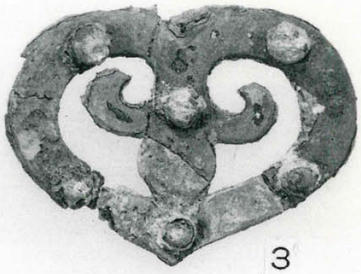


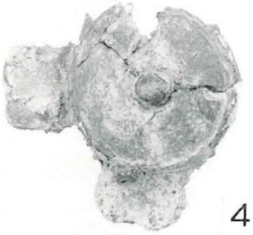


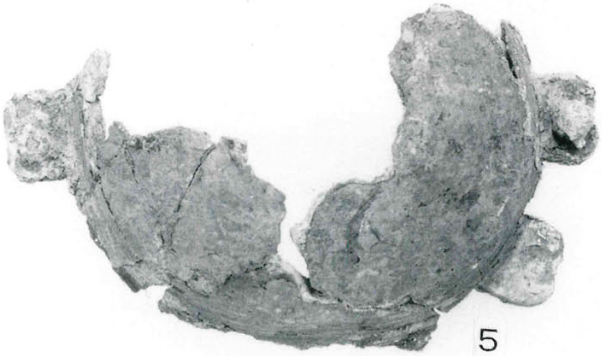
図版 2


1


2


3


4


5

6

7

9

8

10

11

13

12

報告書抄録

ふりがな	かけがわしながやとちくかくせいりようちないいせきはっくつちょうさほうこくしょ に
書名	掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ
副書名	十郎ヶ谷遺跡　入込遺跡　向山横穴墓群　浅間神社古墳群３号墳　前山横穴墓群 寺ヶ谷横穴墓群
編集者名	前田庄一
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の１　ＴＥＬ（0537）21-1158
発行年月日	西暦 2003年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
十郎ヶ谷遺跡	静岡県掛川市 長谷1541－2外	22213	524	34度 45分 41秒	137度 59分 44秒	19960730 ～ 19960920	150㎡	区画整理事業
入込遺跡	静岡県掛川市 長谷1600外	22213	525	34度 45分 40秒	137度 59分 40秒	19960730 ～ 19961120	340㎡	区画整理事業
向山横穴墓群	静岡県掛川市 長谷1825－1外	22213	514	34度 45分 42秒	137度 59分 30秒	19960918 ～ 19961227	330㎡	区画整理事業
浅間神社古墳群３号墳	静岡県掛川市 長谷1824外	22213	68－3	34度 45分 39秒	137度 59分 34秒	19961218 ～ 19970814	2,300㎡	区画整理事業
前山横穴墓群	静岡県掛川市 長谷1823外	22213	511	34度 45分 40秒	137度 59分 34秒	19970415 ～ 19970814	390㎡	区画整理事業
寺ヶ谷横穴墓群	静岡県掛川市 下俣29－21外	22213	89	34度 45分 30秒	138度 0分 13秒	19981214 ～ 19990331	280㎡	区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
十郎ヶ谷遺跡	墓跡	近世	土坑墓	土器・銭貨	
入込遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡	土器	
向山横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	土器・鉄器・玉	
浅間神社古墳群３号墳	古墳	古墳時代	古墳	埴輪・土器・鉄器	
前山横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	土器・鉄器・玉	
寺ヶ谷横穴墓群	横穴墓	古墳時代	古墳	土器	

掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

・十郎ヶ谷遺跡
・入込遺跡
・向山横穴墓群
・浅間神社古墳群３号墳
・前山横穴墓群
・寺ヶ谷横穴墓群

平成15年３月14日

編集発行　掛川市教育委員会
掛川市長谷701-1
TEL (0537) 21-1158

印 刷 所　株式会社 彩光堂
掛川市宮脇248-1
TEL (0537) 24-0013